

序 文

平成20（2008）年度から広島大学と庄原市で進めてきた佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査事業であるが、ようやく佐田峠墳墓群の発掘調査に関する報告として本書を上梓することができた。同時に本書を広島大学大学院文学研究科考古学研究室調査報告第3冊としたい。

庄原市は平成17年に周辺町村（比婆郡西城町・東城町・口和町・高野町・比和町・甲奴郡総領町）との大合併を実現した。中国地方で最大の行政区域をもつこととなり、「さとやま文化都市」としてあらたな行政施策が打ち出されていくこととなった。これまで広島大学考古学研究室では帝釈峽遺跡群の調査研究の一環として、東城町東山岩陰遺跡の発掘調査を行ってきており、帝釈峽遺跡群における縄文時代キャンプサイトの性格を探ってきた。今回、東山岩陰遺跡の発掘調査終了と東城町の庄原市への合併時期が重なり、旧庄原市内での調査対象地が模索されることとなったと聞いている。このため、佐田谷墳墓群の周辺において確認されていた佐田峠墳墓群の実態解明を目的とした調査研究を庄原市教育委員会とともに開始することとなった。

平成20（2008）年度から平成24（2012）年度まで、毎年野外実習授業の一環として佐田峠墳墓群の発掘調査を計画し、調査成果の発信を行ってきた。本共同研究事業の推進は、考古学研究室（大学院文学研究科地表圏システム学講座考古学分野）に在籍する大学院生・学部生にとっては考古学野外実習の格好の教材ともなり、大いに研さんを深めることができた。

庄原市教育委員会には相当な無理をお願いすることもあったが、調査計画について柔軟に対応いただき、調査機材等についても快く貸与いただいた。感謝したい。また、発掘調査では、大学院生が学部生を指導しつつ、情熱をかけて遺構の検出を行ってくれた。本報告は遺構と真摯に向き合ってくれた学生諸氏が試行錯誤を繰り返しつつも墳丘墓の実態を明らかにしていった様子を伝える記録でもある。その甲斐あって、弥生時代の墳丘墓の発達に関する重要な知見を得ることができたのである。それとともに、本事業の推進が、庄原市の古代文化のすばらしさについて庄原市民の皆さんに伝えることにつながれば、望外の喜びである。

本書の刊行にあたって、庄原市当局ならびに教育委員会、その他関係各位の格別のご支援に感謝の意を表したい

平成28年3月

広島大学大学院文学研究科
野島 永

序 文

平成17年3月31日、庄原市と比婆郡5町、甲奴郡1町が合併し、広大な市域をもつ新生庄原市が誕生し、10周年を迎えました。

尾道松江線も全線開通し、本市へのアクセスも向上している中ではありますが、本市は、中山間地域特有の人口の減少、少子高齢化の進行などの問題を抱えているのも現状です。

この問題の脱却や課題解決をはかり、活力のある庄原の実現に向け、人材育成を基盤とする庄原市教育振興基本計画を策定し、ふるさと庄原の学びや体験をとおして「庄原で学んで良かったと思える教育」を市民が一緒になって創ってきており、本市の素晴らしさが実感できるよう教育活動を推進しているところです。

さて、本市は史跡「寄倉岩陰遺跡」をはじめとして、多くの文化財が集中している地域であり、旧比婆郡東城町時代から続く「帝釈峽遺跡群」の調査も50年を越え、文化財の宝庫として全国的にも注目されているところです。

また、本市の重要遺跡である、佐田谷・佐田峠墳墓群の史跡指定を目指し、平成20年度から広島大学と共同研究により、遺跡の調査を本格的に実施してまいりました。

こうした遺跡群の調査結果から、弥生時代中期から後期にかけての、この地域特有の「四隅突出型墳丘墓」を中心とした弥生墳墓群の存在が明らかになりました。この「四隅突出型墳丘墓」は後に出雲の西谷墳墓群に影響を与えたとされる重要なものであり、その初現的形態並びに多様な墓の形態が庄原地域で見つかったことは大変意義深いものと考えております。

この発掘調査で明らかになったことが、市民の皆様に驚きと感動を与えることができ、本書が、本市の歴史を垣間見ることのできる資料となれば幸いです。

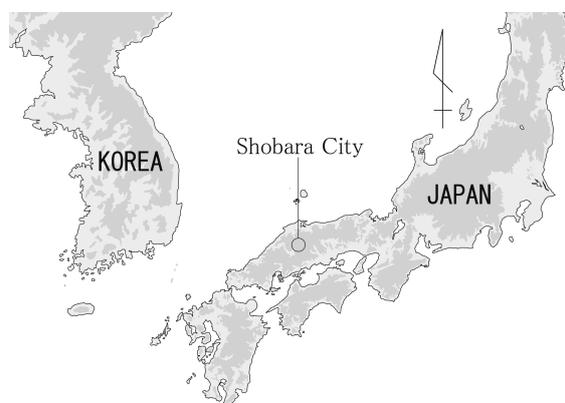
終わりにになりましたが、発掘調査から報告書作成までお世話になりました、広島大学や関係者の皆様、また地元の方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成28年3月

庄原市教育委員会
教育長 牧原明人

例 言

- 1 本書は広島県庄原市宮内町佐田谷・佐田峠他に所在する佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書〈調査編(1)〉である。国立大学法人広島大学(広島大学大学院文学研究科)と庄原市教育委員会の連携による調査成果である。
- 2 佐田谷・佐田峠墳墓群は(財)広島県埋蔵文化財センターおよび庄原市教育委員会、広島大学によって現地発掘調査が行われた。調査担当者と調査区・調査期間は以下のとおりである。



庄原市の位置

広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財センターによる佐田谷墳墓群の発掘調査

調査担当者 広島県教育委員会 桑原隆博

(財)広島県埋蔵文化財センター 妹尾周三・岩本芳幸

調査区 佐田谷1号墓・2号墓・3号墓

調査期間 昭和61年4月7日～6月20日

平成9年度広島県教育委員会・庄原市教育委員会による佐田峠墳墓群の試掘調査

調査担当者 広島県教育委員会 辻 満久・桑原隆博・大上裕士・加藤 謙

庄原市教育委員会 谷本 寛・稲垣寿彦・今西隆行

調査区 佐田峠墳墓群A～C地区

調査期間 平成9年7月14日～7月24日

広島大学大学院文学研究科考古学研究室による測量調査

第1次調査 調査担当者 広島大学大学院文学研究科 野島 永

調査区 佐田峠墳墓群A・C地区(地形測量)

調査期間 平成19年8月5日～8月31日

広島大学大学院文学研究科考古学研究室と庄原市教育委員会の連携による共同調査

第2次調査 調査担当者 広島大学大学院文学研究科 野島 永

庄原市教育委員会生涯学習課 今西隆行

調査区 佐田峠墳墓群C地区(3号墓)

調査期間 平成20年8月4日～9月14日

第3次調査 調査担当者 広島大学大学院文学研究科 野島 永

庄原市教育委員会生涯学習課 荒平 悠

調査区 佐田峠墳墓群C地区(3・4・5号墓)

調査期間 平成21年8月4日～9月18日

第4次調査 調査担当者 広島大学大学院文学研究科 野島 永

庄原市教育委員会生涯学習課 荒平 悠

調査区 佐田峠墳墓群C地区(4号墓)

調査期間 平成22年8月25日～9月18日

第5次調査 調査担当者 広島大学大学院文学研究科 野島 永

庄原市教育委員会生涯学習課 辻村哲農

調査区 佐田峠墳墓群A地区(1・2号墓)

調査期間 平成23年8月24日～9月18日

第6次調査 調査担当者 広島大学大学院文学研究科 野島 永

庄原市教育委員会生涯学習課 辻村哲農

調査区 佐田谷2・3号墓、佐田峠墳墓群A地区（1・2号墓）

調査期間 平成24年8月24日～9月17日

第7次調査 調査担当者 庄原市教育委員会生涯学習課 辻村哲農

調査区 佐田谷3号墓

調査期間 平成26年3月10日～3月19日

第8次調査 調査担当者 庄原市教育委員会生涯学習課 辻村哲農

調査区 佐田谷3号墓

調査期間 平成27年3月12日～3月24日

3 発掘調査における写真撮影および記録作成については、おもに調査担当者の野島と辻村、広島大学大学院文学研究科大学院生・広島大学文学部学生が行った。検出遺構の製図や出土遺物の観察・実測・製図・写真撮影等は広島大学大学院文学研究科考古学研究室において行った。

4 本書のレベル（標高）は海拔を示している。方位・座標は国土座標（第VI系）に依拠した。

5 本総括報告の執筆分担を以下に示す。

第I章……………野島 永（広島大学文学研究科）

第II章……………野島 永

第III章……………野島 永

第IV章……………野島 永・斉藤 礼（現 福岡県宮若市教育委員会）

第V章……………野島 永・石貫弘泰（現 愛媛県埋蔵文化財センター）・

辻村哲農（現 広島県庁観光課）・宮岡昌宣（広島大学文学研究科後期課程修了）・小林昂博・齊

藤友紀（現 福岡県大野城市教育委員会）・矢部俊一（現 島根県大田市教育委員会）・脇山佳奈

（現 徳島大学）・今津和也（現 岐阜県郡上市教育委員会）・谷口早季（現 広島県江田島市役所）・

横山瑛一（現 宮崎県西都市教育委員会）・津田真琴（現 広島県東広島市出土文化財管理セン

ター）・今福拓哉（現 島根県江津市教育委員会）・小森由佳利・村田 晋（現 岡山県総社市教育

委員会）・藤井雅大（現 愛知県一宮市教育委員会）

第VI章……………村田 晋・小森由佳利・谷口早季・横山瑛一

第VII章……………野島 永・今福拓哉・村田 晋・パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

第VIII章……………野島 永

第IX章……………野島 永

註……………野島 永・今福拓哉・村田 晋

引用・参考文献……………野島 永・今福拓哉・村田 晋

要約……………野島 永・シュタインハウス ウェルナー

なお、全体の文章表現の一部調整については、野島と今福、そして村田が協議して行った。

6 現地発掘調査は以下の広島大学大学院文学研究科院生・広島大学文学部学生、庄原市民らが参加した。

第1次調査

広島大学大学院博士課程前期生：斉藤 礼

広島大学学部生：田中慎一・兼弘奈津枝・鎌田勝也・齊藤友紀・谷真由美・板木達也・竹内琢也・谷口早

季・谷本光紀・三輪宜生・横山瑛一・若月美佳

同志社大学学部生：大本朋弥

第2次調査

広島大学大学院博士課程後期生：石貫弘泰

広島大学大学院博士課程前期生：辻村哲農・小林昂博・宮岡昌宣

広島大学学部生：谷口早季・細石朋希・三輪宜生・横山瑛一・安部智洋・今福拓哉・上田 瞳・小川原励・

小林 彬・小森由佳利・野村友規

第3次調査

広島大学大学院博士課程前期生：齊藤友紀・矢部俊一

広島大学学部生：今福拓哉・小川原励・小林 彬・小森由佳利・野村友規・伊川桃子・小林新平・清水麻衣・田頭英尚・伯田桂太・東 麻衣・三浦 晋・水川祐樹

パリ第4大学大学院生：ミシェル グザビエ

第4次調査

広島大学大学院博士課程後期生：脇山佳奈

広島大学大学院博士課程前期生：齋藤友紀・津田真琴・今津和也・谷口早季・横山瑛一

広島大学学部生：伊川桃子・小林新平・東 麻衣・松永直輝・三浦 晋・水川祐樹・関内由衣・中神恵美・藤井翔平

第5次調査

広島大学大学院博士課程後期生：脇山佳奈

広島大学大学院博士課程前期生：今福拓哉・小森由佳利

広島大学学部生：市川伯博・関内由衣・中神恵美・森本卓馬・森本直人・赤木智香・上利碧月・川添敦史・戸川貴大・中田南美・林 美和・三輪剛史・山本晃弘

第6次調査

広島大学大学院博士課程前期生：今福拓哉・藤井雅大・村田 晋

広島大学学部生：戸川貴大・三輪剛史・山本晃弘・浅井美雪・大嶋健介・金森大輝・北之園直哉・古久保 茜

庄原市民：井上勝介・太田代郁子・小池 誠・西山明夫・楨平勇荘・橋井輝男

第7次調査

庄原市民：森吉 正・奥田虎昭・寺岡隆行・橋井輝男

第8次調査

庄原市民：寺岡裕記・小池毅司・奥田虎昭・藤森勲猪・水本日出年・橋井輝男

- 7 検出遺構等の説明については、概要報告の執筆内容を踏襲した。それ以後に判明した事実や墳丘規模などに関わる数値については、本報告において訂正した部分がある。遺物実測図作成・遺物写真撮影については調査年次ごとに広島大学考古学研究室の大学院生が担当したが、平成25(2013)年、大学院前期課程に在籍していた村田 晋(現 総社市教育委員会)・藤井雅大(現 一宮市教育委員会)・市川伯博(広島大学大学院)・藤井翔平(現 岡山県教育委員会)らが修正し、再度トレースを行った。最終校正には池西美咲(広島大学文学部)が協力した。
- 8 本報告は広島大学大学院文学研究科考古学研究室と庄原市教育委員会が提携して推進している共同研究『佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査』(研究代表者：古瀬清秀)および、『四隅突出型墳丘墓の発達に関する考古学的研究』と題する科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号23520922(研究代表者：野島 永))による調査研究の成果を掲載した。
- 9 本書の作成にあたっては、以下の機関、関係諸氏からご教示・ご協力を賜った。記して感謝したい。
奥出雲町教育委員会(公財)広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 広島県歴史民俗資料館 総社市教育委員会
池西美咲 池淵俊一 伊藤 篤 岩崎 誠 植田千佳穂 恵谷泰典 加藤 謙 加藤光臣 兼藤英明 唐口勉三 君嶋俊行 桑原隆博 後藤研一 澤田秀実 實盛良彦 妹尾周三 高尾昭浩 高橋進一 武田祐三 立畑春夫 寺岡隆行 徳永泰臣 野村弘美 葉杖哲也 濱田延充 平井典子 福田和典 藤原好二 松本岩雄 三上一城 向田裕始 若林邦彦 渡邊貞幸
- 10 調査区・検出遺構については、平面図・断面図・立面図などを作成したほか、3Dスキャニングによって、5mmメッシュの3次元点群データを記録した。なお、調査地域周辺および墳丘墓の3Dスキャニングに関しては、(株)アラタニ建設コンサルタント地理情報課藤英明氏にご協力をいただいた。記して感謝したい。

- 11 本書はこれまで広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査年報に掲載した概要報告と発掘調査の調査記録をもととし、野島永が編集した。また、発掘調査に複数年参加し、学部生の指導を行った今福拓哉・村田晋がこれを補佐した。

目 次

序 文	i
序 文	ii
例 言	iii
I. はじめに	1
II. 佐田谷・佐田峠墳墓群の環境	2
第1節 歴史的環境	2
第2節 周辺の遺跡	3
(1) 旧石器時代・縄文時代	3
(2) 弥生時代	3
(3) 古墳時代	4
III. 発掘調査の経緯と経過	5
第1節 国道183号線建設にともなう発掘調査（財広島県埋蔵文化財センター）	5
第2節 共同研究とその調査の経緯（広島大学・庄原市教育委員会）	6
(1) 広島県教育委員会・庄原市教育委員会による試掘調査	6
(2) 広島大学考古学研究室による測量調査（第1次調査）	7
(3) 共同研究における各年次調査とその概要	8
(4) 佐田谷・佐田峠墳墓群に関する普及啓発・調査研究活動	10
IV. 佐田峠墳墓群の試掘および測量調査	13
第1節 試掘調査	13
(1) 佐田峠墳墓群A地区トレンチ調査	13
(2) 佐田峠墳墓群B地区トレンチ調査	13
(3) 佐田峠墳墓群C地区トレンチ調査	14
第2節 測量調査	15
(1) 測量手順	15
(2) 平板測量	19
(3) 3Dスキャニング	19
V. 佐田峠墳墓群の発掘調査	21
第1節 佐田峠1号墓	21
(1) 調査区設定	21

	(2) 墳丘規模と土層堆積状況	23
	(3) 検出遺構	25
第2節	佐田峠2号墓	28
	(1) 調査区設定	28
	(2) 墳丘規模と土層堆積状況	29
	(3) 検出遺構	31
第3節	佐田峠3号墓	35
	(1) 調査区設定	35
	(2) 墳丘規模と土層堆積状況	38
	(3) 検出遺構	42
第4節	佐田峠4号墓	50
	(1) 調査区設定	50
	(2) 墳丘規模と調査進行状況	53
	(3) 検出遺構	55
第5節	佐田峠5号墓	59
	(1) 調査区設定	59
	(2) 墳丘規模と土層堆積状況	59
	(3) 検出遺構	60
第6節	溝SD05他	61
	(1) 調査区設定	61
	(2) 土層堆積状況	61
	(3) 検出遺構	61
VI. 出土遺物		65
第1節	土器	65
	(1) 佐田峠1号墓	65
	(2) 佐田峠2号墓	67
	(3) 佐田峠3号墓	68
	(4) 佐田峠4号墓	74
	(5) 佐田峠5号墓	74
第2節	その他の遺物	75
	(1) 鉄 鍬	75
	(2) 石鍬・石器剥片他	75
VII. 調査成果		77
第1節	各墳丘墓の形態と構築時期	77

(1) 墳丘墓の築造順序	77
(2) さまざまな墳墓形態	77
(3) 弥生時代中期段階	77
(4) 弥生時代後期段階	79
第2節 墳丘構築の変化と埋葬施設の墓壙配置	80
(1) 墳丘構築方法の変化と墳墓間格差	80
(2) 墓壙規模とその配置	81
第3節 墳丘墓における土器配置状況の変化	81
第4節 放射性炭素年代測定	82
(1) はじめに	82
(2) 試料と方法	82
(3) 結 果	83
(4) 考 察	85
VIII. 総 括	86
IX. おわりに	87
註	88
引用・参考文献	89
要 約	92

挿図目次

第1図	佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要遺跡分布図 (1/50,000)	2
第2図	佐田谷1号墓発掘調査風景 (広島県埋蔵文化財センター、1987年)	5
第3図	佐田峠4号墓検出状況 (庄原市試掘調査C地区5 tr., 1997年)	6
第4図	佐田峠5号墓検出状況 (庄原市試掘調査C地区5 tr., 1997年)	6
第5図	佐田峠墳墓群発掘調査の現地説明会 (佐田峠4号墓、2009年)	10
第6図	庄原市教育委員会による調査地区と試掘トレンチ配置図	14
第7図	佐田峠墳墓群測量杭位置路線図	17
第8図	佐田峠1・2号墓測量図 (3Dスキャニングによる機械測量)	18
第9図	佐田峠3～5号墓測量図 (3Dスキャニングによる機械測量)	19
第10図	佐田峠1・2号墓調査区配置図	22
第11図	佐田峠1号墓墳頂平坦部 r 調査区平面図	24
第12図	佐田峠1号墓墓壙 ST08検出面土器出土状況	25
第13図	佐田峠1号墓墳丘周辺部 n 調査区平面図	26
第14図	佐田峠1号墓土層図	27
第15図	佐田峠2号墓墳頂平坦部 q 調査区平面図	29
第16図	佐田峠2号墓墳丘周辺部 l 調査区平面図	30
第17図	佐田峠2号墓墳丘周辺部 m 調査区平面図	31
第18図	佐田峠1号墓 p 調査区および佐田峠2号墓墳丘周辺部 o 調査区平面図	32
第19図	佐田峠2号墓土層図	33
第20図	佐田峠3～5号墓調査区配置図	36
第21図	佐田峠3号墓調査区配置図	37
第22図	佐田峠3号墓 a・f 調査区平面図	39
第23図	佐田峠3号墓 a 調査区平面図・土層図	41
第24図	佐田峠3号墓 b 調査区平面図・土層図・立面図・側面図	43
第25図	佐田峠3号墓 c 調査区平面図・土層図・立面図・側面図	44
第26図	佐田峠3号墓 d 調査区平面図・土層図・立面図・側面図	45
第27図	佐田峠3号墓 e 調査区平面図・土層図	46
第28図	佐田峠3号墓復原図	48
第29図	佐田峠3号墓墳丘構築想定図	49
第30図	佐田峠4号墓平面図・土層図	51
第31図	佐田峠4号墓 g 調査区平面図	52
第32図	佐田峠4号墓 i 調査区平面図	53
第33図	佐田峠4号墓 j 調査区平面図	54
第34図	佐田峠4号墓周溝土層図	57
第35図	佐田峠5号墓 h 調査区平面図	60
第36図	佐田峠 k 調査区平面図・土層図	62
第37図	佐田峠1号墓出土土器	67
第38図	佐田峠2号墓出土土器	68
第39図	佐田峠3号墓出土土器 (1)	69
第40図	佐田峠3号墓出土土器 (2)	71
第41図	佐田峠3号墓出土土器 (3)	73
第42図	佐田峠4号墓出土土器	74
第43図	佐田峠5号墓出土土器	75

第44図	佐田峠出土遺物	76
第45図	墳丘構築方法の差異	80
第46図	年代測定試料の外観	83
第47図	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	84

挿表目次

第1表	佐田峠墳墓群座標一覧	16
第2表	測定試料および処理	84
第3表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	85
第4表	佐田峠1号墓墳頂平坦部 r 調査区 (第14図1・2)	93
第5表	佐田峠1号墓南端 n 調査区 (第14図3)	93
第6表	佐田峠1・2号墓隣接部分西端 o・p 調査区 (第14図4、第19図8・9)	93
第7表	佐田峠2号墓墳頂平坦部 q 調査区 (第19図5)	94
第8表	佐田峠2号墓北端 l 調査区 (第19図6)	94
第9表	佐田峠1・2号墓隣接部分中央 m 調査区 (第19図7)	94
第10表	佐田峠3号墓 a - e 調査区 (第23図1・2、第24～27図)	95
第11表	佐田峠4号墓墳丘 g 調査区 (第30図1・2、第34図1～9)	97
第12表	佐田峠4号墓北西隅 i 調査区 (第34図10・11・12・14)	98
第13表	佐田峠4号墓南西隅 j 調査区 (第34図13・15)	99
第14表	佐田峠4号墓北側検出遺構 SD05・ST10 (k 調査区) (第36図1・2)	99

図版目次

図版第 1	(1) 佐田谷・佐田峠墳墓群遠景（南東から）	102
	(2) 佐田谷・佐田峠墳墓群遠景（南西から）	102
図版第 2	(1) 佐田峠 1 号墓近景（北西から）	103
	(2) 佐田峠 1 号墓近景（北から）	103
図版第 3	(1) 1 号墓 r 調査区遺構検出状況（東から）	104
	(2) 1 号墓 r 調査区 ST08 検出状況（北から）	104
図版第 4	(1) 1 号墓 r 調査区 ST08 土器出土状況（北から）	105
	(2) 1 号墓 r 調査区 ST09・SX10 検出状況（北から）	105
図版第 5	(1) 1 号墓 r 調査区 SX10 検出状況（東から）	106
	(2) 1 号墓 r 調査区 SX11 検出状況（南から）	106
図版第 6	(1) 1 号墓 r 調査区中央畦土層堆積状況（西から）	107
	(2) 1 号墓 r 調査区 SX11 土層堆積状況（北から）	107
図版第 7	(1) 1 号墓 n 調査区 SD03 検出状況（南西から）	108
	(2) 1 号墓 n 調査区 SD03 土層堆積状況（東から）	108
図版第 8	(1) 1 号墓 p 調査区東壁土層堆積状況（西から）	109
	(2) 1 号墓 p 調査区南壁土層堆積状況（北から）	109
図版第 9	(1) 佐田峠 2 号墓近景（南西から）	110
	(2) 佐田峠 2 号墓近景（南から）	110
図版第 10	(1) 2 号墓 q 調査区遺構検出状況（南から）	111
	(2) 2 号墓 q 調査区 ST06 検出状況（西から）	111
図版第 11	(1) 2 号墓 q 調査区 ST06 土器出土状況（西から）	112
	(2) 2 号墓 q 調査区 ST07 検出状況（東から）	112
図版第 12	(1) 2 号墓 q 調査区断ち割り南側土層堆積状況（東から）	113
	(2) 2 号墓 q 調査区断ち割り北側土層堆積状況（東から）	113
図版第 13	(1) 2 号墓 l 調査区遺構完掘状況（北から）	114
	(2) 2 号墓 l 調査区周溝 SD01 土層堆積状況（東から）	114
図版第 14	(1) 2 号墓 m 調査区周溝 SD02 土層堆積状況（東から）	115
	(2) 2 号墓 o 調査区墳丘隅角検出状況（南西から）	115
図版第 15	(1) 2 号墓 o 調査区 SX05 完掘状況（北から）	116
	(2) 2 号墓 o 調査区 SX05 土層堆積状況（北西から）	116
図版第 16	(1) 佐田峠 3 号墓近景（東から）	117
	(2) 佐田峠 3 号墓表土掘削状況（北から）	117
図版第 17	(1) 3 号墓 a 調査区標石検出状況（北から）	118
	(2) 3 号墓 a 調査区①区出土弥生土器（図版第 46 (2)・第 40 図 14）（北から）	118
図版第 18	(1) 3 号墓 a 調査区②区出土弥生土器（図版第 46 (2)・第 40 図 14）（南西から）	119
	(2) 3 号墓 a 調査区 ST02・ST03・SX04 検出状況（西から）	119
図版第 19	(1) 3 号墓 a 調査区②区北壁土層堆積状況（南から）	120
	(2) 3 号墓 a 調査区②区北壁 ST02 土層堆積状況（南から）	120
図版第 20	(1) 3 号墓 a 調査区①区 ST05 検出状況（北から）	121
	(2) 3 号墓 f 調査区①区標石検出状況（北から）	121
図版第 21	(1) 3 号墓 a 調査区④区南壁土層堆積状況・ST03 検出状況（北から）	122
	(2) 3 号墓 a 調査区 ST05 検出状況（東から）	122
図版第 22	(1) 3 号墓 b 調査区貼石検出状況（南から）	123

	(2) 3号墓c 調査区遺構検出状況 (南東から) ……………	123
図版第23	(1) 3号墓c 調査区突出部検出状況 (東から) ……………	124
	(2) 3号墓c 調査区SX06土層堆積状況 (南から) ……………	124
図版第24	(1) 3号墓d 調査区貼石検出状況 (北から) ……………	125
	(2) 3号墓e 調査区ST07土層堆積状況 (南から) ……………	125
図版第25	(1) 佐田峠4号墓近景 (東から) ……………	126
	(2) 4号墓g 調査区試掘区検出状況 (東から) ……………	126
図版第26	(1) 4号墓g 調査区試掘時埋め戻し土除去状況 (西から) ……………	127
	(2) 4号墓g 調査区周溝掘削状況 (西から) ……………	127
図版第27	(1) 4号墓調査風景 (東から) ……………	128
	(2) 4号墓g 調査区②区北壁土層堆積状況 (南から) ……………	128
図版第28	(1) 4号墓g 調査区①区SD05検出状況 (東から) ……………	129
	(2) 4号墓g 調査区④区墳丘隅角検出状況 (東から) ……………	129
図版第29	(1) 4号墓g 調査区①区石列・貼石検出状況 (北から) ……………	130
	(2) 4号墓g 調査区②区石列・貼石検出状況 (南から) ……………	130
図版第30	(1) 4号墓i 調査区墳丘突出部検出状況 (北西から) ……………	131
	(2) 4号墓i 調査区墳丘突出部検出状況 (南東から) ……………	131
図版第31	(1) 4号墓i 調査区石列・貼石検出状況 (西から) ……………	132
	(2) 4号墓i 調査区石列・貼石検出状況 (北から) ……………	132
図版第32	(1) 4号墓i 調査区③区南壁SD07土層堆積状況 (北から) ……………	133
	(2) 4号墓i 調査区④区西壁土層堆積状況 (東から) ……………	133
図版第33	(1) 4号墓g 調査区①区SD01土器出土状況 (東から) ……………	134
	(2) 4号墓g 調査区①区SD01土器出土状況 (東から) ……………	134
図版第34	(1) 4号墓g 調査区④区西壁墓壇掘形検出状況 (東から) ……………	135
	(2) 4号墓g 調査区④区西壁墓壇掘形検出状況 (東から) ……………	135
図版第35	(1) 4号墓j 調査区完掘状況 (東から) ……………	136
	(2) 4号墓j 調査区SD02土層堆積状況 (南東から) ……………	136
図版第36	(1) 5号墓h 調査区SD03検出状況 (西から) ……………	137
	(2) 5号墓h 調査区SD03検出状況 (北東から) ……………	137
図版第37	(1) 5号墓h 調査区ST01・02検出状況 (西から) ……………	138
	(2) 5号墓h 調査区ST01・02検出状況 (南から) ……………	138
図版第38	(1) 4号墓西側k 調査区ST10検出状況 (南東から) ……………	139
	(2) 4号墓西側k 調査区ST10土層堆積状況 (北東から) ……………	139
図版第39	(1) 4号墓西側k 調査区SX12およびSD05検出状況 (東から) ……………	140
	(2) 4号墓西側k 調査区ST05掘削調査状況 (西から) ……………	140
図版第40	(1) 第2次調査、渡邊貞幸島根大学名誉教授を囲んで (2008年9月9日) ……………	141
	(2) 第3次調査、下條信行愛媛大学名誉教授を囲んで (2009年8月26日) ……………	141
	(3) 第4次調査、第3期調査終了 (2010年8月26日) ……………	141
図版第41	(1) 第5次調査、浅原利正広島大学学長 (当時)、山内廣隆文学研究科長 (当時) を囲んで (2011年9月14日) ……………	142
	(2) 第5次調査、雨のなかの埋め戻し作業 (2011年9月17日) ……………	142
	(3) 第6次調査終了 (2012年9月16日) ……………	142
図版第42	(1) 佐田峠1号墓出土土器 ……………	143
	(2) 佐田峠1号墓出土土器 ……………	143

図版第43	(1) 佐田峠1号墓出土土器	144
	(2) 佐田峠1号墓出土土器	144
図版第44	(1) 佐田峠1号墓出土土器	145
	(2) 佐田峠2号墓出土土器	145
図版第45	(1) 佐田峠2号墓出土土器	146
	(2) 佐田峠3号墓出土土器	146
図版第46	(1) 佐田峠3号墓出土土器	147
	(2) 佐田峠3号墓出土土器	147
図版第47	(1) 佐田峠3号墓出土土器	148
	(2) 佐田峠3号墓出土土器	148
図版第48	(1) 佐田峠4号墓出土土器	149
	(2) 佐田峠5号墓出土土器	149
図版第49	(1) 佐田峠4号墓出土金属器および周辺採集石器・剥片他	150
	(2) 佐田峠1号墓墳丘北西採集銅銭	150

I. はじめに

佐田谷・佐田峠墳墓群は広島県の北東、庄原市街地の東にある弥生時代中期後葉から後期前葉に営まれた弥生墳墓群である。広島県北部、特に江の川（広島県では可愛川）支流の馬洗川、西城川が合流する三次盆地は、弥生時代中期にすでに墳丘墓が造営され始めた地域として注目されるが、本報告は江の川支流にあたる西城川流域における墳丘墓の調査事例となる。

佐田谷・佐田峠墳墓群は後述するように、地域高規格道路などの建設によってしばしば破壊の危機にさらされてきたが、開発当事者と文化財関係機関の協議によってそのたびごとに保存が図られてきた経緯がある。

今回、庄原市教育委員会がこの佐田谷・佐田峠墳墓群の保存・活用を行うため、史跡指定に関わる調査を計画した。広島県・庄原市教育委員会による試掘調査の成果を前提とし、墳墓群の詳細な時期と規模を確定するために、広島大学文学研究科考古学研究室が佐田峠墳墓群の発掘調査を行うこととなった。当初、5年間（平成20（2008）年度～平成24（2012）年度）の共同研究計画とした。調査を進めるにつれ、多様な墳墓が共存していたことがわかってきたことから、定型化する墳丘墓を作り出す試行的な造営状況を示しているものと考えられるようになった。さらには、墳丘墓の構築方法が変化しつつ、墳丘自体が大型化し、大型埋葬施設が出現してくる発展的な過程が明らかとなっていった。このため、さらに1年間の調査期間を延長し、その調査成果をまとめ、平成26（2014）年度に正式報告を行うはずであった。しかし、その後、庄原市教育委員会による佐田谷墳墓群の発掘調査が引き続くこととなり、平成27（2015）年度に佐田峠墳墓群、平成28（2016）年度に佐田谷墳墓群の発掘調査成果を報告することとなった。

共同研究による5年間は、広島大学考古学研究室と庄原市教育委員会によって記者発表や現地説明会を開催し、その情報を公開してきたが、その後、庄原市教育委員会の組織変化と広島大学考古学研究室との情報交換の不備もあり、効果的な広報・啓発活動が行いえなくなったこともあった。

この報告が弥生時代墳丘墓の研究にさらなる展望を与え、かつ広島県北東部、庄原地域の古代地域文化を垣間見ることのできる記録となり、ひいては佐田谷・佐田峠墳墓群がひろく市民に公開され、活用していただける契機となれば、大変ありがたいと思う。

II. 佐田谷・佐田峠墳墓群の環境

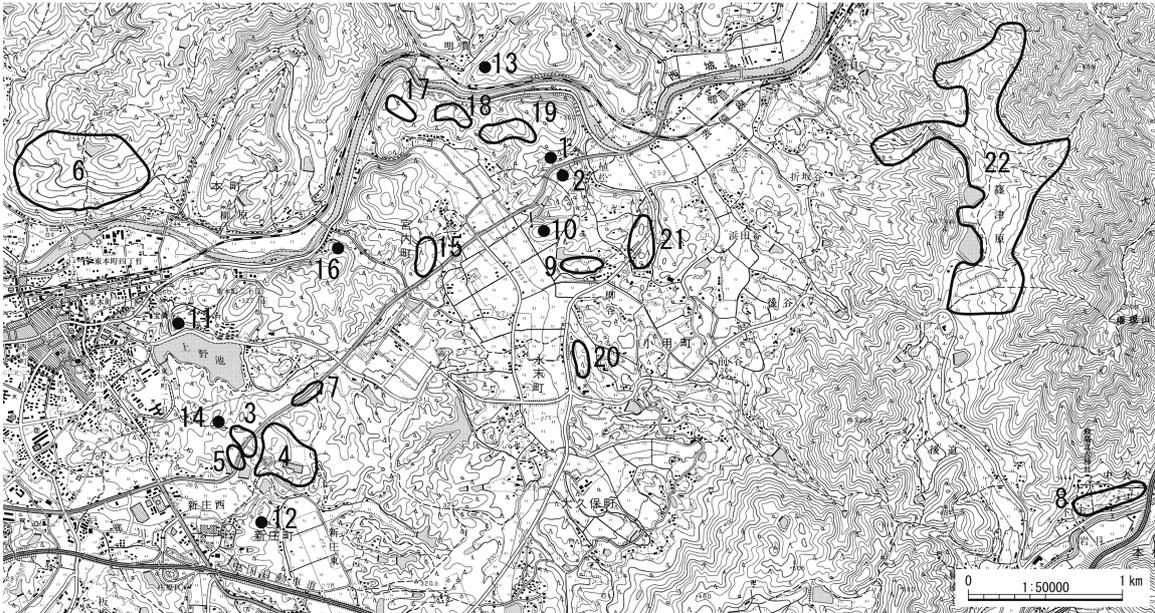
第1節 歴史的環境

佐田谷・佐田峠墳墓群の位置する庄原市は広島県北東部、中国山地のほぼ中央に位置する。庄原市街地のある庄原盆地は第三紀層備北層群からなる丘陵が広がる山間地であり、西城川とその支流群によって浅く開析した谷あいには河岸段丘が形成されている。

佐田谷・佐田峠墳墓群は広島県庄原市宮内町佐田峠に所在する。庄原市街中心部から北部の西城町へと走る国道183号線沿いに北東へ4kmほど離れた、西城川左岸の低丘陵上に位置している(第1図)。西城川が北側に湾曲して西流する宮内町から高・植松・柳谷・小用を経て大久保町に至る南北3km、弧状に伸びる細長い低位段丘・低丘陵上の北側にある。この低丘陵には全長20~50mを超える前方後円墳が多数築かれており、前方後円墳を主墳とし、円墳とともに構成された古墳群が集中している。

佐田峠墳墓群は国道183号線によって隣接する佐田谷墳墓群と分断されている。佐田峠墳墓群と佐田谷墳墓群は発見時が異なるために、別の遺跡名称となつてはいるが、その造営時期と規模・性格を考慮すれば、同一墳墓群としてもおかしくはない。

佐田谷・佐田峠墳墓群から南西2.5kmには、弥生時代中期から後期にかけて営まれた和田原遺跡(藤田1988、松井編1999、稲垣編2001、稲垣・今西編2004他)がある。弥生時代中期



第1図 佐田谷・佐田峠墳墓群周辺の主要遺跡分布図(1/50,000)

1. 佐田峠墳墓群
2. 佐田谷墳墓群
3. 小和田遺跡
4. 和田原遺跡群
5. 西山遺跡
6. 御神田山遺跡群
7. 永宗遺跡
8. 鎌寄遺跡
9. 広政古墳群
10. 矢崎古墳
11. 瓢山古墳
12. 地主神社古墳
13. 唐櫃古墳
14. 牛塚古墳
15. 陰地古墳群
16. 殿島山古墳
17. 大歳古墳群
18. 山根古墳群
19. 寄藤山古墳群
20. 永末古墳群
21. 柳谷古墳群
22. 篠津原遺跡群

中葉から後期にかけての竪穴建物（住居跡）群が調査された。特に中期後葉の竪穴建物跡からは精緻な文様をもつ塩町式土器が多数出土した。佐田谷・佐田峠墳墓群の造営時期に一部併行して営まれた集落跡であり、当該墳墓群の被葬者達が何らかの形で関与していた可能性が高いといえる。

第2節 周辺の遺跡

庄原市内には他に多くの遺跡が知られるが、西城川左岸の遺跡密集地域について、古墳時代までの主要な遺跡を概観する（第1図）。

(1) 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、佐田谷・佐田峠墳墓群下層遺跡（妹尾編1987）が知られている。後期旧石器時代前半に属するのではないかと考えられる水晶製石核・剥片が出土した¹⁾。その他に新庄町の小和田遺跡（桑原1982a）では槍先形尖頭器（後期旧石器時代終末）が出土した。縄文時代の遺跡には、新庄町和田原遺跡群（縄文時代草創期から早期）（松井1999）があり、D地点から有茎尖頭器が出土した。また和田原遺跡のB・D地点（縄文時代早期）からは楕円形や山形の押型文土器が出土した（藤田1988、松井1999）。

(2) 弥生時代

弥生時代前期の遺跡では、甕形土器が出土した新庄町の西山遺跡（桑原1982b）が知られている。中期には、和田原遺跡群（藤田1988、稲垣2001、稲垣・今西2004）や御神田山遺跡群（藤田1988）など、丘陵上で継続的に営まれた拠点的な集落遺跡がある。和田原遺跡群の竪穴建物（竪穴式住居）跡からは、塩町式土器とともに、台形土器や銅鐸形土製品、分銅形土製品など特殊な遺物が出土した。佐田谷・佐田峠墳墓群の南西、直線距離で2.5km、両墳墓群が造営された中期後葉から後期前葉にかけて居住域の規模が大きくなることから、両墳墓群との関連を想定することができる。三次盆地を中心とした地域一帯では、中期後葉から後期初頭にかけて、加飾性の豊かな塩町式土器が広く用いられるが、後期には塩町式土器は急速に衰退し、かわって山陰に系譜をもつ二重口縁系土器群がみられるようになる。後期末葉の遺跡である妙見山遺跡（稲垣編1999）では、出土した土器のほとんどを山陰系土器が占めている。

墳墓としては先述したように、弥生時代中期末葉から後期前葉の佐田谷墳墓群（妹尾編1987）がある。発掘調査の結果、佐田谷1号墓は後期初頭の初期四隅突出型墳丘墓と判明した。木棺・木槨構造を埋葬施設としてもつ最古の墳丘墓であることも明らかとなった（妹尾編1987）。佐田谷3号墓の周溝からは塩町式土器が出土したことから、佐田谷墳墓群も中期後葉から造営されていた可能性がある。また、地域はやや離れるが、佐田谷1号墓とほぼ同

時期、後期前葉となる田尻山1号墓（金井・向田他 1978）がある。いずれも突出部が発達していない古い段階の四隅突出型墳丘墓である。

(3) 古墳時代

古墳時代の集落遺跡としては、弥生時代から続く妙見山遺跡（稲垣編1999）の他に、新庄町の永宗遺跡（沢元1982）、本村町の鋤寄遺跡（潮見1958）、西山遺跡、小和田遺跡などがある。

また、旧庄原市の市街地の周辺では、古墳時代中期となる5世紀以降、数多くの前方後円墳が築造される。その中でも庄原市街地北方（掛田町）にある旧寺古墳（1号墳）（藤野1983）は全長が62m、庄原市内最大規模の前方後円墳で、11基の小円墳を陪塚としている。この前方後円墳は2段築成で葺石をもつ。円筒埴輪・形象埴輪が出土し、5世紀前葉と考えられている。市街地にある上野公園内（東本町）には全長41mとなる瓢山1号墳、市街地南方（上原町）の国営備北公園西隣には全長59mとなる甲山古墳がある。ともに5世紀代、旧寺古墳に続き築造された前方後円墳と考えられている（古瀬1991）。

先述したように、佐田谷・佐田峠墳墓群の位置する市街地東方の宮内・高・小用各町を中心として南北に伸びる低位段丘・低丘陵上にも、全長20～50m前後の前方後円墳が集中する。小用町の広政第1号墳（全長35m）・第2号墳（全長53m）（広島大学測量実習参加学生一同1982）・矢崎古墳（全長56m）（高橋1986）・鐘鋳原4号墳（全長25m）・鐘鋳原7号墳（全長40m）・鐘鋳原8号墳（全長42m）・柳谷2号墳（全長27m）、宮内町の大年2号墳（全長31m）・山根6号墳（全長27m）・寄藤山5号墳（全長27m）・殿畠山2号墳（全長20m）などである。さらに、この低丘陵の対岸、西城川右岸となる川西町の丘陵先端には、広島県史跡となった唐櫃古墳（明賀古墳、全長41m）（稲垣2000、稲垣・今西2005）がある。唐櫃古墳以外、発掘調査が行われていないため、その詳細は不明な部分が多いが、おおよそ5世紀後葉から6世紀後葉、古墳時代後半期を中心として前方後円墳が順次築造されていったようである。広島県内でも有数の前方後円墳の密集地といえる。

なお、佐田谷・佐田峠墳墓群の南西、国道183号線を南西に700mほど行くと、宮内八幡神社があり、付近から白鳳期の屋瓦が採集されている。伝神福寺跡とされているが、その寺域や規模など詳しくは調査がなされていないため、これも明らかではない。

Ⅲ. 発掘調査の経緯と経過

第1節 国道183号線建設にともなう発掘調査（財）広島県埋蔵文化財センター）

昭和61（1986）年、周辺交通量の増加と地域活性化のために一般国道183号線のバイパス道路の建設計画が実施された。最終工事区間であった新庄町から高町間の工事中、近辺に古墳があるとの地元住民の通報があり、広島県教育委員会による試掘調査の結果、弥生時代の台状墓（佐田谷1号墓）が用地内にあることが判明した。しかし、全路線での用地買収が完了しており、発見された佐田谷1号墓に近接して建設工事が進行していたことから、記録保存のための発掘調査が（財）広島県埋蔵文化財センターによって行われることとなった（妹尾編1987）。

発掘調査の結果、佐田谷1号墓は四隅突出型墳丘墓と判明した（第2図）。1号墓の墳丘形態はほぼ長方形で、南北14m・東西19m・高さ2.1mの規模を有しており、その周囲には幅2mあまり、深さ60cm以上もある溝を設けていた。また、北側墳丘斜面には4～6段の平石が貼られ、墳丘裾部には列石が巡らされていた。埋葬施設は墳頂平坦部で4基検出された。中央の墓壙SK2が最も大きく、木棺を覆い囲む木槨をもつものと想定された。副葬品はないが、墓壙上面の浅い掘り込みから弥生時代後期初頭に属する高杯などの土器群が拳大の円礫とともに出土した。

1号墓の東隣に位置する2号墓も長方形の墳丘をもつ。南北13m・東西17m・高さ東側1m・西側0.5mの規模を有している。墳丘北東で列石が確認されたが、その墳丘形態の詳細は不明のままである。四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されつつも、断定はなされなかった。墳丘上で供献したと思われる弥生時代後期前葉の壺形土器・器台形土器が採集された。

1号墓の南側には3号墓があり、これも長方形の墳丘をもつ。南側墳丘が削平されてはいるものの、南北11m・東西24m・高さ1.8mの規模を有していた。3号墓は墳丘南西部の隅角が発掘された。隅角の墳丘には突出部分が確認されず、列石や貼石もなかったことから、長方形の台状墳丘墓であることが判明した。佐田谷1号墓のような四隅突出型墳丘墓ではない。北側に設けられた溝内から弥生時代中期後葉から末葉の甕形土器・器台形土器が出土した。



第2図 佐田谷1号墓発掘調査風景
（広島県埋蔵文化財センター、1987年）

佐田谷1号墓は初期四隅突出型墳

丘墓であることが判明した。また、その中心墓壙となる SK2は木棺・木槨で被葬者を二重に囲み封じる最古段階の埋葬施設と想定することができた。この墳墓群の重要性を鑑みた文化庁および広島県教育委員会の指導とともに、広島県庄原土木事務所や広島県立歴史民俗資料館、庄原市教育委員会などの関係機関の協力、さらには地元住民による要望によって、現地保存が実現した²⁾ (妹尾編1987)。

第2節 共同研究とその調査の経緯 (広島大学・庄原市教育委員会)

(1) 広島県教育委員会・庄原市教育委員会による試掘調査

先述したように、(財)広島県埋蔵文化財調査センターの発掘調査によって、佐田谷墳墓群のなかでも1号墓が後期初頭に属する初期四隅突出型墳丘墓であることが判明した。同時に周辺に2基の長方形墳丘墓(佐田谷2・3号墓)だけでなく、その西側丘陵上にも長方形墳丘が確認され、佐田峠墳墓群と命名された。その後、地域高規格道路江府三次道路の建設計画によって、佐田峠墳墓群付近に一般国道183号線のバイパス(高道路)の建設が確実となった。このため、平成8年から同9年にかけて広島県教育委員会と庄原市教育委員会による佐田峠墳墓群周辺の分布調査と試掘調査が行われた。試掘調査では、墳丘裾部と想定される位置に小規模な試掘トレンチを設定し、掘削して墳墓の存在と墳丘範囲を確認することとなった。その際、A・B・Cの各調査地区が設定された。それぞれに試掘トレンチ(A地区試掘トレンチ9ヵ所、B地区試掘トレンチ3ヵ所、C地区試掘トレンチ10ヵ所)が設定され、遺構の状態を確認するために一部掘削が行われた³⁾。

A地区では、2基の方形墳丘が確認されており、9ヵ所のトレンチが設定され、重機によって表土掘削が行われた(第6・10図)。1号墓の墳丘周辺では墳丘裾を巡る周溝を検出することができなかったものの、弥生時代後期初頭の土器(図版第43(2)・第37図12~15)が採集された。2号墓では、墳丘裾南西側で墳丘隅角部分とそれを巡る周溝が検出された。墳丘隅角は突出する形状とはならず、列石・貼石等もみられなかった。後期前葉に属する土



第3図 佐田峠4号墓検出状況
(庄原市試掘調査C地区5 tr., 1997年)



第4図 佐田峠5号墓検出状況
(庄原市試掘調査C地区5 tr., 1997年)

器（図版第45（1）・第38図4）が採集された。

B地区でも同様に、重機によるトレンチ掘削が行われたが、顕著な遺構を検出することができなかった⁴⁾。

C地区では、3号墓の墳丘周囲と、3号墓から南東の尾根上で試掘が行われた（第6図）。3号墓は長方形の高まりを見せており、その墳丘の規模確認と周囲の遺構検出のために、C地区全体に試掘トレンチが設定され、掘削が行われた。その際、3号墓に伴う弥生時代中期末葉から後期初頭の土器（図版第47・第41図18～24）が採集された。

3号墓の南東側尾根上では幅2m、長さ44mの細長い範囲の表土掘削が行われ、遺構の兆候がみとめられた地点（3号墓東端から南東へ約20m、約40mの2地点）を拡幅し、遺構検出のために人力掘削による精査が行われた。その結果、3号墓に近い地点で検出された石列と貼石をもつ方形墳丘墓を4号墓（第3図）、遠い地点で検出された周溝を5号墓とした（第4図）。4号墓では、方形周溝と石列を検出した際に、埋葬施設が遺存している可能性を考慮して周溝内の中央部分だけは重機による掘削を行わず、掘り残したようである。検出した遺構の一部については、1/200スケールの平板測量が行われたのみで、詳細な平面図は作成されず、埋め戻された。いずれの墳墓でも弥生土器が採集された（4号墓：図版第48（1）・第42図4、5号墓：図版第48（2）・第43図3）。

以上の試掘調査の結果、庄原市教育委員会と広島県庄原土木事務所の協議によって、佐田峠1・2号墓周辺と3号墓、およびその周囲の遺構確認部分の現状保存が決定した。

（2）広島大学考古学研究室による測量調査（第1次調査）

広島大学考古学研究室では、庄原市教育委員会から佐田谷・佐田峠墳墓群の学術的な性格を把握するための調査要請を受けて、平成19（2007）年度には、墳丘の測量調査を実施した。2級基準点から国土座標を移動して測量基準点を設置し、平板測量を行った。また、それと同時に墳丘墓の3Dスキヤニングを実施し、3次元の点群データを作成した。

測量調査の結果、佐田峠1～3号墓はそれぞれ長方形の墳丘を持つことが明らかになった。当初、1号墓は南北12m・東西9m前後、2号墓は南北8m以上・東西15m前後、独立して築造された3号墓はおおよそ南北10m・東西16.5m前後の墳丘をもつものと想定した。特に3号墓は長辺が長く、低い墳丘形態を呈していることが確認された。また、1・2号墓に比べて丘陵平坦面が広い場所に立地していたこともあってか、檜の植林のために墳丘が削平され、かなり改変されていると推測することができた⁵⁾。

測量調査を踏まえ、次年度から5年間、各墳丘墓の規模・形状と造営時期を把握するための発掘調査を行うこととした。まず、墳丘部分の改変が最も著しいと判断された佐田峠3号墓の発掘調査を最初に行い、墳丘の遺存状況を確認していくこととした。あわせて試掘調査の位置記録を作成し、その際に出土した遺物の紹介を行っていくこととした。また、帝釈峡遺跡群の発掘調査を一時中断して行われたこともあり、帝釈峡遺跡群発掘調査年報に単年度調査の概要報告を掲載していくこととした⁶⁾。

(3) 共同研究における各年次調査とその概要

平成20（2008）年度以降、広島大学と庄原市の間において共同研究事業の契約を締結し、5ヵ年計画で発掘調査を行うこととなった。広島大学考古学研究室と庄原市教育委員会との協議により、初年度は佐田峠3号墓、次年度で4・5号墓、次々年度から1・2号墓、それぞれの規模と形状、造営時期の確認を行い、最終年度に佐田谷3号墓の墳丘南側崖面の精査と埋葬施設の検出などを行う事を具体的な目的とした。試掘調査では、座標のない簡易な平板測量によるトレンチ配置図しか作成されていなかったため、試掘トレンチの正確な位置が不明であった。初年度の3号墓の調査では庄原市の試掘トレンチとの位置関係が不明確なままとなった。このため、その後、試掘トレンチの位置を確認できるように、調査区を設定することとした。1・2号墓、4・5号墓および4号墓西側の遺構の調査では、試掘トレンチの再発掘を行うこととした。

なお、佐田峠墳墓群の調査に際して、調査区（試掘「トレンチ」と区別して「調査区」とした）は設定順にa～rの通し番号を付した。佐田峠1・2号墓は接続しているため、検出した遺構はすべて通し番号を付し、3・5号墓はそれぞれ検出した遺構順に通し番号を付した。4号墓はその西側の遺構群を含めて検出遺構順に通し番号を付した。すべての出土遺物は通し番号を付して取り上げた。

第3次調査では、4号墓の墳丘北端がより北側にあることが判明したため、第4次調査では4号墓の継続調査となり、1・2号墓の調査は第5・6次調査にずれ込んだ。また、平成23（2011）年度からは、庄原市教育委員会による佐田峠墳墓群発掘調査検討委員会が設置され⁷⁾、佐田峠墳墓群の埋葬施設だけでなく、佐田谷墳墓群の埋葬施設についても、発掘調査によって確認する必要性が指摘された。これにより、佐田峠1・2号墓の追加調査を行うとともに、佐田谷2・3号墓の埋葬施設の確認調査が行われることとなった（第6次調査）。また、さらに次年度以降にも庄原市教育委員会によって佐田谷3号墓の墳頂平坦部における埋葬施設の確認調査が行われることとなった。

a. 第2次調査（平成20（2008）年度）

佐田峠墳墓群の墳丘測量調査の結果、3号墓周辺は試掘調査ののち、檜の植林のために墳丘頂部が削平されたため、墳丘に著しい改変を受けていることが判明した。また、3号墓は測量した3基の長方形墳丘のうち長幅比が最も大きいことや、試掘調査時の出土土器から、その築造時期が弥生時代中期末葉にまで遡る可能性が高いと考えることができた。佐田峠墳墓群と佐田谷墳墓群との時期的な関係を解明するために、佐田峠墳墓群でも最も古いと考えられた3号墓の築造時期をいち早く解明する必要があることから、3号墓の墳丘規模と埋葬施設の確認を目的とした発掘調査を実施することとした。

調査の結果、3号墓は墳丘中央部の南北7.05m・東西15.3mの長細い長方形を呈する、弥生時代中期末葉から後期初頭に属する初期四隅突出型墳丘墓であることが判明した。

b. 第3次調査（平成21（2009）年度）

試掘調査で作成された平板測量記録に基づき、3号墓の東側、4・5号墓の再確認とその

詳細な遺構記録の作成を目的とした再発掘調査を行うこととした。特に4号墓は方形周溝と周溝内側の墳丘部分に貼石が遺存していることが明らかとなっており、その詳細な記録の作成とともに、周溝の掘削と出土遺物による造営時期の確認、埋葬施設の確認を行うこととした。また、5号墓は試掘調査では、方形周溝のみしか検出しておらず、墳墓と確定するには不十分であった。このため、周溝の掘削を行い、出土遺物による周溝の時期確認を行うとともに、方形周溝の内側において埋葬施設の検出を試みることにした。

なお、調査の結果、4号墓はさらに北側に墳丘が遺存していたことが明らかとなり、次年度の第4次調査において、4号墓の北側墳丘隅角などの追加調査を行うこととした。

c. 第4次調査（平成22（2010）年度）

試掘調査によって、4号墓は一辺4.5m前後となる方形墳丘と、その周囲に周溝をもつ弥生時代中期末葉に属する貼石墓であると想定していた。第3次調査では、北辺を区画すると思われた周溝SD05⁸⁾は、4号墓よりも西側に延伸して掘削された溝であり、築造当初の4号墓の墳丘は北側に延びることが判明した。さらには4号墓の南側に隣接して方形墳丘をもつ周溝墓が存在する可能性も想定できた。このことから、第4次調査では、4号墓の南北両側に再度小規模な調査区を設定し、4号墓の墳丘規模を再確認することとした。また、佐田峠3号墓と4号墓の間で周溝SD05の延伸部分を確認することとし、4号墓西側においてさらなる遺構の検出に努めた。

調査の結果、4号墓はその築造当初、長方形墳丘をもつ中期末葉前後の四隅突出型墳丘墓であり、その後、墳丘が改変されていたことが判明した。また、4号墓の西側には墳丘をもたない埋葬施設を確認した。第4次調査で佐田峠墳墓群C地区における調査を終了した。

d. 第5次調査（平成23（2011）年度）

第5次調査から佐田峠墳墓群A地区1・2号墓の確認調査を行った。試掘トレンチの正確な位置を確認するため、試掘トレンチに一部重複するように調査区を設定し、平面図に記録した。また、1・2号墓の墳丘規模の再確認を行い、その墳丘形態と出土土器による造営時期の確認を行うこととした。

e. 第6次調査（平成24（2012）年度）

5ヵ年の調査計画当初は最終年度と位置付け、佐田谷3号墓とその周辺の確認調査を行うこととしていたが、調査経過とともに、墳丘構造の差異について解決すべき疑問点が明らかとなってきた。

つまり、墓壙を掘削した後に墳丘となる盛土（封土）を行い、その横にさらなる墓壙を掘削・埋葬しつつ墳丘を徐々に形成し、最後に貼石を施すという墳丘構築方法「同時進行型」（和田1989・2003）を採用した中期末葉の佐田峠3号墓と、墳丘をほぼ構築した後に墓壙を穿ち、埋葬を行った「墳丘先行型」（和田1989・2003）と想定される後期初頭の佐田谷1号墓では、墳丘の構築手順が全く異なることが判明した。前者から後者へと変化するものと想定してはいたが、そのほかの墳丘墓において、この想定の確認のためのみに埋葬施設の掘削を行うことは躊躇せざるをえなかった。また、佐田谷1号墓は佐田峠3号墓と比べて、中心



第5図 佐田峠墳墓群発掘調査の現地説明会
(佐田峠4号墓、2009年)

墓壙が顕在化してきていることは明らかであったが、それが墳墓群（グループ）間の格差を示しているものなのか、時期的変化なのかを確認できずにいた。

第6次調査では、平成23年度に設置された佐田峠墳墓群発掘調査検討委員会による調査方針に関わる答申⁹⁾により、墓壙の状況が確認できていなかった佐田谷2・3号墓および、佐田峠1・2号墓の墳丘構築と墓壙掘

削・埋葬がどのような関係にあるのかを主眼とした発掘調査を行うこととなった。しかしながら、広島大学考古学研究室と庄原市教育委員会の現地協議によって、調査は最小限の掘削と遺構検出にとどめることとしていた。よって、まず墳頂平坦部の表土掘削、遺構検出を平面的に行い、埋葬施設が検出できなかった場合は、墳丘構築前段階あるいはその途中で墓壙掘削と埋葬が行われた可能性が高いものと判断することとした¹⁰⁾。

調査の結果、佐田峠1・2号墓では、いずれも表土直下数センチ、同一面で墓壙の掘形を確認したことから、1・2号墓ともに墳丘を構築した後に墓壙を穿ち、埋葬を行う「墳丘先行型」の墳丘墓と判断した。

f. 第7次調査（平成25（2013）年度）

広島大学考古学研究室と庄原市教育委員会の共同研究事業が終了し、庄原市教育委員会単独の調査（第7次調査）を継続した。佐田谷3号墓の墳頂平坦部に調査区を設定し、中心埋葬の墓壙検出に努め、中心埋葬付近の出土土器の取り上げを行った。

g. 第8次調査（平成26（2014）年度）

庄原市教育委員会による発掘調査（第8次調査）を継続し、佐田谷3号墓の墳頂平坦部で検出した中心埋葬の詳細な記録を作成し、中心埋葬付近の出土土器の取り上げを行った。

(4) 佐田谷・佐田峠墳墓群に関する普及啓発・調査研究活動

佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査期間中に、地元小学生を中心とした現地見学会（考古学探検隊）を行い、発掘調査終盤には現地説明会を開催してきた。第4次調査が行われた平成22（2010）年度には、庄原市教育委員会主催による四隅突出型墳丘墓の起源に関するシンポジウムを行った。また、このほかにも広島大学で開催された広島史学研究会大会や岡山大学で開催された考古学研究会岡山例会、広島県立歴史民俗資料館におけるシンポジウムなどにおいて発掘調査の成果報告や研究発表を行ってきた。以下にその日時と内容を記しておきた

い。

a. 見学会・現地説明会

- 平成19（2007）年8月23日 庄原市教育委員会主催子供考古学探検隊（於 現地、18名参加）。
- 平成20（2008）年8月22日 庄原市教育委員会主催子供考古学探検隊（於 現地、12名参加）。
- 平成20（2008）年8月30日 佐田峠3号墓発掘調査現地説明会（於 現地、80名参加）。
- 平成21（2009）年8月18日 庄原市教育委員会主催子供考古学探検隊（於 現地、20名参加）。
- 平成21（2009）年8月25日 竹原市立忠海公民館主催竹原市子供考古学探検隊（於 現地、42名参加）。
- 平成21（2009）年9月6日 佐田峠墳墓群発掘調査現地説明会（於 現地、100名参加、第5図）
- 平成22（2010）年9月26日 佐田峠墳墓群発掘調査現地説明会（於 現地、135名参加）
- 平成23（2011）年9月17日 佐田峠墳墓群発掘調査現地説明会（於 現地、34名参加）
- 平成24（2012）年9月15日 佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査現地説明会（於 現地、72名参加）

b. 研究会・シンポジウム

- 平成19（2007）年10月28日 齊藤 礼・野島 永・古瀬清秀「佐田峠墳墓群発掘調査の成果について」2007年度広島史学研究会大会考古部会（於 広島大学）
- 平成20（2008）年10月26日 石貫弘泰・野島 永・今西隆行・古瀬清秀「庄原市佐田峠墳墓群の発掘調査について」2008年度広島史学研究会大会考古部会（於 広島大学）
- 平成21（2009）年10月25日 斎藤友紀・矢部俊一・野島 永・荒平 悠・古瀬清秀「庄原市佐田峠墳墓群の第3次調査について」2009年度広島史学研究会大会考古部会（於 広島大学）
- 平成22（2010）年9月26日 シンポジウム「四隅突出型墳丘墓の起源を探る～謎のお墓の起源は庄原か～」（於 庄原市ふれあいセンター・ホール、135名参加）
- 基調講演 渡邊貞幸「四隅突出型墳丘墓の出現とその時代背景」
- 事例発表 野島 永「佐田峠墳墓群の発掘調査と広島県の弥生墳丘墓」
- 肥後弘幸「関西の弥生墳丘墓」
- 坂本豊治「山陰の弥生墳丘墓」

パネリスト 岩崎 誠・寺岡隆行・妹尾周三・伊藤 実

- 平成23 (2011) 年1月8日 野島 永「佐田峠墳墓群の発掘調査と初期の四隅突出型墳丘墓」考古学研究会岡山1月例会 (於 岡山大学)
- 平成23 (2011) 年4月29日 野島 永「四隅突出型墳丘墓の成立をめぐって」出雲の森博物館開館1周年記念講演会 (於 出雲弥生の森博物館)
- 平成23 (2011) 年5月12日 野島 永「弥生から古墳へ―墓と鉄の道具からみた社会の変化―」平成23年度時悠館春の企画展開催記念講演会 (於 庄原帝釈峡博物展示施設時悠館)
- 平成23 (2011) 年10月25日 今福拓哉・脇山佳奈・小森由佳利・野島 永・辻村哲農「庄原市佐田峠墳墓群の第5次調査について」2011年度広島史学研究会大会考古部会 (於 広島大学)
- 平成24 (2012) 年10月13日 野島 永「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」ここまでわかった中国山地の原始・古代1、広島県立歴史民俗資料館特別企画展開催記念講演会 (於 広島県立歴史民俗資料館)
- 平成24 (2012) 年10月28日 藤井雅大・村田 晋・今福拓哉・野島 永・辻村哲農・古瀬清秀「庄原市佐田峠墳墓群の第6次調査について」2012年度広島史学研究会大会考古部会 (於 広島大学)
- 平成25 (2013) 年2月9日 今福拓哉「佐田峠墳墓群の調査成果」考古学研究会岡山2月例会 (於 岡山大学)
- 平成26 (2014) 年10月26日 辻村哲農「庄原市佐田谷墳墓群の調査について」2014年度広島史学研究会大会考古部会 (於 広島大学)
- 平成27 (2015) 年7月12日 村田 晋「弥生時代中国地方における脚付長頸壺形土器について」2015年度中国四国歴史学地理学協会考古部会 (於 広島大学)

IV. 佐田峠墳墓群の試掘および測量調査

第1節 試掘調査

先述したように、地域高規格道路江府三次道路の建設計画によって、佐田峠墳墓群付近に一般国道183号線のバイパス（高道路）建設が確実となった。平成8年には広島県教育委員会と庄原市教育委員会による佐田峠墳墓群周辺の分布調査が行われ、平成9年には佐田峠墳墓群の範囲確認のための試掘調査が行われた（第6図）。なお、範囲確認調査は高規格道路による工事範囲を中心としており、それより西側の丘陵頂部には及んでいない。

(1) 佐田峠墳墓群A地区トレンチ調査

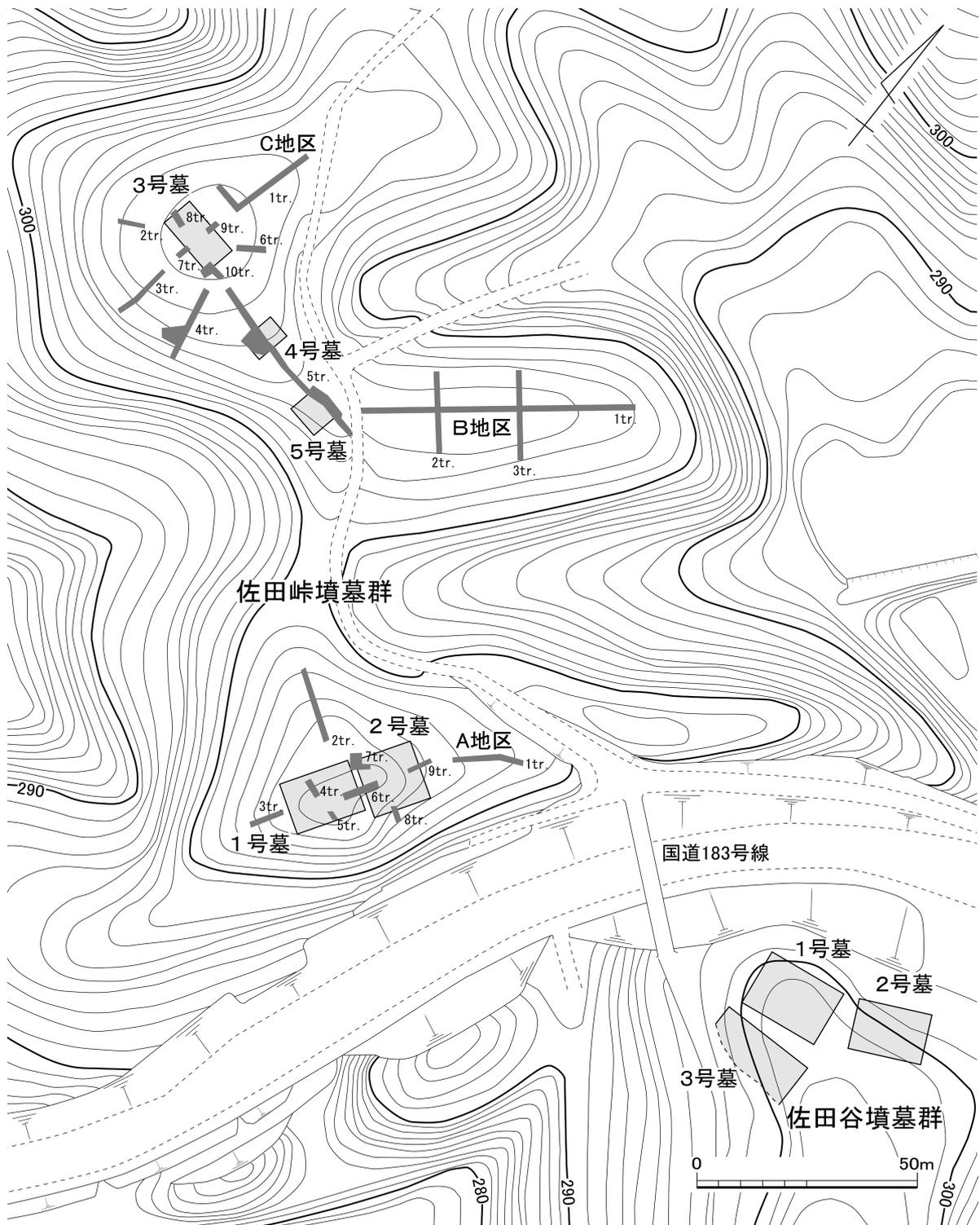
以前の踏査において2基の方形墳丘を確認しており、南側を佐田峠1号墓、北側を佐田峠2号墓とした。この1・2号墓の墳丘周囲にバックホー重機のバケット幅となる調査用トレンチを設定した。A地区丘陵頂部から佐田峠1・2号墓を取り囲むように北・西・南方向に3ヵ所（1～3 tr.）のトレンチを設定した（第6・10図）。A地区1トレンチは丘陵北側南北方向に約16.5m、2トレンチは丘陵西側緩やかな尾根線上に東西17m、3トレンチは丘陵南側、南北方向に7mとした。1・2号墓以外の遺構の有無を確認するためであったが、ほとんど遺構を検出できなかった。ただし、1トレンチ北端で性格不明の土坑1基を確認した。

また、1・2号墓墳丘部分についても重機により掘削し、墳丘裾部の状況を確認した。1号墓では、墳丘中央裾部、東西方向に2ヵ所（4・5 tr.）を設定した。4トレンチでは墳丘傾斜変換点を確認したものの、5トレンチは墳丘内盛土を確認したことから、墳丘はより東側に大きくなるものと予想された。なお、試掘トレンチからわずかながら土器が検出されたが、詳細な出土位置は不明である。

2号墓では墳丘中央裾部、南北方向に2ヵ所（6・9 tr.）、墳丘南西部隅角に1ヵ所（7 tr.）、墳丘東側に1ヵ所（8 tr.）を設定した。それぞれ、墳丘裾となる傾斜変換点を確認した。特に7トレンチでは隅角を検出したものの突出した形状を想定することは難しく、四隅突出型墳丘墓とは確認できなかった。1・2号墓では墳丘の表面に貼石などの外表施設は確認できなかったようである。

(2) 佐田峠墳墓群B地区トレンチ調査

A地区とC地区の間であり、南北方向に尾根筋をもつ緩やかな丘陵地である。丘陵頂部に重機のバケット幅の調査用トレンチを南北に62m（1 tr.）、尾根に直交して東西に20m前後2本を設定した（2・3 tr., 第6図）。重機バケットによって表土を剥ぎ、人力による遺構確認の精査を行ったが、顕著な遺構を見つけることはできなかった。



第6図 庄原市教育委員会による調査地区と試掘トレンチ配置図

(3) 佐田峠墳墓群C地区トレンチ調査

檜植林以前の佐田峠3号墓は長方形の高まりとして認識されており、この3号墓墳丘裾部とその周辺、3号墓の東側の緩やかな丘陵尾根上に、重機によるバケット幅のトレンチをそれぞれ設定した(第6図)。

3号墓の周囲には、放射状に6ヵ所のトレンチ（1～6 tr.）を設定した。C地区1トレンチは墳丘北側で南北方向に20m、南端を西に7m折り曲げ、逆L字形とした（第6図）。2トレンチは墳丘南西側で北東から南西に7m、3トレンチは墳丘南側で南北14m、南端で西側に曲げる。4トレンチは墳丘南東側で南北方向に19mとした。また、墳丘東側の5トレンチは丘陵尾根上に沿っておよそ43mとし、墳丘北東側の6トレンチは北東から南西に7mとした。

1トレンチでは1基の土坑と溝、性格不明の落ち込みを確認した。3トレンチでは3基の小規模な土坑、5トレンチでは2本の溝と2基の周溝をもつ区画を確認した。西側、3号墓に近い方から4号墓、5号墓と命名し、人力による遺構精査を行った。その結果、4号墓は周溝をもつ方形墳丘墓で、墳丘斜面に列石や貼石をもつことが判明した。5号墓は周溝のみ検出したもので、その形状から方形周溝墓の可能性が想定された。

また、3号墓の墳丘裾部には合わせて4ヵ所に試掘トレンチを設定した。墳丘中央裾部、南北両側に2ヵ所（7・9 tr.）、墳丘西側裾部に1ヵ所（8 tr.）、墳丘南東部隅角にL字形に1ヵ所（10 tr.）とした。8トレンチ以外はいずれも裾部、傾斜変換点に貼石を検出した。10トレンチでは、3号墓墳丘隅角の突出部を検出した。墳丘南側斜面と東側斜面に貼られた平石がわずかながら狭角をもちつつ交差していくように成形されており、平面的にはわずかに突出する形状となることが確認された。このことから、3号墓は古い型式に属する四隅突出型墳丘墓であることが想定された。（野島）

第2節 測量調査

広島大学考古学研究室では、庄原市教育委員会から佐田峠墳墓群の学術的な内容を把握するための調査要請を受けて、平成19年度に第1次調査として、墳丘の測量調査を実施した（第8・9図）。

(1) 測量手順

測量調査には広島県備北地域事務所建設局庄原支局工務第二課による2級基準点（GPS測量、平成9年7月18日）No.10（以後「Point B (P.B)」）、No.11（以後「Point C (P.C)」）の他、一般国道183号線の改修工事にもないP.Bから移動された点（以後「Point D (P.D)」）を基準として、独自に設置した杭16本、計19本を用いた。試掘調査において設定されたA・C調査地区にそれぞれ開放トラバースを組み、A地区はP.20～26の7本、C地区はP.3～9の7本の杭を設置した（第7図）。

各杭間の距離と方位角・標高・座標の測定には、Leica社のトータル・ステーションTCR307を用いた。本調査ではまず、あらかじめ座標のわかっていたP.BとP.C、P.Dを用いて機械の精度と各座標の再確認を行った。トータル・ステーションに3点の座標を入力後、

第1表 佐田峠墳墓群座標一覧

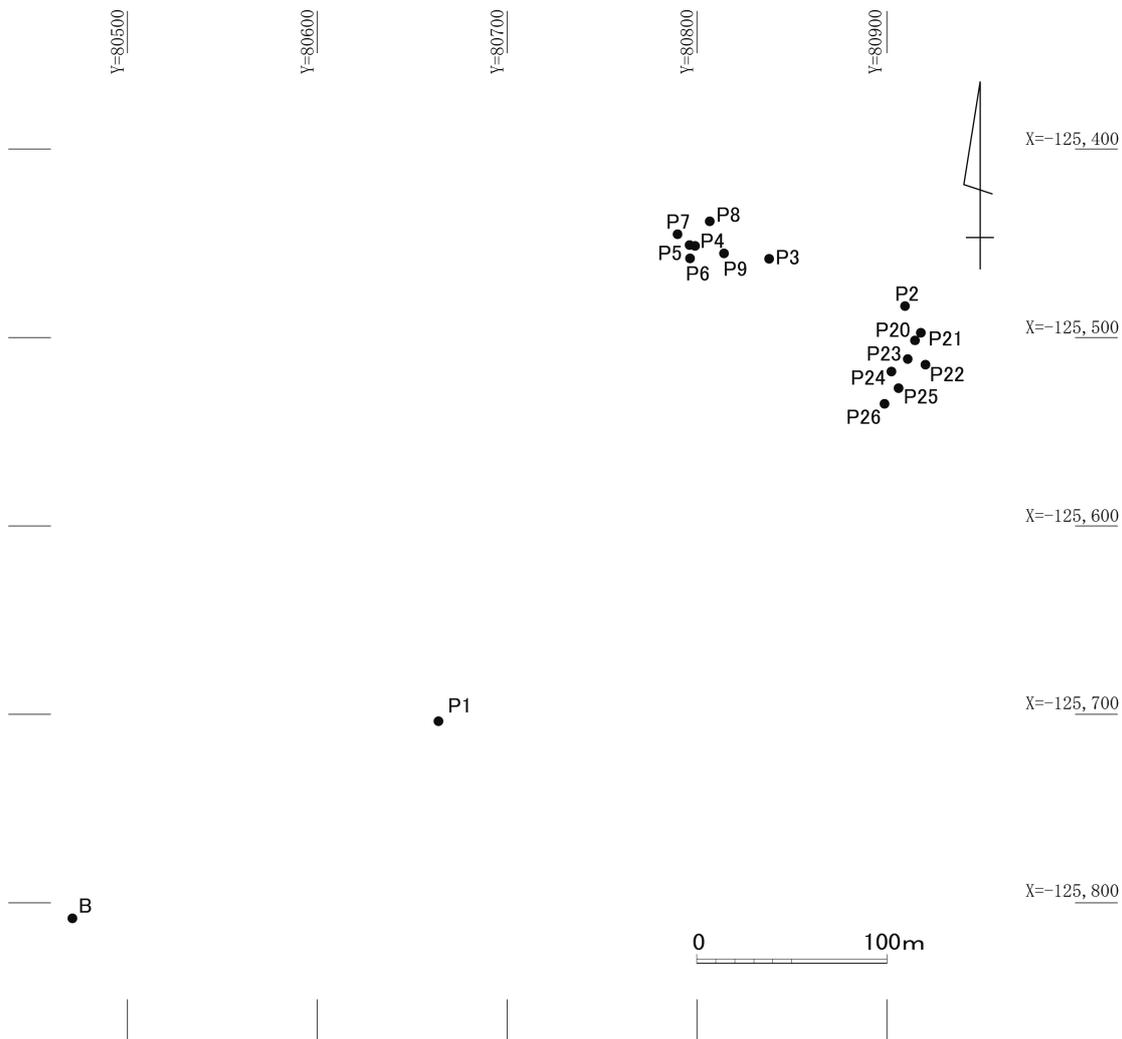
測量杭名	X座標	Y座標	H座標
Point B	-125809.369	80471.526	263.130
Point C	-126127.644	80727.556	265.430
Point D	-125888.515	80513.075	264.880
P.1	-125704.975	80665.120	274.259
P.2	-125483.439	80909.633	299.860
P.3	-125458.035	80838.332	304.882
P.4	-125451.118	80798.931	308.815
P.5	-125450.634	80798.287	308.822
P.6	-125458.780	80797.459	307.578
P.8	-125438.154	80807.070	308.024
P.9	-125455.037	80814.429	307.145
P.20	-125502.641	80915.243	303.709
P.21	-125497.950	80918.422	302.850
P.22	-125514.039	80920.676	303.873
P.23	-125512.597	80911.145	305.607
P.24	-125518.307	80903.848	305.578
P.25	-125527.905	80906.803	306.620
P.26	-125535.769	80899.264	305.004

ステーションをP.1に設置したまま、P.2を視準して座標を求めた。続いて、トータル・ステーションをP.2に設置して、P.B、P.1を視準し、それぞれ座標の値の誤差が3cm以内であることを確認し、操作ミスがないと判断した。次に、P.2にトータル・ステーションを設置した後、C地区の基準杭としてP.3を設置した。また、A地区のP.20を視準して座標を求めた。続いて、P.3にトータル・ステーションを設置し、P.2・20を視準し、これらの座標が正しいことを確認した後、まずC地区、次にA地区の各杭の座標を求めた。

なお、A地区では、P.20～26までの杭を設置した（第8図）。まずP.2にトータル・ステーションを設置し、P.3を視準した後P.20を視準したところ、前回の測定値と若干異なっていた。そのため、もう一度P.3からP.2を視準し、P.2からP.3・20を視準したところ、新しい方の座標が測定されたため、新しい方の座標値を採用した。その後P.20にトータル・ステーションを設置し、P.2を視準した後、2号墓の墳頂付近にあたるP.23を視準し、座標を求めた。次に、P.23にトータル・ステーションを設置し、P.20を視準して操作ミスがないことを確認した後、P.21・22・24・25を視準して各杭の座標を求めた。続いて、1号墓の墳頂付近にあたるP.25にトータル・ステーションを設置し、P.23を視準して操作ミスがないことを確認した後、P.26を視準し、座標を求めた。

C地区では、P.3～9までの杭を設置した（第9図）。P.3にトータル・ステーションを設置し、墳頂付近のP.4・5（試掘時永久杭）を視準して座標を求めた。次にP.5にトータル・ステーションを移動し、P.3・4の座標を視準して操作ミスがないことを確認した。その後P.5にトータル・ステーションを設置したままP.3・6・7・9の各座標を求めた。P.8についてはP.5からの視準が不可能であった。そのため、P.4にトータル・ステーションを設置し、P.5の座標

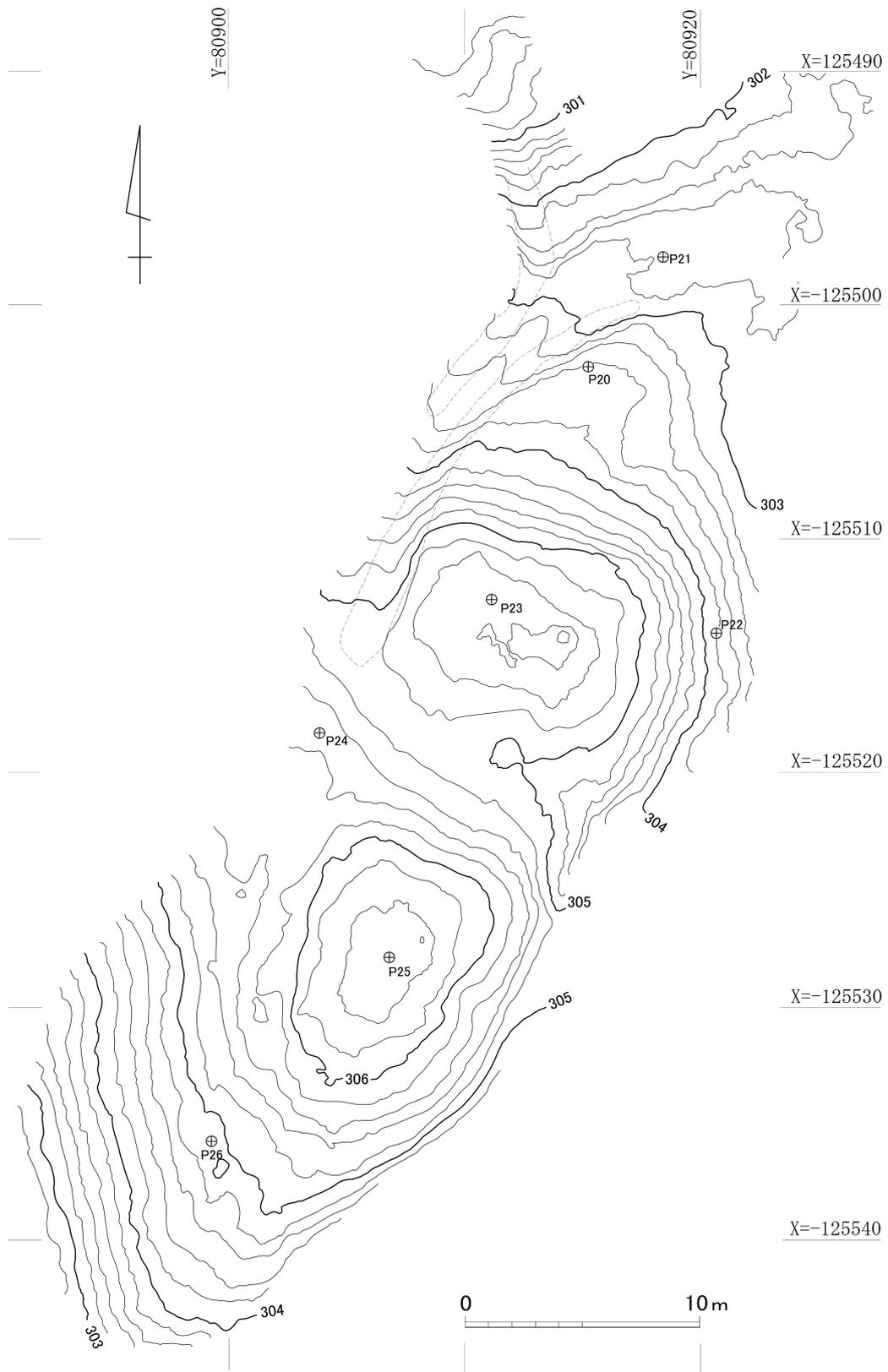
P.Bにトータル・ステーションを設置した。そして、P.DとP.Cを視準したところ、入力していた座標との誤差はX・Y軸ともにほとんどなかった。また、P.Dの標高は未確認であったためP.B－P.D間でレベル移動を行った。続いて、P.Dにトータル・ステーションを設置した。P.Bを視準し許容誤差の範囲であることを確認した後、P.Cの視準も行い、これら3つの杭の座標が正しいと確認した。次に、A地区付近に基準杭（P.2）を設置するため、P.BからP.2の中間にP.1を設置した。P.Bにトータル・ステーションを設置した後、P.1を視準して座標を求めた。P.1の座標が正しいことを確認するために今度はP.1にトータル・ステーションを設置し、P.Bを視準した。X・Y・Hの各誤差が3cm以内であったため、この座標を正しいものと確認した。その後、トータル・



第7図 佐田峠墳墓群測量杭位置路線図

を視準した後、P.8を視準して座標を求めた。トータル・ステーションを用いての作業の他に、エスロン巻尺を用いて水平距離を測ることで、座標の位置が大幅に誤っていないことを確認した。ただし、P.7については水平距離が機械測定されたものと異なっており、路線図作成後、平板で杭の位置を確認した際にも実際の杭の位置に一致しなかったため、使用しないこととした。各杭の標高についても機械点から杭の高さの測定は自らメジャー（コンベックス）を用いて行うため微妙なずれがあることが予測された。したがって、P.3から P.9まで各杭のレベル移動を行って各杭のレベルを確定した。

このようにして求められた座標値を基に路線図を作成した（第7図）。路線図を製作する際、まず1,000分の1縮尺でP.Bから P.26まで全ての杭の座標を方眼紙上に落とした（第1表）。次にA地区のP.2と P.20～26、C地区の P.3～9それぞれを100分の1縮尺で杭の座標を落とし、マイラー・シートに写し取った。マイラー・シートは隣り合うシートと数本の杭を共有した。A地区とC地区において各2枚、計4枚を使用した。平板を用いて各杭の位置を再度視認し、相対的位置によって測量ミスがないことを追認した。



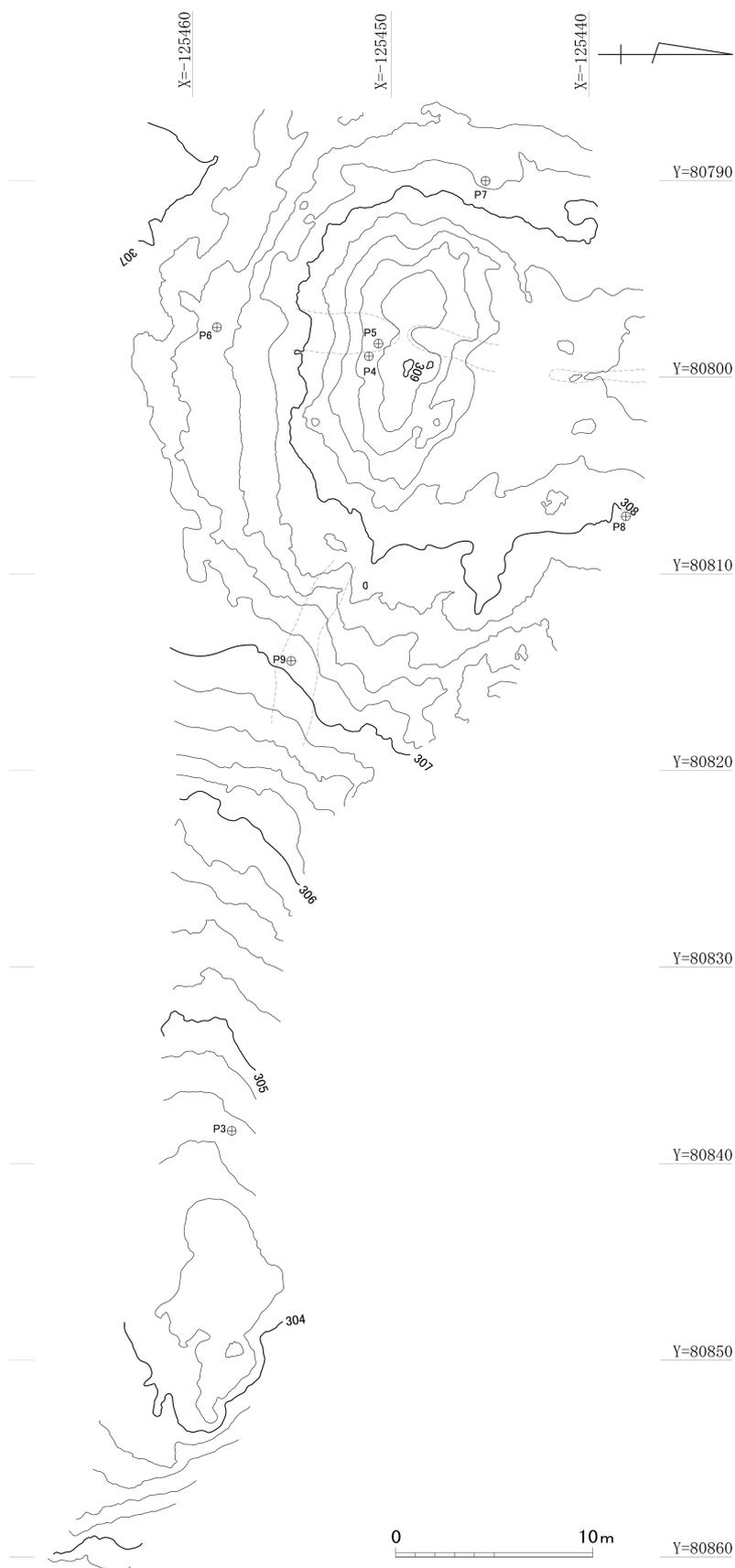
第8図 佐田峠1・2号墓測量図(3Dスキャンによる機械測量)

(2) 平板測量

2台の平板を用いて平板測量を行い、20cm間隔の等高線を作成していった。まずC地区から開始し、3号墓付近の杭を共有しながら、東西に分かれて測量した。次いでA地区においては1号墓と2号墓それぞれの測量班に分かれ、1・2号墓の中間地点の杭を共有して測量を行った。毎日測量し終えた範囲を1枚の紙にまとめていき、特に杭を共有する部分においては描線誤差がないか確認しつつ測量を継続した。また、貼石と思われる石のポイントと墳丘範囲、墳丘を削平した後世の林道の形状も書き加えた。なお、第1次調査の測量時点では、高規格道路の建設工事が施工されており、B地区の丘陵全体が開削され消滅していた。

(3) 3Dスキャニング

今回の調査では従来の平板測量に加え、(株)荒谷建設コンサルタントに委託して3Dスキャニングを行った。ニコン・トリニブル社のGX 3Dスキャナを使用した。3D



第9図 佐田峠3～5号墓測量図(3Dスキャニングによる機械測量)

スキャニングとは、ビデオカメラとレーザーを内蔵した3Dスキャナを用いて行う3次元測量である。測定可能距離は標準で200m、最大で350mまで届く。スキャンは360度パノラマ写真を撮りつつ、最大で毎秒5,000点の測距を行っていく。3mmメッシュからの測定が可能であるが、今回は5mmメッシュで測定し、平板測量と同じ20cm間隔の等高線として表現した(第8・9図)。A地区・C地区ともに1日で測量が終了した。平板測量図と照合し、補正を行った。

(齊藤・野島)

V. 佐田峠墳墓群の発掘調査

第1節 佐田峠1号墓（写真図版2～8）

A地区に2基ある墳丘のうち、南側にある方が1号墓であり、丘陵の先端部にあたる。墳丘東側は崖に接しており急斜面になっている。墳丘の遺存状況はおおむね良好だが、西側の墳丘裾部は後世の林道開削のため削平を受けている。また、南西側墳端付近は傾斜が緩やかになっており、墳丘裾を示す傾斜変換点が見出しづらくなっている。墳形の遺存状況の良い北東側の地形を考慮し、1号墓と2号墓の隣接部分の標高を墳丘裾と想定すると、南北16m前後・東西12m以上となる長方形の墳丘であったと想定できる。墳頂平坦部の広さは、およそ南北5.5m・東西3.5mである。

墳丘規模および外表施設の確認のため、墳丘裾部と考えられる範囲にピンポールやボーリングステッキを刺して石の有無を確認したが、貼石が並ぶような顕著な様子はみられなかった。先述した試掘調査において周溝から弥生土器が出土している（図版第43（2）、第37図12～15）
(野島)

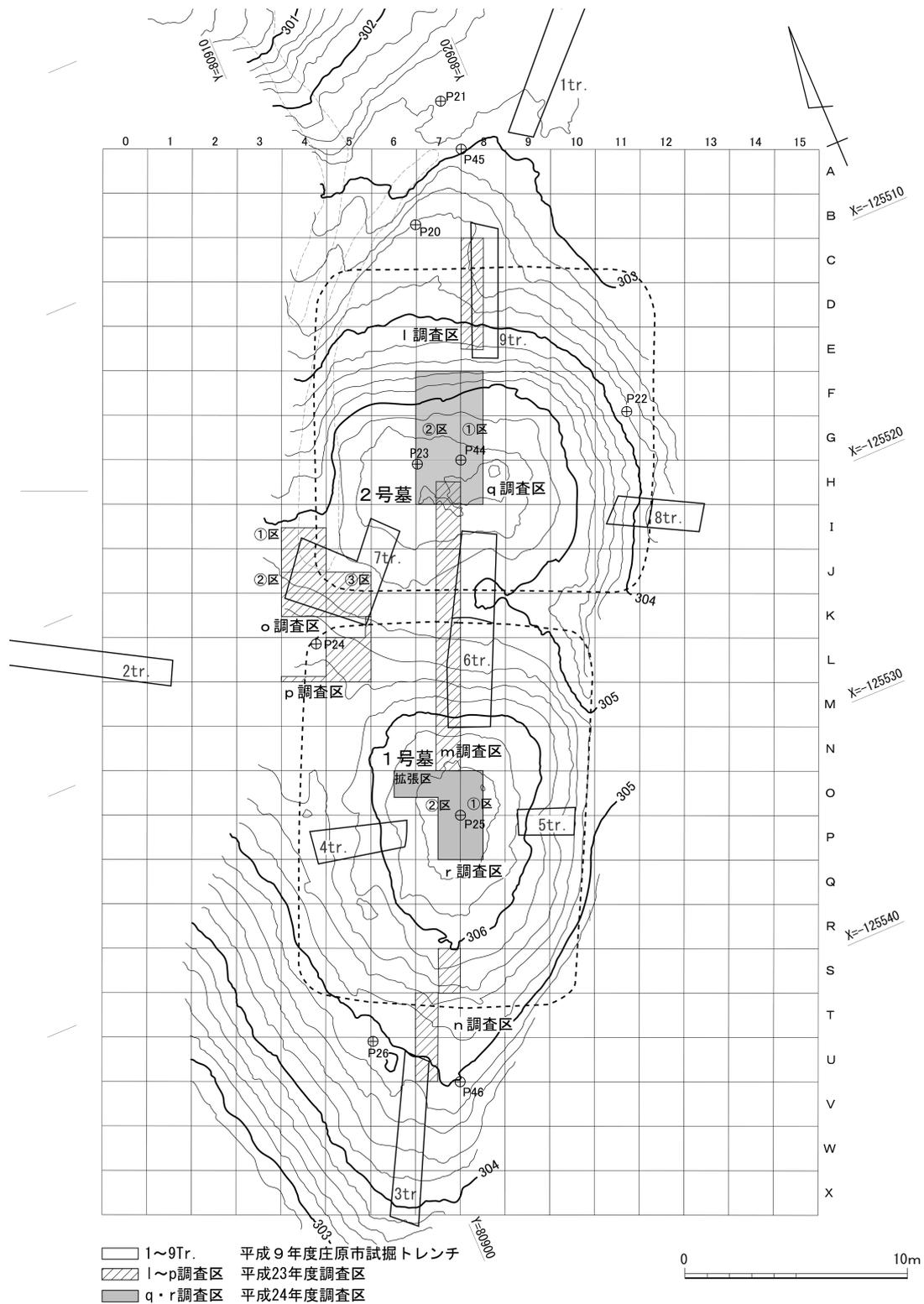
(1) 調査区設定

a. 墳頂平坦部（図版第3～6、第11・12・14図1・2）

r 調査区（図版第3、第11・14図1・2） r 調査区は佐田峠1号墓における墳頂平坦部の埋葬施設と墓壙配置を確認するために設定した。調査区は7と8、OとPの間のグリッド・ラインの交点に位置するP.25を中心として、南北4m・東西2mの範囲とし、調査途中で調査区北西部分をNとOの間のグリッド・ラインに沿って西側に2m、南北1.2mの範囲を拡張した。
(村田)

b. 墳丘周辺部（図版第7・8、第13・14図3・4、第19図8）

n 調査区（図版第7、第13・14図3） n 調査区は1号墓の墳丘南側、墳丘規模および墳丘裾部の外表施設の確認をするために設定した。1号墓南側には試掘トレンチ（3tr.）が設定されたが、平板測量図からは試掘トレンチ内に1号墓の南側墳丘裾部はあたらないと推測した。そこでn 調査区は試掘トレンチよりも北側でその南西隅が試掘トレンチ（3tr.）と一部重なるように設定した。当初、n 調査区は6と7、RとSの間のグリッド・ラインの交点を北西端として南北8m・東西1mの調査区を設定する予定であった。しかし植林のため、調査区の一部を南に2m移動させ、墳丘裾部を確認するための調査区を6と7、SとTの間のグリッド・ラインの交点を北西端として南北4m・東西1mで設定した。7-T-Uグリッドの西側1mに相当し、調査区名をn 調査区②区とした。さらに墳丘斜面の外表施設を確認するための調査区を、7と8、RとSの間のグリッド・ラインの交点を北東端とし南北2m・東西1mで設定した。7-Sグリッドの東側に相当し、調査区名をn 調査区①区とした。最



第10図 佐田峠1・2号墓調査区配置図

最終的に n 調査区は南北に総長 6 m となった。

p 調査区 (図版第 8、第 14 図 4、第 18・第 19 図 8) 1 号墓の墳丘北西部隅角の状況、および北辺周溝の状況を確認するために、墳丘北西部隅角と想定できる範囲に p 調査区を設定し

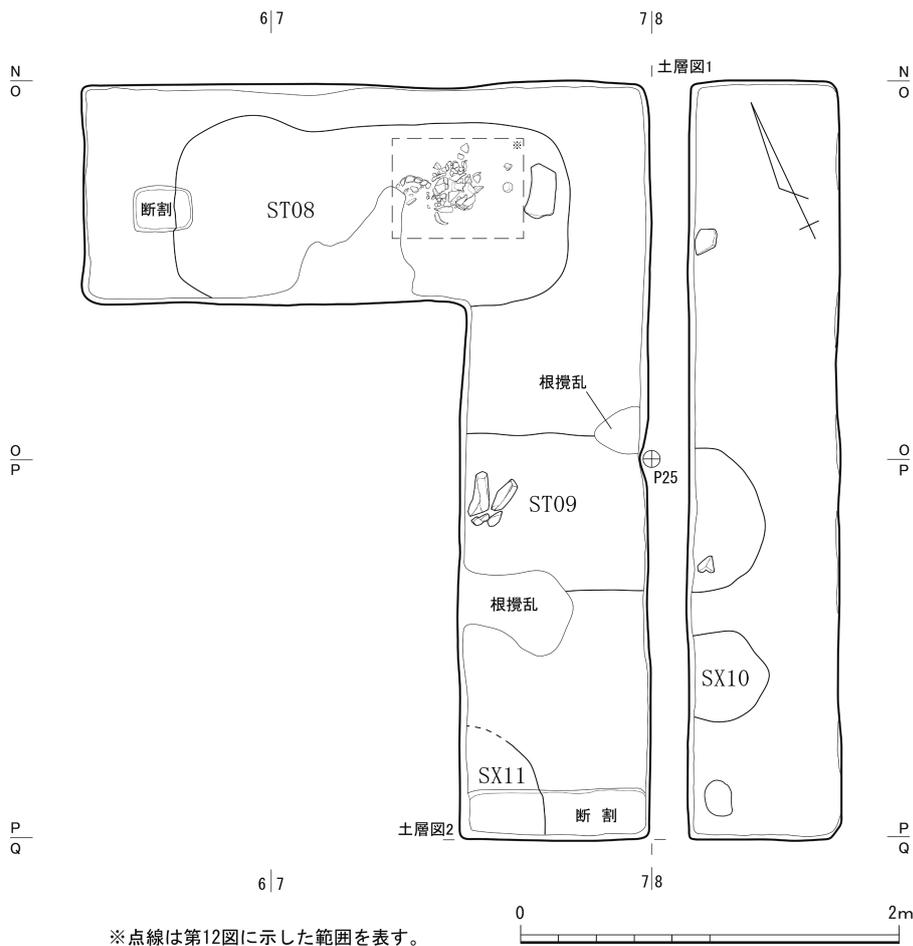
た。本調査区を設定する段階で、後述するm調査区の周溝SD02が検出されており、1号墓と2号墓はSD02によって区画されていることが判明した。さらにSD02は西に延伸し、2号墓の墳丘南西部隅角の周溝SD04と、1号墓の墳丘北西部隅角を巡る周溝に分かれるのではないかと推測された。したがって、SD02が1号墓北西方向から南西に屈曲するであろう位置を予想し、4と5、KとLの間のグリッド・ラインの交点を北西端とし、5-Lグリッドに南北2m・東西2mの調査区を設定した。さらに5・6の間のグリッド・ラインに沿って北に1m・幅0.2m、LとMの間のグリッド・ラインに沿って西に2m・幅0.3mの断ち割りを延伸させた。(脇山)

(2) 墳丘規模と土層堆積状況

斜面地に築造されていたため、その墳丘高は一定ではないものの、1号墓は周溝SD02の南端の墳丘裾から周溝SD03北端の墳丘裾まで、南北およそ17.2m、西側の墳丘構築状況(p調査区南壁断ち割り、第14図4)と東側の傾斜変換点から東西およそ12.6m、高さ1.4~1.7mとなる方形台状墓と想定できる。

墳頂平坦部では、r調査区において7と8の間のグリッド・ラインに沿って南北方向の畦を設定し、遺構検出面までの土層堆積状況を確認したところ、墓壙が掘り込まれる第33層の上に2層が認められた(図版第6、第14図1・2、第7・32層)。墓壙の掘り込まれる第33層¹⁾直上には、第32層が堆積している。第32層は土壌のしまりが強く、径5mm程度のクサリ礫(ナメラ礫)を若干含む黄褐色土層であり、南北端付近では5cm程度だが、中央付近では15cm程度とやや厚めに堆積していた。さらに、この第32層の上には、第7層が堆積している。第7層は表土直下にあるため細根が混じり、しまりも弱い黒褐色土層である。表土の影響を受けているが、墳頂平坦部全体で確認されたことから、埋葬終了後の薄い墳丘盛土があると判断した。墓壙と想定される遺構4基がすべて第33層上面で検出することができたことから、佐田峠1号墓は同じ面においてすべての埋葬が完了した後に、墳頂平坦部全体を盛土で整えて墳丘構築を終えていたものと考えられる。(村田)

また、墳丘北西部隅角にあたるp調査区では、南北2m・東西2mの5-Lグリッドを掘り下げることとした。平面的に約15cm掘り下げた時点で、グリッドの南東隅で黄褐色土、その北側に暗褐色土を検出した。この黄褐色土の広がりや1号墓墳丘北西部隅角の盛土、暗褐色土の広がりや周溝内埋土ではないかと推測したが、平面的に明瞭な周溝のラインを確認できなかった。そのため、p調査区の東壁と南壁に沿って断ち割り(サブトレンチ)を設定し、SD02から西に延伸する溝の形状を東壁・南壁の土層の観察から把握することとした。東壁は長さ2m・幅約0.2mの断ち割りを設定し、最終的にはp調査区からさらに北に1m伸ばし、o調査区と連結する断ち割りとした。また、p調査区南壁に沿って約2m・幅約0.3mの断ち割りを設定した。それをさらに西に向かって2m延長し、総長4mとした。壁面の土層観察で、南壁沿いの断ち割りでは、盛土の堆積(第14図4、第11~13層、第15~17層)を約3mにわたって確認することができた。第15層の西に堆積する第14層は地山に似たバイラ



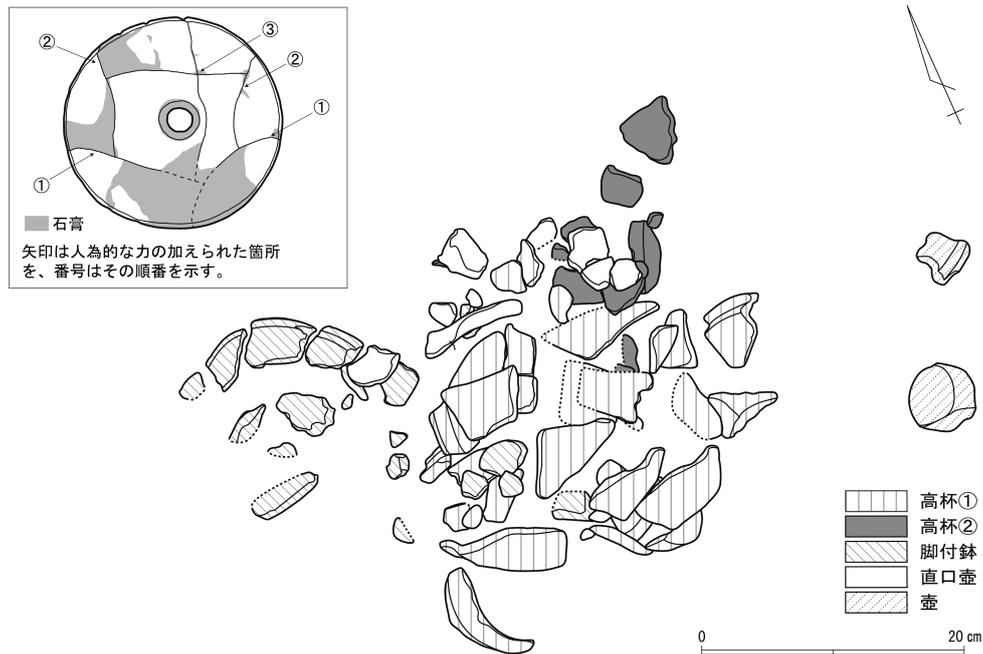
第11図 佐田峠1号墓墳頂平坦部r調査区平面図

ン土を含む土層である。他の層と比べしまりが弱いことから、この層は盛土ではなく、地山由来の自然堆積土であると推測した。東壁沿いの断ち割りでは、南側を約20~25cm掘り下げた段階で地山を確認した。東壁では南から約2mにわたって盛土(第19図8、第9~13層)を確認し、SD04の南側の掘形肩部となる盛土(第19

図8、第9層)の北端を検出した。

墳丘の構築は、地山直上に旧表土が認められないことから、最初に地面を一部掘削し、その後、地山面を平らに整地するための部分的な盛土(第14図4・第19図8、第12・13層)を施したと考えられる。平坦に整地した上に、南壁では東上方から西下方、東壁では南上方から北下方へ盛土(第14図4、第11・15~17層・第19図8、第9~11層)を施している。この角度のある盛土は墳丘隅角の堆積を示していると考えられ、この付近に1号墓墳丘北西部隅角が存在したものと推測できる。(脇山)

m調査区では、1号墓の北側を画する周溝SD02の堆積状況を確認するため、SD02を中心として西壁に沿って幅約0.25mの断ち割りをを行った(図版第14(1)、第19図7)。最終的な断ち割りは約4mで、おおよそJ~Kのグリッドの範囲となった。この結果、幅約2.1mのSD02の掘形を確認するとともに、1号墓の盛土の堆積状況を確認した。これにより、表土下がすでに盛土(第19図7、第7層)であることが判明したため、表土を剥いだ時点で調査区全体の掘削を停止した。(今福)



第12図 佐田峠1号墓墓壇 ST08検出面土器出土状況

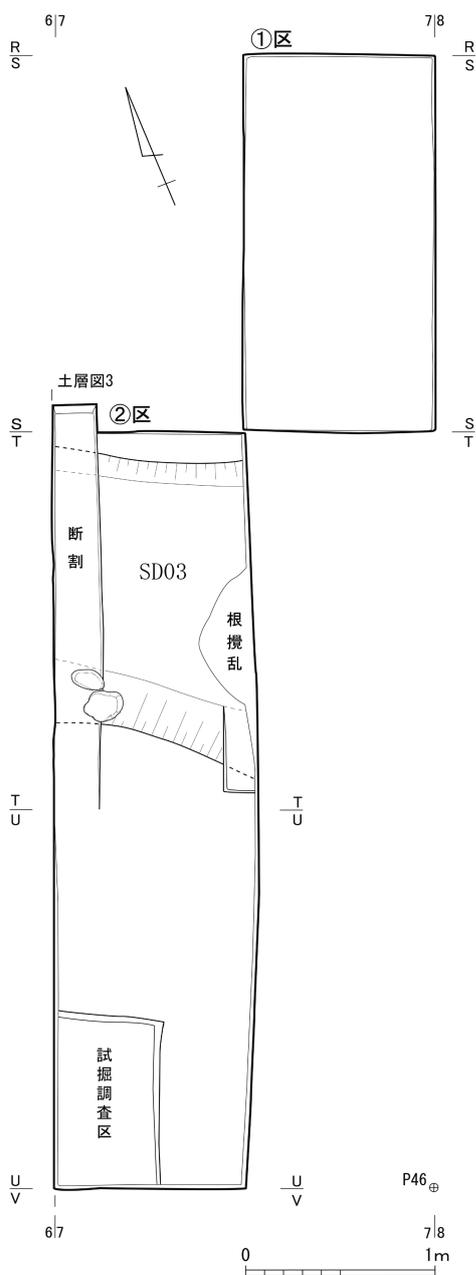
(3) 検出遺構

a. 墳頂部 (図版第3～6、第11・12・14図1・2)

墳頂平坦部 r 調査区 (図版第3～6、第11図) では表土の掘削を進め、薄い墳丘盛土 (第14図1・2、第7・32層) を除去した段階で、遺構の可能性のある土の広がりをも4ヵ所検出した。まず、調査区の北西部分において直上に角礫を伴う黒褐色混じりの黄褐色土の広がりを確認した。当初の調査区のさらに北西側にこの黄褐色土の広がりを確認する必要が生じたため、先述のように調査区北西部分を拡張し、表土を掘削した。土の広がり方が不明瞭だった西端部分に南北0.2m・東西0.3mの小ピット状の断ち割りを入れて遺構掘形を確認した。なお、拡張部分を掘削する過程で表土直下 (第14図1・2第1層)、黄褐色土の直上 (第14図1・2第7層) から土器片が集中して出土した。これに加えて、先に検出した角礫も標石と考えられたため、この黄褐色土の広がりを墓壇埋土と判断し、ST08とした。

r 調査区中央付近では、東西方向に広がる暗褐色土を確認した。この暗褐色土の掘形が長楕円形を呈し、その直上からはST08同様に角礫が検出されたため、これを墓壇埋土・標石と判断して、ST09とした。また、ST09の南側に隣接して黒色土の粒を含む黄褐色土が不整形に広がる状況が確認されたため、これをSX10とした。r 調査区南西隅では明黄褐色土の広がりが不明瞭ながら確認されたが、平面では輪郭が捉えきれなかったため、調査区南壁に沿って幅0.25mの断ち割りを入れ、断面観察を行った。その結果、この明黄褐色土の広がりにもなう掘形を確認し、これをSX11とした。

墓壇 ST08 (図版第3・4 (1)、第11・12図) 墓壇 ST08は調査区北西で検出された。上面検出に努めたが、墓壇掘形の西端が明瞭に確認できなかったため、想定した西端部分を小さく断ち割って掘形を確認した。平面形は不整形隅丸長方形を呈し、東西に主軸をもつ。墓壇規



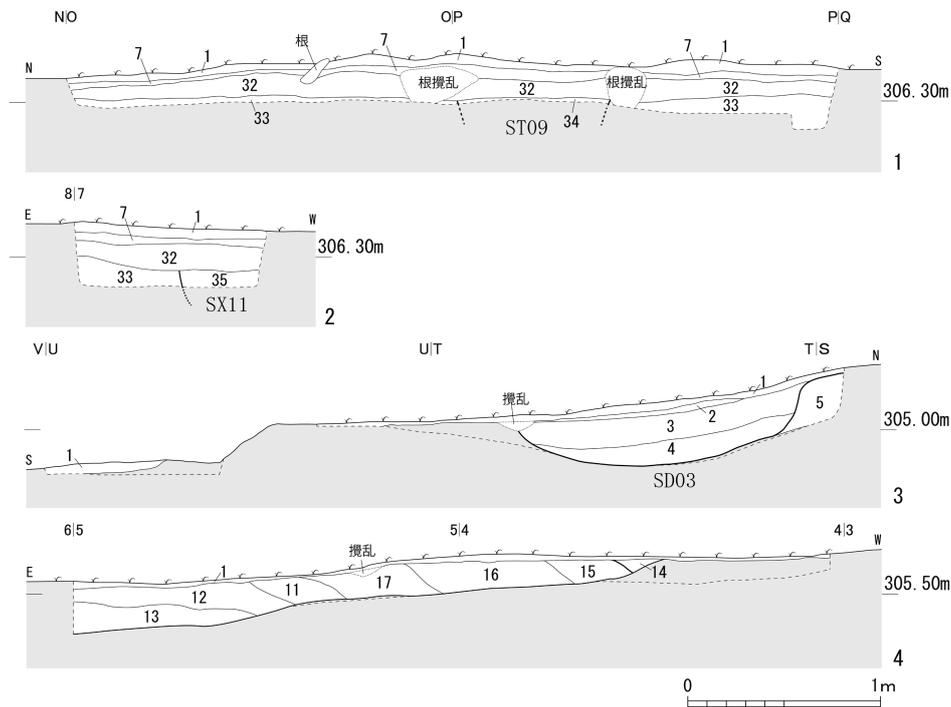
第13図 佐田峠1号墓墳丘周辺部
n調査区平面図

模は長さ2.07m、幅0.95mである。墓墳は墳丘盛土である第33層（第14図1）から掘り込まれていた。墓墳埋土は掘り込まれる盛土と比べてしまりの強い、黒褐色土混じりの黄褐色土である。墓墳東端部の直上からは標石と考えられる角礫が検出されており、その西側では土器片が集中して出土した（図版第3（2）・4（1））。そのうち、復原した高杯①の割れ方には複数の先後関係がみられたが、これは人為的な破碎によるものと考えられる（第12図）。また、これらの土器片はST08被葬者埋葬後の葬送祭祀において人為的に破壊された後、一カ所に集められたと考えられる。

墓墳ST09（図版第3（1）・4（2）、第11図） 墓墳ST09はST08の南約0.7m、調査区中央のP.25付近で検出された。平面形は長楕円形で、東西に主軸をもつ。墓墳規模は長さ1.6m以上、幅0.78m、掘形の西端は確認してはいないが、全長1.8m程度と推定できる。墓墳の掘形は畦の断面においても一部確認でき、墳丘盛土である第33層から掘り込まれていた（第14図1）。墓墳埋土である第34層はやや粘性の高い第33層と比べて固くしめる黒色土混じりの暗褐色土であり、径3mm程度の細かいクサリ礫（ナメラ礫）を含む。墓墳西部と南東部の直上からは標石と考えられる角礫が検出された。西側の角礫は割れていたが、元々は25～30cm大のひとつの石であったと考えられる。なお、ST09上から遺物は出土しなかった。ST08・09は墳頂平坦部の長軸に直交し、墓墳が並列に配置されていたといえる。

不明土坑SX10（図版第3（1）・5（1）・6（1）、第11・14図1） 不明土坑SX10はST09の南約0.2m、調査区南東で検出された。SX10の埋土は掘り込まれる盛土層に比べてしまりが弱く、黒色土の粒を含む黄褐色土である。平面形は不整円形を呈し、規模は径0.5m程度で、西端は畦の中で収束する。SX10は上面検出のみであるが、第33層（第14図1）から掘り込まれたと考えられる。まわりの墓墳と同じ面から掘り込まれること、平面形と規模から小児埋葬の可能性が考えられる。なお、SX10上から遺物は出土しなかった。

不明土坑SX11（図版第3（1）・5（2）・6（2）、第11・14図2） 不明土坑SX11はST09の南約0.7m、調査区南西隅で検出された。平面規模は確認した部分で40～60cm程度である。



第14図 佐田峠1号墓土層図

SX11の埋土（第35層）（第14図2）は粘性が高く、径0.5～2mm程度のクサリ礫（ナメラ礫）を若干含む明黄褐色土であり、掘り込まれる第33層に比べて軟質である。ST08やST09との位置関係から、ST08・09と並列して配置された墓壇の可能性が考えられる。なお、SX11上から遺物は出土しなかった。（村田）

b. 墳丘周辺部（図版第7、第13・14図3）

墳丘周辺部のn調査区②区では、表土（第14図3、第1層）を除去した段階で、試掘トレンチ内の埋め戻し土と東西に延びる暗褐色土（第14図3、第2層）の広がりを確認できた。第2層は調査区外に延伸する状況が認められ、これを周溝と判断してSD03とした。試掘トレンチの埋め戻し土を除去し、同時にSD03の掘形、および埋土の堆積状況を確認するための断ち割りを行った。断ち割りは西壁に沿って長さ2m・幅約0.2mで設定した。SD03の南側掘形肩部を検出したが、北側掘形肩部についてはこの時点では明確に確認できなかった。そのため、さらに断ち割りを北に約0.2m拡張し、北側掘形肩部の確認を行った。②区において表土直下から盛土（第14図3、第5層）を確認したため、①区でも表土を除去した段階で掘削を停止した。①区・②区ともに墳丘上に外表施設は確認できなかった。なお、n調査区では遺物は出土しなかった。

周溝SD03（図版第7、第13・14図3） 周溝SD03は②区の北側を東西に走る溝で、最大幅約1.5m、検出面からの深さ約25cmである。溝の埋土には3層（第14図3、第2～4層）が堆積する。SD03の南側の肩部では川原石2点を検出したが、列石・貼石のような角礫ではないことから原位置に据えられたものではないと判断した。（脇山）

第2節 佐田峠2号墓（写真図版9～15）

1号墓の北側に位置しており、1号墓と2号墓の間には両者を区画するようなゆるやかな周溝SD02がみられる。1号墓と同じく墳丘の東側は崖に接しており、急斜面となっている。墳丘東側の遺存状況は良好だが、北側は盛土が若干流出しており、西側の墳丘裾部は山道によって削平されている。北側に低く傾斜した尾根上に構築されているため、墳丘北側の斜面部分がかかなり長くなる。北側の傾斜変換点付近を墳丘裾と想定すると、墳丘は一辺14～15m前後の正方形に近い平面形となる。墳頂平坦部の広さは南北約4.5m・東西約8mほどで、東西に長い長方形をなす。なお、試掘調査において南西隅の周溝から土器片が1点出土した（図版第45（1）、第38図4）。
(野島)

(1) 調査区設定

a. 墳頂平坦部（図版第10～12、第10・15・19図5）

q調査区（図版第10～12、第15・19図5） q調査区は佐田峠2号墓における墳頂平坦部の埋葬施設と墓壇配置を確認するために設定した。当初、q調査区はP.44を基準として、8-Fグリッド・8-Gグリッド・8-Hグリッド西半と7-Hグリッド東半の逆L字形の調査区を設定した。その後、表土（第19図5、第1層）を除去すると8-Fグリッド西半以外の調査区では褐色土（第6・21・23層）、8-Fグリッド西半では淡黄色土を検出し、7-Hグリッドで角礫を検出した¹²⁾。その付近の礫の有無を確認すること、8-Fグリッド西半で見られた褐色土と淡黄色土の境界を西側で確認することを目的に、7-Fグリッド・7-Gグリッドと7-Hグリッド西半まで調査区を拡張し、南北6m・東西3mの長方形とした。
(藤井)

b. 墳丘周辺部（図版第13～15、第10・16～18・19図6～9）

l調査区（図版第13、第16・19図6） l調査区は2号墓墳丘北側の墳丘裾部・周溝・外表施設を確認するために設定した。試掘トレンチ（9tr.）から墳丘裾部が検出されており、この位置の再確認および記録作成を目的としたためにl調査区を一部重複させた。l調査区は、7と8、BとCの間のグリッド・ラインの交点を北西端とし、南北5m・東西1mの範囲とした。おおよそ8-C～Eグリッド西半に相当する。
(小森)

m調査区（図版第14（1）、第17・19図7） 1・2号墓間の谷部となっている地点では試掘調査の際に周溝が検出されていた。そこでm調査区では、この周溝を再検出して精査することによって、1・2号墓の先後関係を把握することを目的とした。当初、7と8、GとHの間のグリッド・ラインの交点P.44の4m南に北端を設定し、測量杭P.25の4m北にm調査区の南端を設定した。その規模は南北8m・東西1mとし、調査区は試掘調査の位置確認を行うために、試掘トレンチ（6tr.）に一部重複させる形をとった。また、破壊を最小限にとどめるために、周溝に直交させ、幅員を狭くした。調査途中段階で1・2号墓の外表施設の有無を再確認するために調査区を拡張する必要が生じた。そのため、m調査区北側に3m、

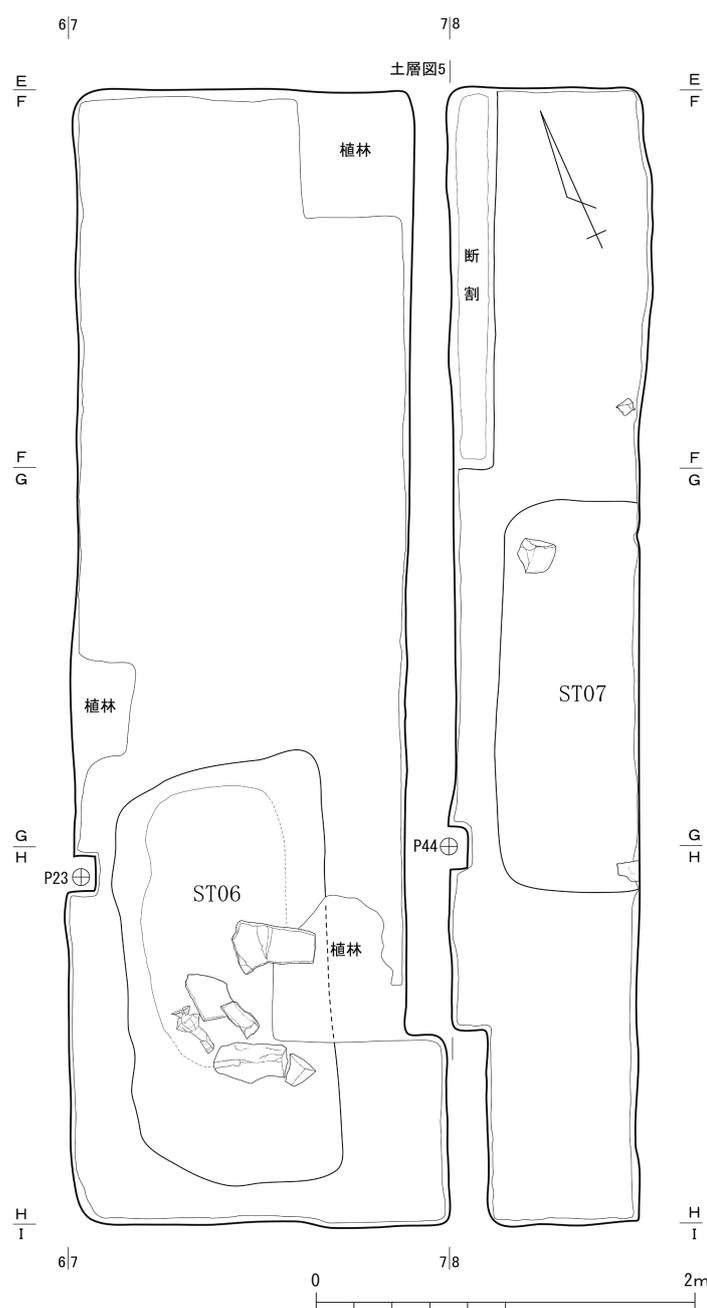
南側に2mの拡張を行い、結局南北13mの範囲とした。よって、調査区はおおよそ7-F~Nグリッドの東半に相当することとなった。(今福)

○調査区(図版第14(2)・15、第18・19図8・9)さらに、墳丘南西部隅角を巡るように○調査区を設定した、○調査区は試掘トレンチ(7tr.)で確認されていた2号墓墳丘南西部隅角の精査を目的とした。計画当初は試掘トレンチに重なるように、HとI、3と4の間のグリッド・ラインの交点を北西端として4・5-I・Jグリッドの範囲に設定する予定であった。しかし、m調査区内で検出された周溝の位置から、○調査区を1m南にずらして、L字形の調査区を設定した。これを3分割し、北から反時計まわりに①・②・③区とした。(小森)

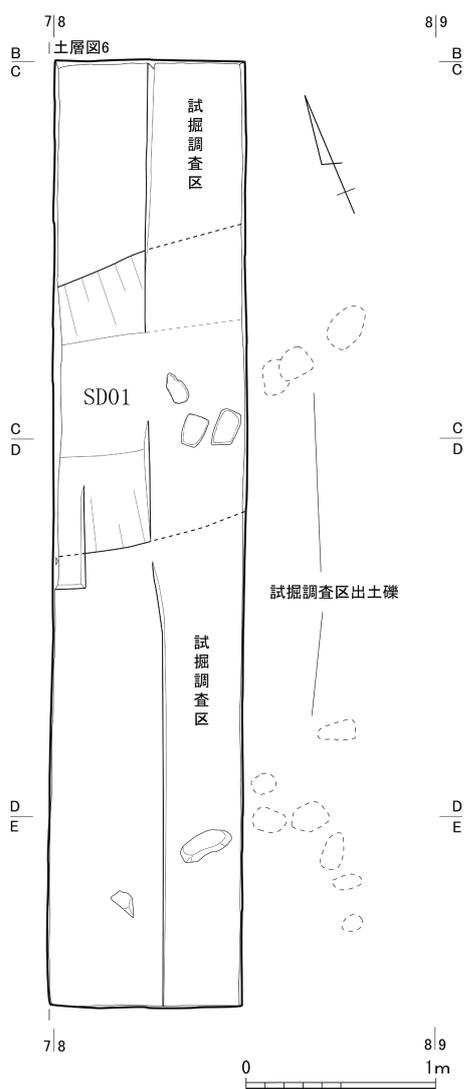
(2) 墳丘規模と土層堆積状況

墳丘裾部の調査区の状況から、2号墓は周溝SD01南端墳丘裾から周溝SD02北端墳丘裾を基準として、南北およそ14.4m、周溝SD04東端墳丘裾から東側墳丘傾斜変換点まで東西およそ15m、南側で高さ0.6m、北側で2mあまりとなる方形台状墓であると推定できる。

q調査区では、7-Fグリッド・8-Fグリッド西半を精査した所、複数の土色境界線を平面的に検出した。その境界を断面において確認するため、8-Fグリッド西端の畦沿いに長さ6m・幅0.25mの断ち割りを行った(図版第12、第19図5)。その結果、複数観察されていた境界線は流土の境界であることが判明した。加えて地山と盛土の堆積状況も確認できた。地山の上に盛土(第19図5、第6・24~30層)を検出し、断ち割りの北側では墳丘頂部



第15図 佐田峠2号墓墳頂平坦部q調査区平面図



第16図 佐田峠2号墓墳丘周辺部
1調査区平面図

より流れ落ちたと考えられる流土（第20～23層）を検出した。

墳頂平坦部での墳丘構築の過程は、まず、削り出した地山に盛土を施し、墳丘（第26～30層）の大部分を成形する。次に、上から墓壙を掘り込み、埋葬を行う。これを数回行った後、墳丘を覆うように最終的な薄い盛土（第6・24・25層）を施し、墳丘構築を終えていたものと想定できる。

また、当初2号墓の墳丘北半は、北側に大きく崩れてしまっていることも想定されていたが、墓壙ST07の北西隅の礫が原位置を留めていると考えられることから、ST07は元来北にやや低く傾斜していく斜面に掘削されていた可能性が高くなった。墳頂平坦部付近は比較的原状を留めているものと想定できる。

墳丘北側裾部の1調査区では盛土の詳細な検討を行えなかった。しかし、2号墓南側のm調査区において盛土を1層（図版第14（1）、第19図7、第6層）検出したことをふまえると、2号墓北側である1調査区においても盛土で成形していたと考えられる。なお、1調査区の周溝内埋土（第19図6、第4層）上面が削平を受けていることから、周溝SD01および1調査区周辺はある程度削平されていたと考えることができる。

m調査区では、周溝SD02の堆積状況を確認するため、SD02を中心として西壁に沿って幅約0.25mの断ち割りを行った（図版第14（1）、第19図7）。最終的な断ち割りの範囲は約4mで、おおよそJ～Kのグリッド範囲となった。この結果、幅約2.1mのSD02の掘形を確認するとともに、2号墓の盛土の堆積状況を確認した。これにより、表土下がすでに盛土（第19図7、第7・8層）であることが判明したため、表土を剥いだ時点で掘削を停止した。m調査区北端、2号墓墳頂平坦部でも、拳大程度の角礫2点が出土したにとどまった。この角礫の性格については盛土層上面で確認されており、佐田峠3号墓で見られるような墓標石の可能性も考えられたが、少なくとも外表施設となりうるような礫ではなかった。試掘トレンチ（6 tr.）は、一部が平面的に確認できるだけであったが、SD02東壁の土層観察によって、東壁は試掘埋め戻し土であることが判明したため、試掘トレンチのおおよその位置を推定することができた。なお、m調査区から遺物は出土しなかった。

○調査区でも試掘トレンチ（7 tr.）と重複させたため、試掘調査時の埋め戻し土を掘削した。①区東壁の土層壁面を観察したところ、盛土を1層（図版第14（2）、第19図9、第19層）確認することができた¹³⁾。（今福・藤井・小森）

(3) 検出遺構

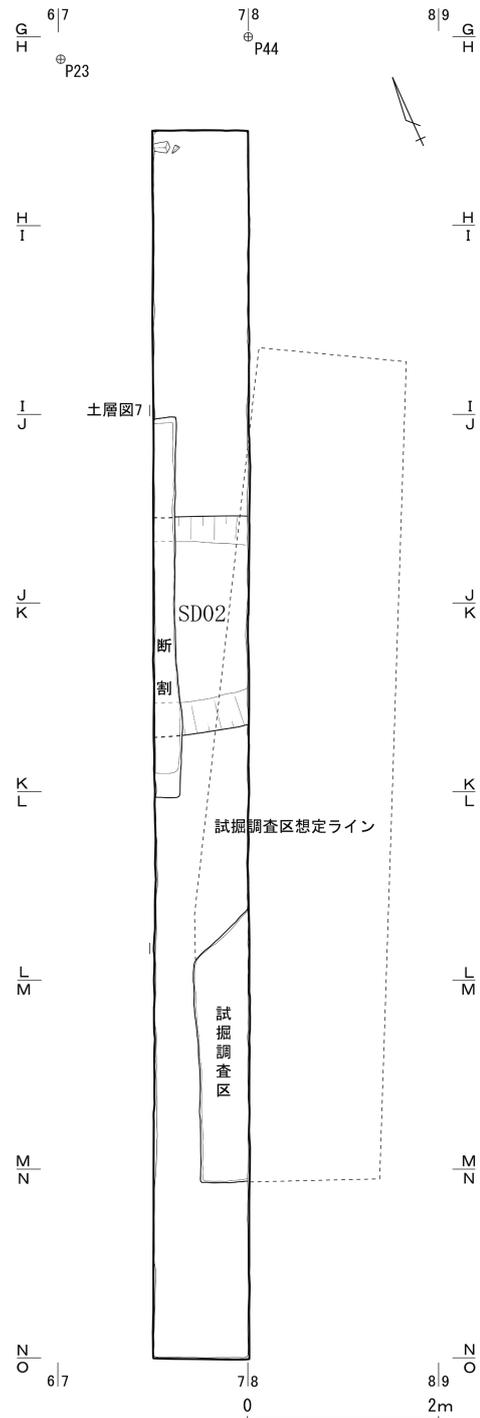
a. 墳頂平坦部（図版第10～12、第10・15・19図5）

墳頂平坦部のq調査区では、調査区南西で標石と考えられる礫が検出され、完形に近い台付長頸壺が出土した。この礫と台付長頸壺の付近を精査したところ、墓壙埋土の広がりを検出し、これをST06とした。調査区中央東側では隅丸長方形を呈する掘形と2点の礫を検出し、ST07とした（図版第10・11）。

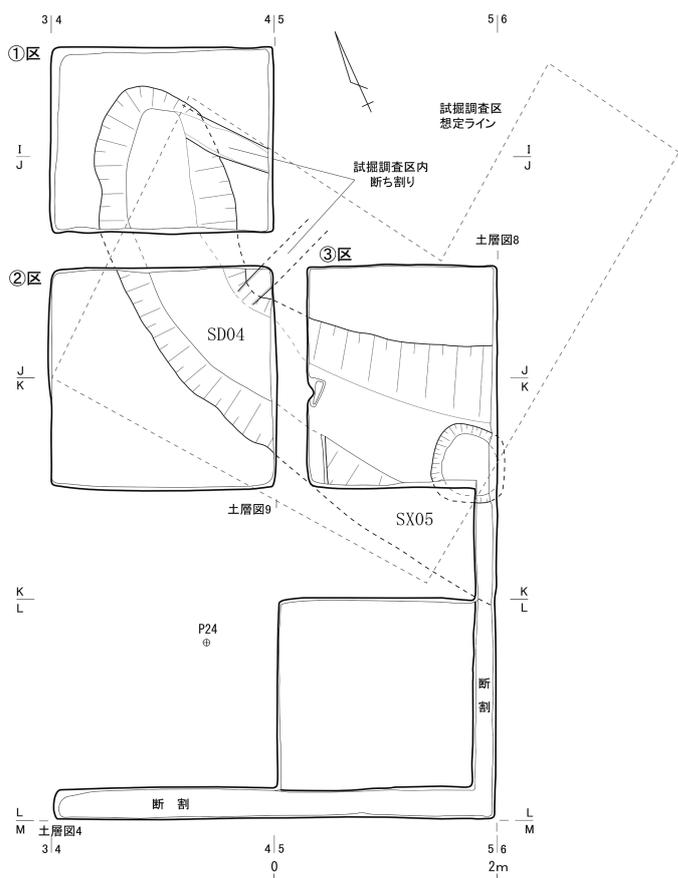
墓壙 ST06（図版第10・11（1）、第15図） 墓壙ST06は調査区の南西で検出された。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は長さ2.20m、幅1.07mである。ST06は墳頂平坦部の長軸に直交するように配置されていた。ST06北部では木棺蓋の腐朽による落ち込み土と考えられる土の広がりが検出された。また、中央部の直上からは標石と考えられる4点の礫が検出され、完形に近い台付長頸壺が出土した（図版第11（1））ほか、付近から2点の土器小片が出土した。

墓壙 ST07（図版第10（1）・11（2）、第15図） 墓壙ST07はST06の北東、調査区の東側で検出された。墓壙ST07は平面形が隅丸長方形を呈し、現状での規模は長さ2.07m、幅0.73mである。ST07上でも標石と考えられる礫が北西隅と南東隅に1点ずつ確認された。墓壙の東側の掘形は調査区内では検出されなかったが、南東隅に置かれていた標石の一部が検出されていることから、本来の幅は現状より少し大きくなる程度と考えられ、ST06とほぼ同じ大きさであると推測できる。ST06と並列し、墳丘長軸に直交するように配置されていた。なお、ST07上からは遺物は出土しなかった。

b. 墳丘周辺部（図版第13～15、第10・16～18・19図6～9）



第17図 佐田峠2号墓墳丘周辺部m調査区平面図



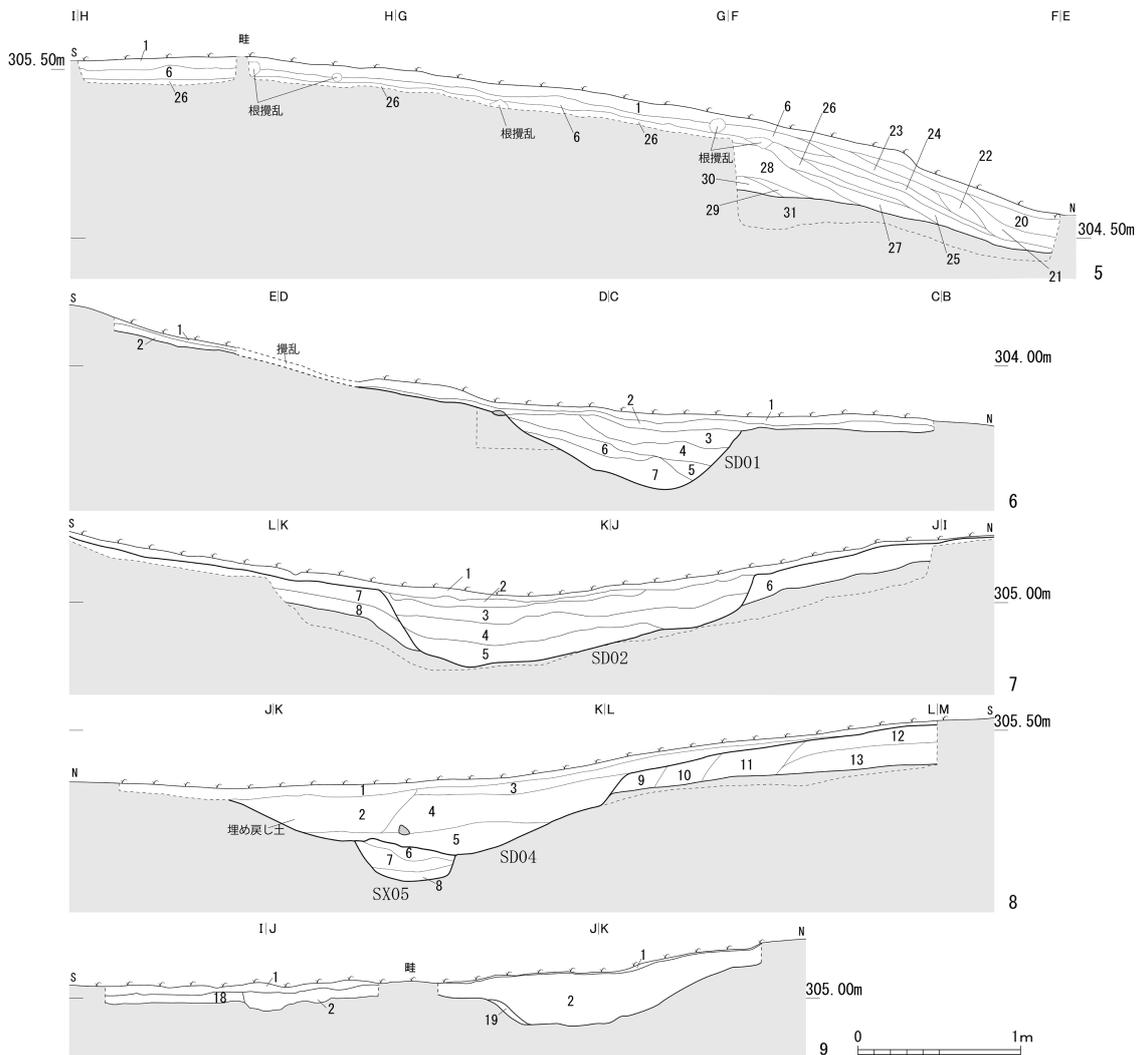
第18図 佐田峠1号墓p調査区および佐田峠2号墓
墳丘周辺部o調査区平面図

墳丘北側裾部の1調査区では、表土（図版第13（2）・第19図6、第1層）を除去した段階で、1調査区南側の墳丘上には垂円礫2点が出土し、1調査区東半に試掘トレンチ（9 tr.）の一部を検出した。また、1調査区中央北寄りに東西に延びる黄褐色土（第19図6、第3層）を確認し、周溝と推定した。これを、SD01とした（図版第13、第16図）。試掘埋め戻し土を除去し、試掘調査時に確認されていた角礫2点および垂円礫1点を暗褐色土の付近から再検出した。垂円礫については、原位置より動いているものとして取り上げた。この際に、平坦な角礫2点（図版第13（1））が外表施設であるかどうかの判断ができなかったため、角礫を残して掘り下げなかった。続いて、SD01の埋土を掘削し

北側肩部を確認した。南側肩部はこの段階では明確に把握できなかったため、1調査区西壁に沿って幅0.15m程の断ち割りを入れ、掘形の確認を行った。試掘調査時に墳丘裾と想定された部分に東西に延びる周溝の掘形を検出することができた。周溝内からは遺物は出土しなかった。

調査当初、検出された礫の性格を判断できなかったため、1調査区外においてこれらに続く礫を確認することとした。1調査区より西側では調査区に沿って東西幅約1m、東側では東西幅約2mの範囲に10cm間隔でピンポールを突き刺して、礫の有無を確認した。その結果、試掘調査時に検出された同じ位置に礫が確認できたものの、これ以外の場所では確認できなかった。これらの礫は原位置を保っていない可能性が高いが、礫が集中して検出されたことに留意すると、2号墓では部分的な貼石が施されていたことも考えられる。

周溝 SD01（図版第13、第16・19図6） 2号墓の北辺を東西に延びる浅い溝で、最大幅約1.45m、検出面からの深さ約35cmである。周溝 SD01内は5層（第19図6、第3～7層）に分層できた。下層の2層（第6・7層）は、堆積角度が異なり盛土同様の粘性がみられたことから、当初周溝内盛土と判断していた。しかし、調査後に第6・7層は南側に流れ込んだように堆積していること、溝内に盛土を施すような状況は他の調査区や遺跡においても類例がないことから、角礫直下の2層（第6・7層）は、SD01内に流れ込んだ盛土起源の流土であ



第19図 佐田峠2号墓土層図

る可能性が高いと判断した。なお、2号墓の南側には周溝 SD02・周溝 SD04がm・o調査区でそれぞれ確認されている。SD02とSD04の周溝底面は標高304.6～304.8mである。一方周溝 SD01の底面は標高303.2mであり、SD02・SD04と比べSD01の標高は1.4～1.6m低いいため、2号墓南辺と北辺の周溝は連結していなかった可能性もある。

周溝 SD02 (図版第14 (1)、第17・19図7) m調査区では、表土 (第19図7、第1層) を剥いだ時点で試掘トレンチ (6 tr.) の一部を検出した。同時に調査区内を東西に延びる幅約1.3mの黒褐色土の広がり (第2層) を確認した。調査当初この第2層の広がりが周溝の幅であると判断し、これをSD02として掘削を開始したが、断ち割りによって、さらに北に広がっていることが確認できた。断ち割り西壁面の観察から、SD02の埋土は表土下4層 (第2～5層) に分層できた。結局、周溝 SD02は調査区を東西に走り、幅約2.1m、検出面からの深さ40cm前後と判明した。後述するo調査区内で検出された周溝 SD04から続く溝であると考えられる。

また、1・2号墓の先後関係を把握するため、調査区西壁の土層断面を精査したが、切り

合い関係は確認できなかった。ただし、周溝内埋土最下層の第5層が1号墓寄りに堆積していたことから、1号墓が2号墓に先行した可能性が考えられる。少なくとも、SD02を共有していることから、SD02が埋没する前に両墳丘墓がそれほど時期を隔てることなく築造されたと想定できる。

周溝 SD04 (図版14 (2)、第18・19図8・9) o 調査区①区南側、③区の西側にそれぞれ土層観察用の畦を0.3m幅で設定し、掘削を開始した。各区の表土(第19図8・9、第1層)を除去した段階で、試掘調査時に確認されていた周溝上面を検出した。これをSD04とした。周溝SD04は最大幅約2.4m、検出面からの深さ約36cm、墳丘南西部隅角を巡る。o・p調査区間の断ち割りにおいてSD04掘形の南側肩部が確認できた。③区東壁の観察から、SD04の周溝内埋土は3層に分層できた(第19図8、第3～5層)。SD04埋土である第3・4層と周溝SD02埋土の2層(第19図7、第2・3層)は、土質が類似していることや、底面の標高差が約20cmとあまり差がないことから、両者は同一の周溝であると推測した。

①区では試掘埋め戻し土を除去し、未掘部分の掘削を行ったところ、SD04は調査区外に延びず、①区内で収束することが判明した。②・③区においても、試掘埋め戻し土を除去し、SD04の掘形および2号墓墳丘南西部隅角の検出に努めた。墳丘南西部隅角では、試掘調査時に設定された2ヵ所の幅0.2～0.3mの断ち割りを再確認した。墳丘裾部の精査から、2号墓墳丘の南西部隅角は突出しない墳丘形態であると判断した。SD04の掘形は①・②区では明確に検出することができたが、③区では掘形の南側肩部が検出できなかったことから、③区ではSD04の幅が急に広がると考えられた。このため、先述したように、SD04と周溝SD02の位置関係や周溝の深さから両者は一連の周溝と推断することとした。しかし、SD02はo・p調査区近くで分岐し、それぞれ1・2号墓へ延びる可能性も考えられたため、③区東端の南北の断ち割りを南側に拡張し、その有無を調べることにした。その結果、SD04南側の掘形上端を検出したが、この他に周溝の掘形となるような土層は認められず、SD02が分岐して1号墓北西部隅角を巡るわけではなかったことが判明した。③区では試掘埋め戻し土を除去したのち、南東隅で暗褐色土の堆積(図版第15、第19図8、第6層)が認められた。第6層を精査した結果、炭化物と焼土を多く含む土坑1基を検出した。これを焼土坑SX05とした。当初、第6層はSD04の最下層埋土と考えていたため、SX05上面を一部掘削してしまった。なお、今回の調査では遺物は出土しなかったが、試掘調査時に2号墓南西周溝隅より弥生土器細片が出土しており、1点(図版45(1)・第38図4)を図化した。

焼土坑 SX05 (図版第15、第18・19図8) 焼土坑 SX05は、③区南東隅の周溝SD04底面で大部分が検出され、最大幅約0.8m、深さ約20cmの平面形をもつ土坑と考えられた。土層壁面の観察でSX05内には3層の埋土(第19図8、第6～8層)が堆積していた。埋土には炭化物・焼土がみられた。特に最下層の第8層からは炭化物が顕著にみられた。第8層中の炭化物を7点採取し、加速器質量分析法(AMS法)による放射線炭素の年代測定を行った(第七章第4節)。このうち2点(試料No.5:PLD-19515、試料No.6:PLD-19516)の測定が行われ、暦年較正による2σ暦年代範囲は、ともに657-715calADであり、7世紀中葉から8世紀

初頭という実年代幅を得た。発掘調査時における o・p 調査区間の断ち割り東壁の土層観察では、SX05が上層（第19図8、第4・5層）から掘り込まれている状況は確認できなかった。そのため、発掘当初は SX05が SD04と同時期、もしくはそれ以前に埋没したものと考えていた。しかし、上記のような測定結果を得たことと、SX05直上の第5層にも炭化物がやや含まれることから、7世紀中葉から8世紀初頭に SX05が SD04の埋土を掘り込んで再掘削されていたことを考える必要がある。SX05上層は大部分が試掘埋め戻し土によって厚く覆われていたため、SX05直上にまで試掘調査によって埋め戻された土壌の影響により、層序を見誤った可能性が考えられる。しかし、1・2号墓の時期は試掘調査時に出土した弥生土器細片より、やはり弥生時代後期前葉の掘削と考えられる。（小森）

第3節 佐田峠3号墓（写真図版16～24）

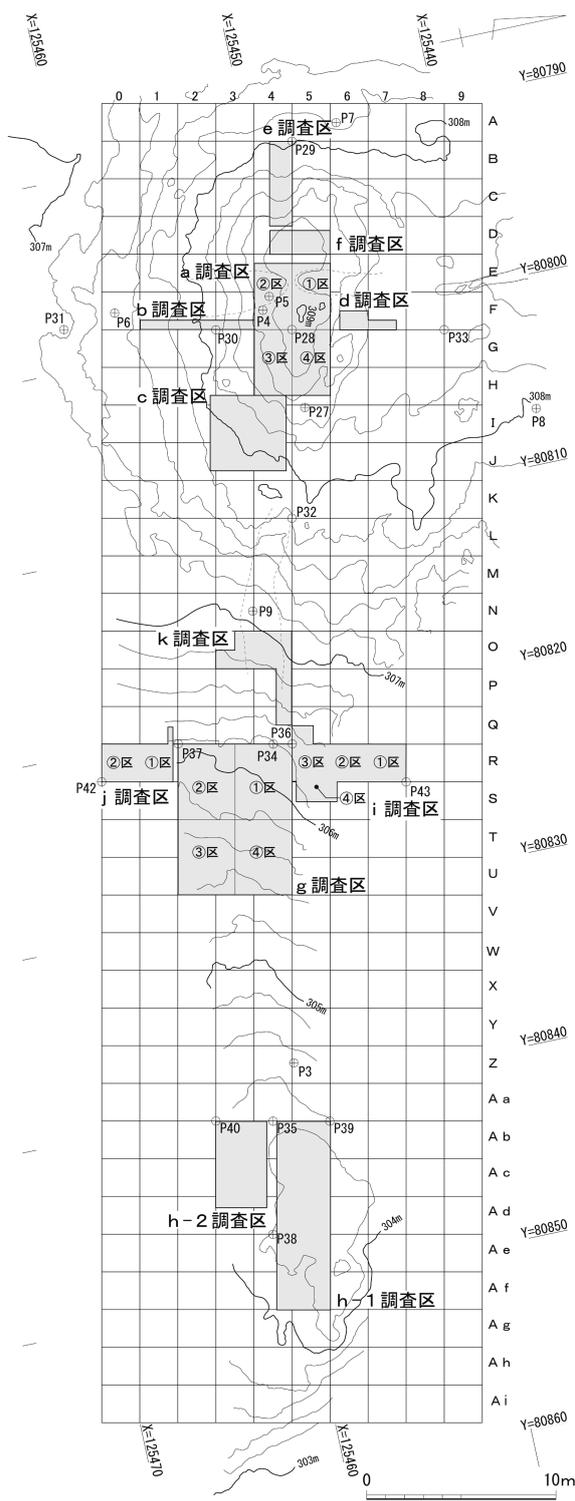
佐田峠3号墓は試掘調査によって確認された。墳丘の遺存状況は悪く、北側の盛土の流出や重機の通過によって変形を被っていた（図版第16（1）、第9・21図）。遺存状況の良い墳丘南西部隅角においても突出部を想定させるような等高線は描けなかった。墳丘の北側には、およそ10m四方の範囲に平坦面が存在していたが、北側墳丘面の等高線がかなり乱れていることを考えると、植林の際に墳丘が一部改変された可能性が高い。よって、現状の測量図だけでは墳丘規模を復原することは難しいものと考えられた。そこで、試掘において作成された記録を参考にした結果、墳丘はおそらく南北8m・東西15m前後と想定された。墳頂平坦部の広さは南北約2.5m・東西約8mであり、東西にかなり長い長方形をなすようであった。墳丘周辺の表土から貼石であったと考えられる川原石を10数点確認した。試掘調査の際に、周溝や墳丘上から弥生土器が出土した（図版第47、第41図）。（野島）

(1) 調査区設定

試掘調査と測量調査（第1次調査）の成果をもとに、佐田峠3号墓の墳丘の形態・規模・構造を明らかにするために、6ヵ所の調査区（a～f）を設定した（第21図）。

a. 墳頂平坦部（図版第16（2）～21、第21～23図）

a 調査区（図版第16（2）～21、第21・22図） a 調査区は佐田峠3号墓の墳頂平坦部における埋葬施設と墓壙配置を確認するために設定した。まず、墳丘の中心と想定した場所に P.28（4と5、FとGのグリッドラインの交点）を設置した。また、P.28を通り、墳丘の長軸である東西方向のラインを仮に墳丘東西主軸とした。さらに、P.28上の東西主軸と直交するラインを南北主軸とした。そして、P.28から南北それぞれ2m、東西それぞれ3.5mの範囲（南北4m・東西7m）を a 調査区とした。墳頂平坦部での盛土の構造を明らかにするため、調査区内の①区・②区西壁を基準的な観察面とし、埋葬施設の数・規模・構造や墳丘構築状況を確認することとした。a 調査区内を南北2m・東西3.5mの4区画に分割し、北東方向の



第20図 佐田峠3～5号墓調査区配置図

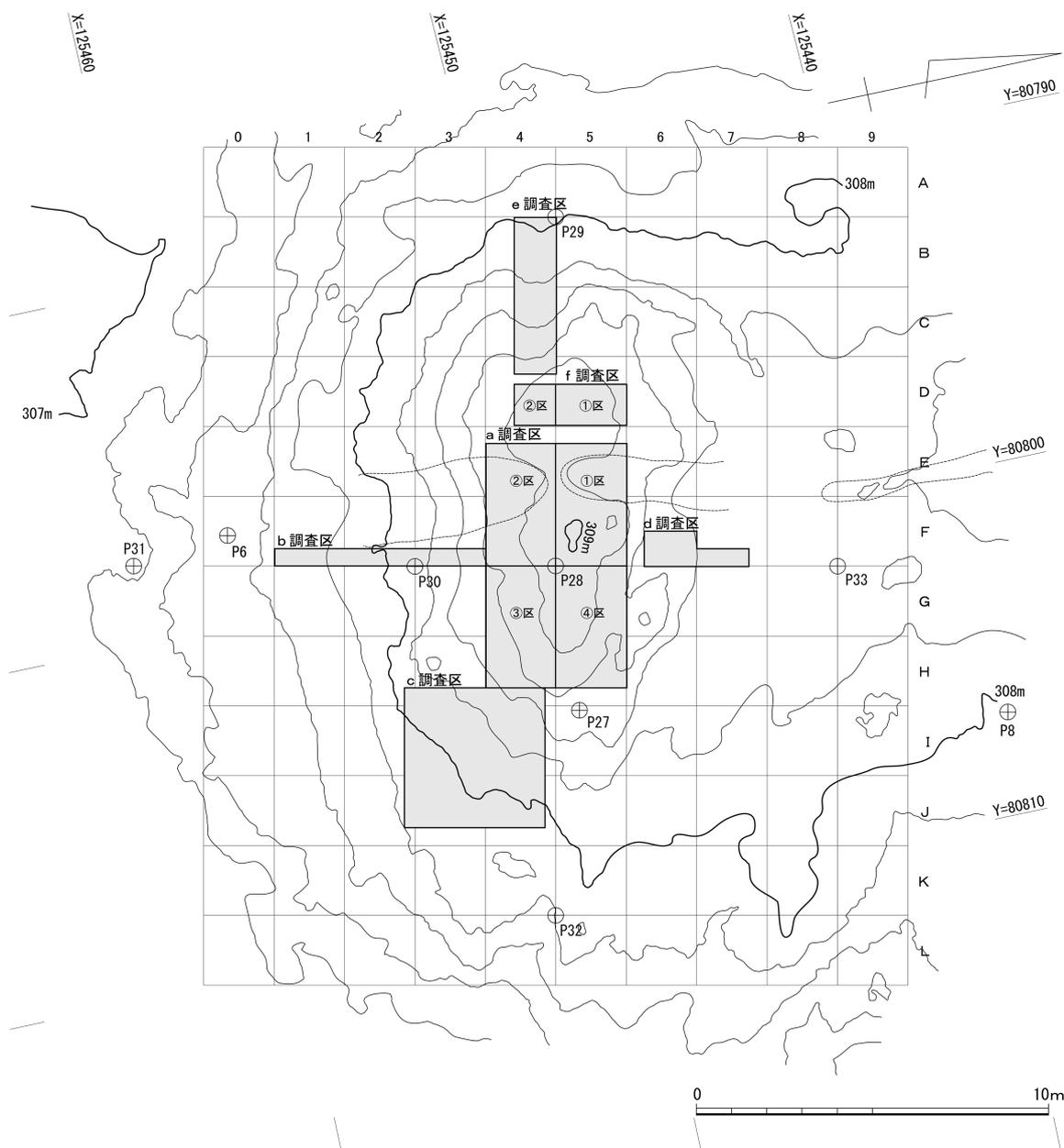
c 調査区 (図版第22 (2)・23、第25図) c 調査区は、以前の試掘トレンチ (10tr.) において検出された南東部隅角の突出部を再度検出し、突出部の形状と墳丘の規模を確認し、記録することを目的として設定した。まず、a 調査区③区に接するように、南北4 m・東西4 m

区画を①区とし、そこから反時計まわりに②、③、④区とした。

f 調査区 (図版第20 (2)、第21・22図) 第2次調査当初、調査区設定の際には、以前の試掘トレンチ (8 tr.) および、第1次調査における墳丘測量図から3号墓の規模を割り出したが、墳丘西端の位置と墳丘東西方向の規模を見誤った。このことから、墳頂平坦部のa 調査区の位置を実際の平坦部中央よりも東寄りに設定してしまった。その結果、墳頂平坦部の西側に埋葬施設未確認の区域 (a 調査区とe 調査区の間隙部分) を生じさせることとなった。このため、第3次調査において、a 調査区とe 調査区の間、南北3.3m・東西1.6mとなるf 調査区を設定した。f 調査区では、4と5の間のグリッド・ラインを基準線とした調査用の畦を設定して、その北側を①区、南側を②区とした。畦の観察を行いながら、専ら埋葬施設等の遺構検出に努めた。

b. 墳丘周辺部 (図版第22～24、第24～27図)

b 調査区 (図版第22 (1)、第24図) 墳丘主軸に直交し、P.28を通るラインの墳丘南側に、南北6 m・東西0.5mとなるb 調査区を設定した。墳丘斜面の範囲と平面形態、貼石の有無などを確認するためであるが、同時に調査区を墳丘外にまで長く設定し、周溝等、周辺遺構の有無も確認することとした。さらに墳丘外に広がる平坦面が築造ときに造成されたものなのかどうかを旧表土の状況から判断することとした。



第21図 佐田峠3号墓調査区配置図

の範囲とした。c 調査区の西壁の一部は貼石の検出のため、西側に0.6m程ずらした。また、c 調査区の北壁は植林された檜のため、墳丘主軸からおよそ0.3m南にずらした。

d 調査区 (図版第24 (1)、第26図) d 調査区は墳丘主軸に直交し、P.28を通るラインの墳丘北側に設定した。当初、南北1.5m・東西1mの調査区を設定し、後に北側に南北1.5m・東西0.4m前後の範囲を拡張し、結局南北3mの逆L字形とした。d 調査区では、墳丘の範囲と平面形態、貼石の状況を確認することとした。

e 調査区 (図版第24 (2)、第27図) e 調査区は墳丘上に設定した主軸に平行し、P.28と P.29を結ぶラインを東端とし、a 調査区から西に2m離れて、南北1.5m・東西4.5mの範囲に設定した。e 調査区では、試掘トレンチ (8tr.) の位置を確定して再掘削し、そこで確認さ

れた墳丘裾部を再度検出し、c調査区で検出された突出部と併せて墳丘の規模を確定することとした。
(野島・石貫)

(2) 墳丘規模と土層堆積状況

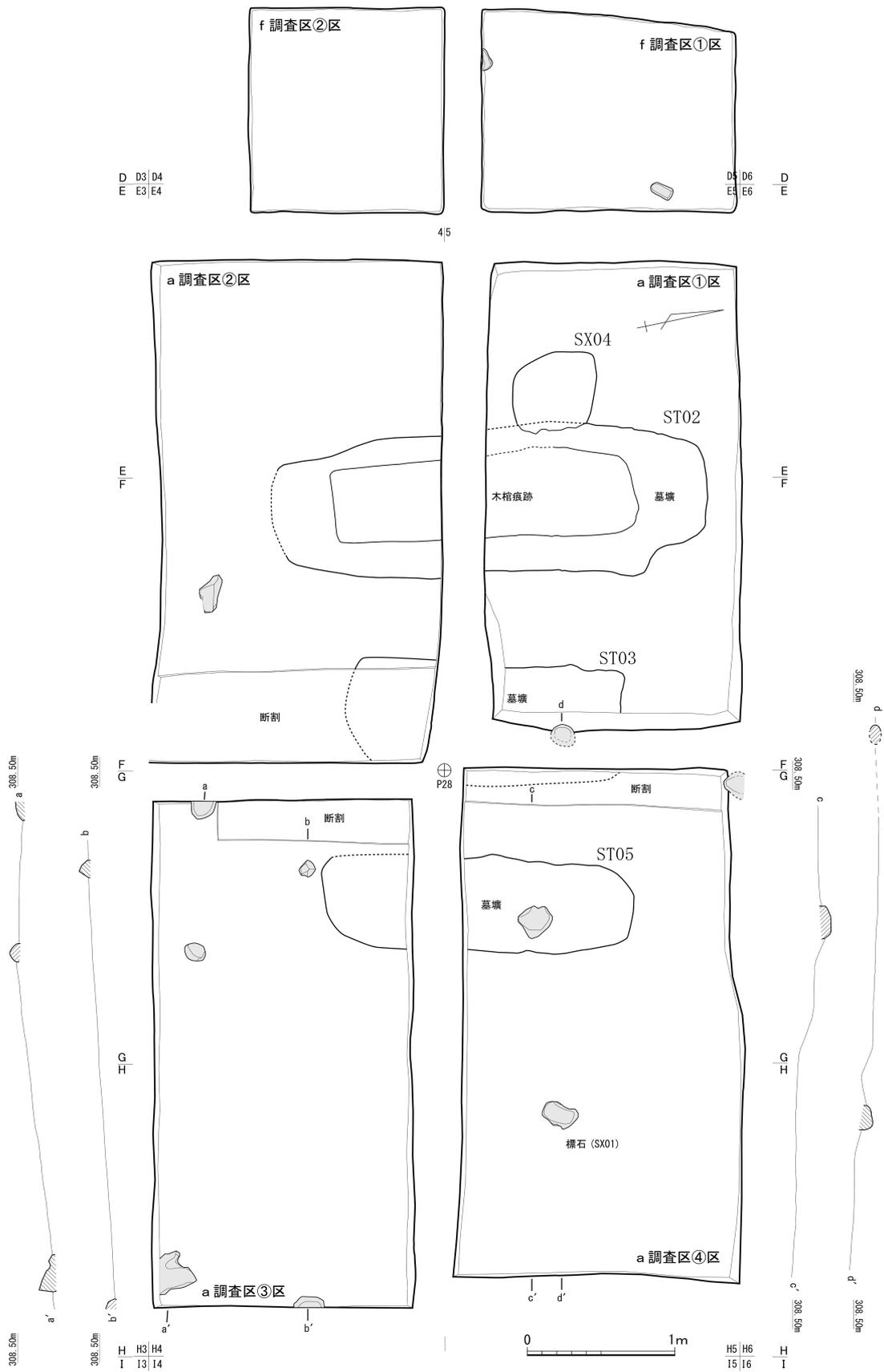
佐田峠3号墓は弥生時代中期末葉から後期初頭に築造された。東西の全長（墳丘裾間）がおよそ15.3m、墳丘中央部の南北（墳丘裾間）がおよそ7.05mとなる初期四隅突出型墳丘墓であることが判明した。墳丘裾まわりの標高が307.4～307.5m前後、現状の最高地点308.94mからすれば、およそ1.5m以上の墳丘高があったものとみられる。墳丘の周囲の斜面には、板状の貼石がほぼ2段から3段に貼られていた。突出部は若干ではあるが隅角に向かって湾曲しており、外に向かって突出するように成形されていた。当初推定された墳丘規模よりも南北に1mほど短いことがわかり、墳丘の長幅比がほぼ2.2前後となった。かなり細長いものであったといえる。三次・庄原地域の四隅突出型墳丘墓では、中期後葉の三次市陣山2号墓（落田1996）の墳丘長幅比がおよそ2.1となり、後期初頭とされる庄原市佐田谷1号墓（妹尾1987）の長幅比はおよそ1.5となることから、佐田峠3号墓の長幅比は陣山2号墓に近いものといえる。
(野島)

a. 墳頂平坦部（図版第16(2)～21、第21～23図）

a調査区（図版第16(2)～21、第22・23図） 第23図1・2に示したように、第1層は表土層である。第2層は褐色土層で、第3層以下の土層に特徴的なブロック状の黒ボク土やキビ土が含まれておらず、粘性としまりも弱いため一部は再堆積土の可能性が高い。第3層は黒褐色土層で、キビ土ブロックを含む。この層はa調査区全体にわたって検出される土層であることから、墳丘全体を覆うような盛土と考えることができる。後述するように、注口・脚台付鉢形土器（図版第17(2)・18(1)、46(2)、第40図14)の一部がa調査区①・②区の第3層上面（図版第18(1)）、あるいは第2層（図版第17(2)）から出土した。第4層は黒褐色土層で、a調査区の①・②区にしかみられず、後述する墓壙ST02の上面に限って堆積していることから墓壙ST02の封土と考えられる。

次に、墳丘墓礎について見ていく。第23図に示す第28層は黒色土層で、微細なキビ土ブロックを含むものである。①区では第16層が第28層と同じレベルで堆積している。第28層と第16層は色調的な違いはあまり無いが、第28層にはキビ土のブロックが混入しており、第3層、第4層と同じく人為的に築成した盛土層と推測できる。第16層も黒色土層で、a調査区全体にわたってみられる。しかし、この層には黒ボク土やキビ土のブロックが混入しておらず、自然堆積層と考えられる。

①区の第16層の上面レベルと第28層の上面レベルはほぼ一定の高低幅を保っていることから、第16層の低い部分に第28層を充填していたと推測できる。第16層が比較的水平的な①区では人為的な土が施されていないことや、第28層の上面がほぼ水平になるように盛られていることから考えても、ある程度の水平的な面を形成するために部分的な盛土をおこなったと判断できる。したがって、これらの層は墳丘構築当初の作業面ではないかと考えることができる。



第22図 佐田峠3号墓 a・f 調査区平面図

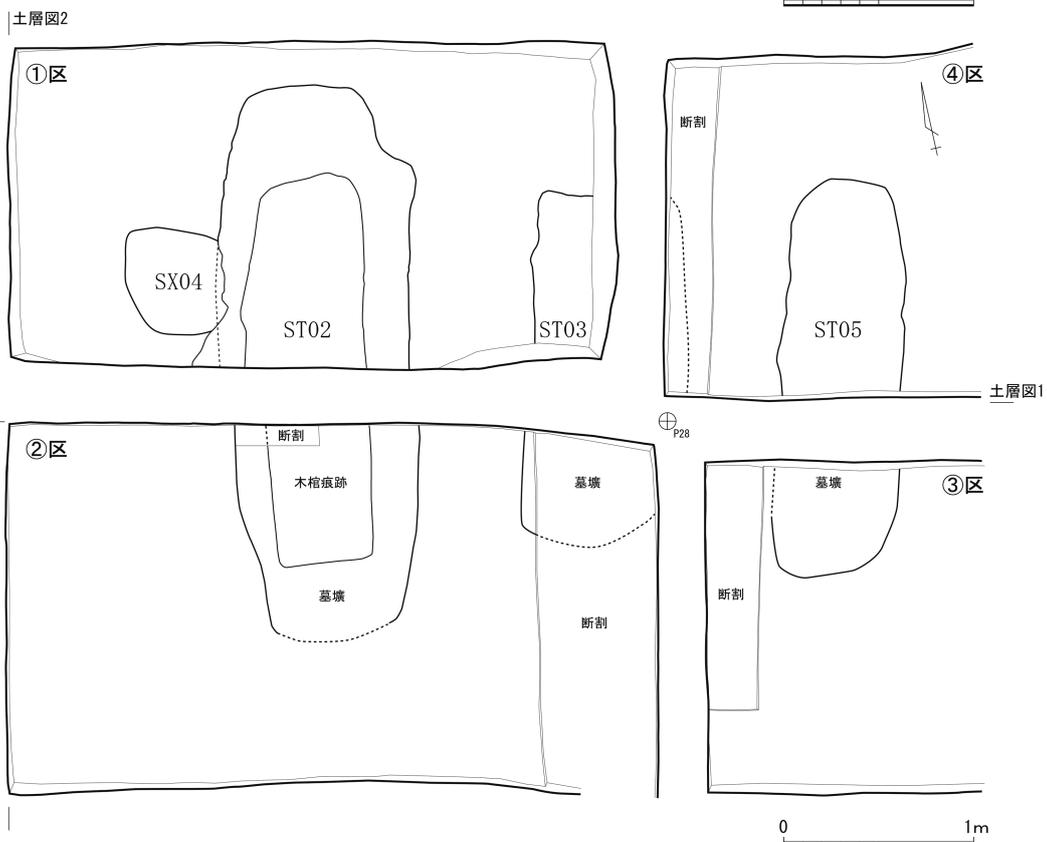
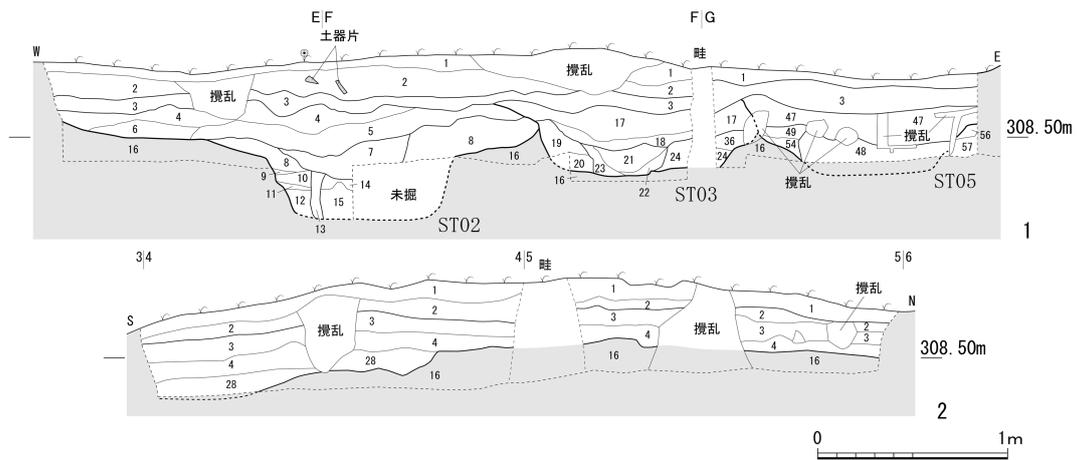
f 調査区 (図版第20 (2)、第21・22図) 調査用畦の壁面観察を行いながら、専ら埋葬施設等の遺構検出に努めた。表土を除去した段階で第2層上面を検出したが、これにともなって川原石が2点出土した (第22図)。平面図を作成し、レベル等を記入したのちに除去して、その下層を掘り進めた。また、第2次調査と同様に墓壙の検出を予想して、第4層上面、標高308.50m付近から精査を繰り返した。しかし、墓壙の確認はできなかった。第4層の堆積下には3号墓西側での地山と想定された第16層が一部平面的に確認されたため、ST02のように第16層を穿つ墓壙などが存在したとは考えられなかった。(野島・今福)

b. 墳丘周辺部 (図版第22～24、第24～27図)

b 調査区 (図版第22 (1)、第24図) b 調査区では、墳丘斜面の流土層直下から貼石を検出した。遺存状況は良好である。貼石は扁平な板石と川原石を用いていた。調査区の東壁にかかる貼石のうち、墳丘裾寄りの1段目の板石は傾斜が30度未満の緩やかなものとなっていたが、その上の板石の傾斜は約60度とかなり急であった。これは他の調査区で検出した2段目貼石の傾斜と比べてもやや急である。なお、流土層の第80層から高杯形土器の脚部片が出土した (図版第46、第39図11)。b 調査区の北側では墳丘内の土層状況が確認できた。第24図第28層はキビ土ブロックを含む黒色土層で、先述したようにa 調査区②区でみられた第28層と対応する。第27層は黒ボク土ブロックを含む黒褐色土層である。この土層は墳丘外に向かって緩やかに傾斜するように堆積している。したがって、この層は墳丘斜面の盛土と考えられる。第24図第3層は黒褐色土層で、キビ土のブロックが混入している。この層はa 調査区でも確認された土層で、b 調査区では墳丘外に向かって緩やかに傾斜して堆積している。墳丘斜面上には板石があり、この板石の上端は墳丘斜面の第3層上面と対応することから、これらの板石材は貼石と考えられる。第3層の上面は墳丘斜面の貼石によって分断されているが、墳丘裾の傾斜変換点でも一部確認することができた。このことから、第3層で墳丘全体を覆ったのちに、この層を掘り込んで貼石を施していたことがわかる。ただし、貼石を設置するために第3層以下を掘り込んだ痕跡は確認できなかった。また、第27・28層も同様に貼石を設置する前に築成されたものであることになる。第16層もa 調査区で確認できた土層である。第29層は黒褐色土層で、第16層との境界が不明瞭なため、分層ができなかった。また、第29層の下からはキビ土の地山層を検出したが、この地山層と第29層との境界も不明瞭であることから、第16層から下を自然堆積層であると判断した。

さらに、貼石から墳丘外にかけては、表土層 (第1層) より下に第78・79・80層が堆積していた。これらの土層は墳丘斜面から墳丘外に向かって徐々に厚い堆積を示すことから、墳丘盛土の流出土層と判断した。流土層は最大で約45cm前後の厚さをもつ。流土層の直下から地山層が現れる。地山層は明黄褐色の土層で、この土を削りだし、墳丘裾部と墳丘外の平坦面を造成している。(石貫)

c 調査区 (図版第22 (2)・23、第25図) c 調査区の北壁は、試掘の際に埋め戻された土であり、後述の土坑 SX06以外は土層の観察を行うことができなかったため、調査区の西壁を観察面にあてた。表土層の下から、墳丘から緩やかに傾斜し、墳丘外に向かって厚みを増し



第23図 佐田峠3号墓a調査区平面図・土層図

て堆積する土層を検出した。この層は3つ（第78・79・80層）に分層でき、b調査区で検出した流土層と同じ層であると確認した。流土の堆積状況やその直下から地山層があらわれるといった層序もb調査区と同様である。（辻村）

d調査区（図版第24（1）、第26図） 墳丘斜面からは貼石を検出した。貼石は板石と川原石を用いていた。貼石の傾斜は30度前後である。北側に拡張した部分からは、原位置を留めない数個の川原石がみられた。遺物の出土は認められなかった。墳丘全体を覆う盛土である第3層は緩やかに墳丘外に向かって傾斜するように堆積していた。その斜面上に石材が埋め込まれており、貼石と考えられる。表土層（第1層）より下に第81・82層が堆積していた。こ

これらの層は墳丘外に向かって徐々に厚く堆積することから、墳丘盛土が流出した土層と考えられる。流土層の直下には地山層を確認した。(宮岡)

e 調査区 (図版第24 (2)、第27図) e 調査区北壁の第2層は褐色土層で、a 調査区で確認された第2層と同じ土層である。第3層も a 調査区で確認されたものと同じで、墳丘全体を覆う盛土である。第16層は a 調査区および b 調査区で確認されたものと同じ土質であり、旧表土と判断した。第68層は明黄褐色土層で、試掘の際に掘削されているため、その広がりを確認することはできないが、第16層直上にあり、土色や土質も旧表土と明確に区別できることから墳丘斜面を形成する盛土層と判断した。第29層はやや黄色混じりの黒ボク土、第30層は地山と黒ボク土の混じる層で、これらは地山層と旧表土に挟まれて堆積しており、土層の境界も不明瞭であることから、地山から旧表土まで漸移的に変化する自然堆積層であると考えられる。第76層は黒褐色土層で、旧表土とは明らかに土質が異なり、地山の直上に堆積していることから、第68層と同じく墳丘斜面の盛土の1単位と判断した。墳丘斜面から墳丘外にかけて、試掘の埋土の下部に流土層 (第83～86層) が厚く堆積している。流土層は試掘の際に削平されているが、現状で4つに分層できた。第86層直下には地山層を確認した。

南壁の土層も北壁と同様に大半が試掘時の埋め戻し土である。第1層から第3層までは北壁と同様の土質である。北壁の旧表土 (第16層) と同レベルに第77層があるが、土質が著しく異なるため別層と判断した。第76層は一部分しか残存していないが、北壁の第76層と土質およびレベルも対応している。流土層は北壁でみられたものと同様の堆積である。

調査区の西端で墳丘裾部を確認した。墳丘斜面には貼石がみられなかった。地山を削り出してその上に若干の盛土を盛って墳丘斜面を形成している。地山の傾斜は調査区の西端付近で平坦になり、その地点を墳丘裾と判断した。調査区北壁に20cm程度の大きさの円礫が存在していたが、これが墳丘に伴うものであったかどうかは不明である。また、調査区東端からおよそ1.5mの地点に角礫が存在するが、これは地山に食い込んでいることから墳丘築造当時からのもものとみられる。(辻村)

(3) 検出遺構

a. 墳頂平坦部 (図版16 (2)・17 (1)・18 (2)～21・24 (2)、第22・23・27図)

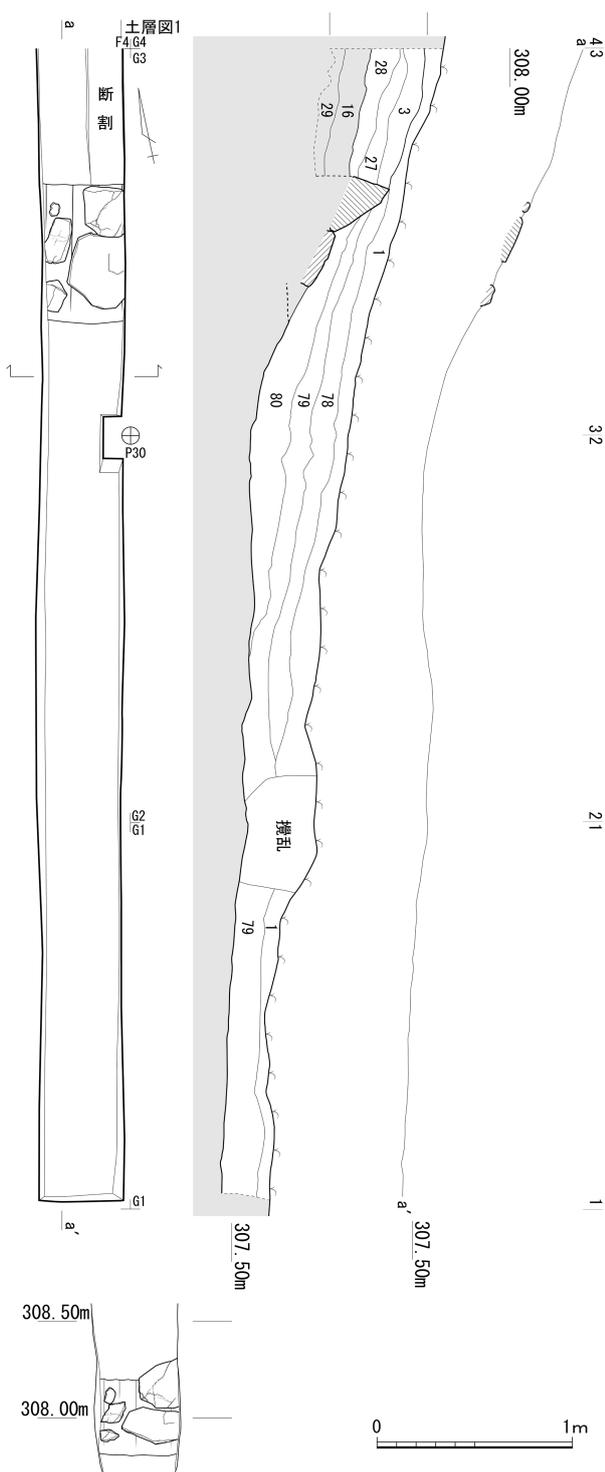
標石 SX01 (図版16 (2)・17 (1)、第22図) 標石 SX01は墳頂平坦部 a・f 調査区より検出された川原石を使った石の配列である。当初は表土直下のため原位置を保っていない川原石と考えたが、ほぼ同一レベルで複数見つかри、また墳丘長軸に平行して列をなすかたちで位置していたと考えられることから、墳丘に伴うものと判断した。この川原石の配列は a 調査区③・④区に多く、a 調査区①・②区・f 調査区にもみられる。a 調査区②・③区の南側では川原石がほぼ一直線に並んでおり、これらは墳丘斜面と平坦部との境界付近に位置する。いずれも第3層上面、あるいは第2層下部とほぼ同レベルにあり、埋葬を完了して盛土 (第23図1・2第3層) で覆ったのちに設置されたものであろう。ただ、a 調査区③区の墓壙 ST05付近に位置している亜円礫は、レベルの比較から第3層よりもやや下層となる可能

性がある。この垂円礫については他の川原石と異なる性格をもつとも考えられるが、他の川原石とともに墳丘長軸に平行して列をなしているため、SX01の一部として扱った。

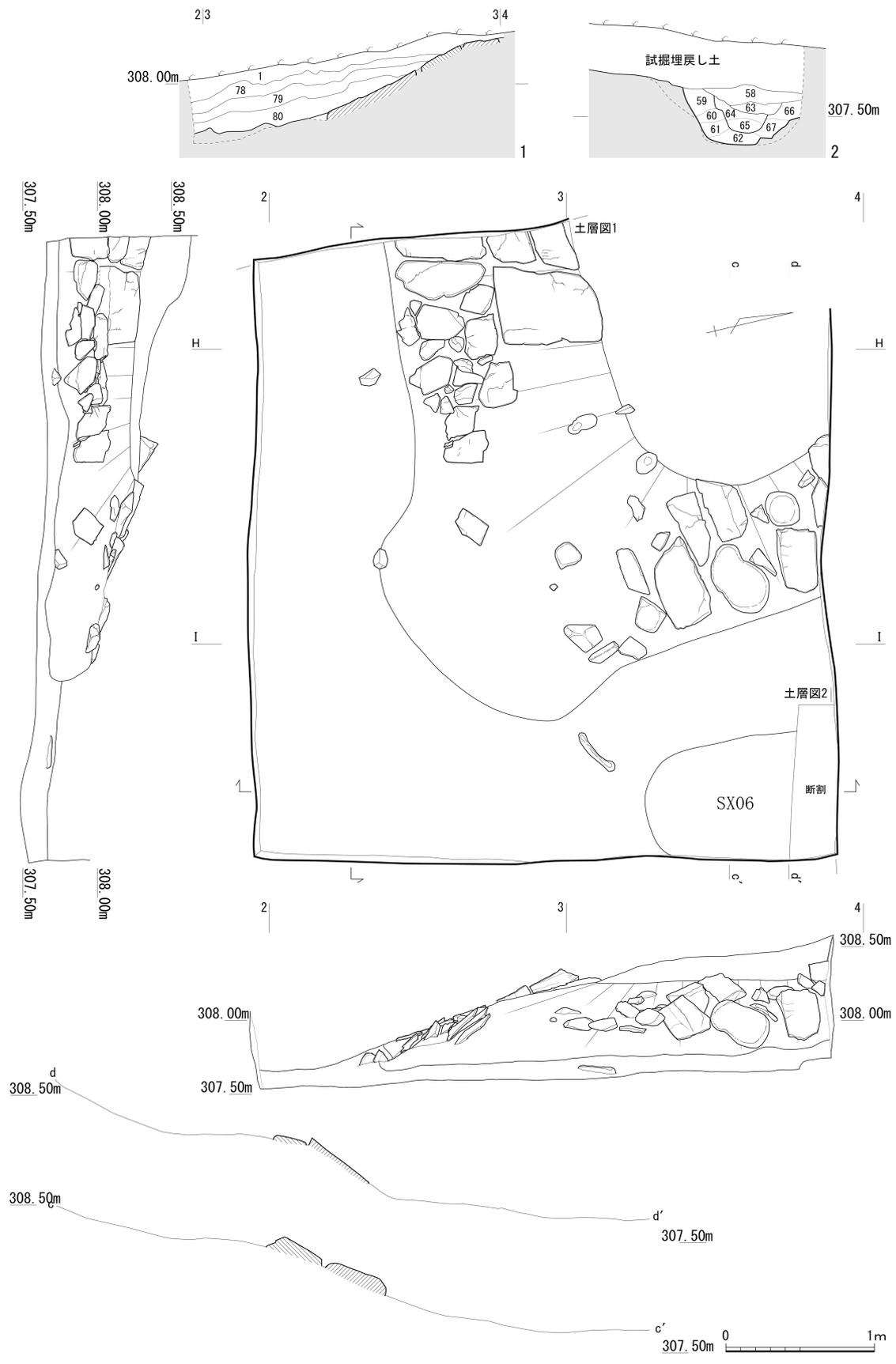
a 調査区②・③区南側の配列は、墳頂平坦部の境界付近に並んでいることから、平坦部の境界を示す可能性がある。墓壙上やその周辺に位置する川原石については、墓壙の標石としての性格をもつとも考えることもできるが、いずれも墳丘の盛土である第3層上面に位置しており、佐田谷1号墓で確認された標石のように墓壙に直接伴って設置されたものではない。各墓壙を意識した配置ではないことから、厳密には同じ性格のものとはしにくい。(小林・辻村)

墓壙 ST02 (図版18 (2)・19・20 (1)、第23図1・2) 墓壙 ST02はa 調査区①・②区で検出した。注口・脚台付鉢形土器の一部がa 調査区①・②区、SX01とほぼ同じレベルの第3層上面(第23図1・2第3層、図版第18 (1))、再堆積が想定される第2層(図版第17 (2))から出土しており、その下部から墓壙 ST02を検出したことになる。第3層において墓壙上面を認識することができなかつたため、第3～6層の掘削と墓壙の平面的検出を急いだ。そのため、第8・16層上面において掘削停止、遺構検出ができず、一部掘り過ぎてしまった。墓壙を掘削した検出面として提示しているプランは本来の墓壙上面から6～15cm程度下の面であり、その規模は長さ2.64m、最大

幅1.15mである。加えて、第23図で示した墓壙の平面プランが畦を挟んだ①区と②区でやや整合しないのは、それぞれの区で墓壙を検出したレベルが異なってしまったためである。①区での検出面が若干高い。墓壙 ST02は3号墓最大の埋葬施設であり、墳頂平坦部の中心下に位置することからも3号墓の中心埋葬であったといえる。



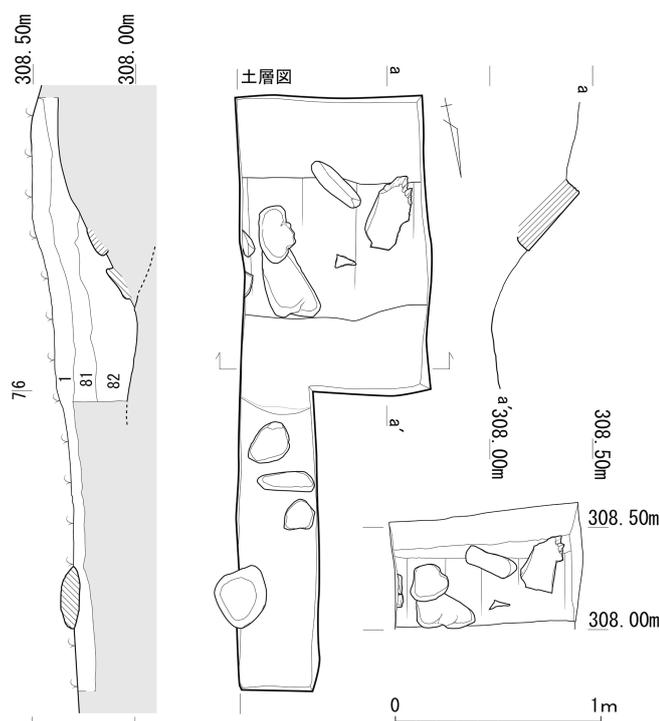
第24図 佐田峠3号墓b 調査区平面図・土層図・立面図・側面図



第25図 佐田峠3号墓c調査区平面図・土層図・立面図・側面図

平面プランでは、長側板が小口板から突き出してはいなかった。小口板を長側板で挟み込んだ形状ではなかったことから、箱形木棺であった可能性が高い。ただし、木棺蓋の痕跡は確認できなかったが、棺上に堆積した土層から推測すると、木棺蓋が存在した可能性は高い。墓壇内については、a 調査区②区北壁沿いに長さ0.4m・幅0.1mの断ち割りを入れ、墓壇底付近まで掘り下げたが、底板の痕跡は確認できなかった。

先述したように、墓壇は旧表土面（第23図1・2第16層）から掘り込んでおり、旧表土面を平坦にするために盛土を施したのは、墓壇を掘り込む前に墳丘内を整える作業をおこ



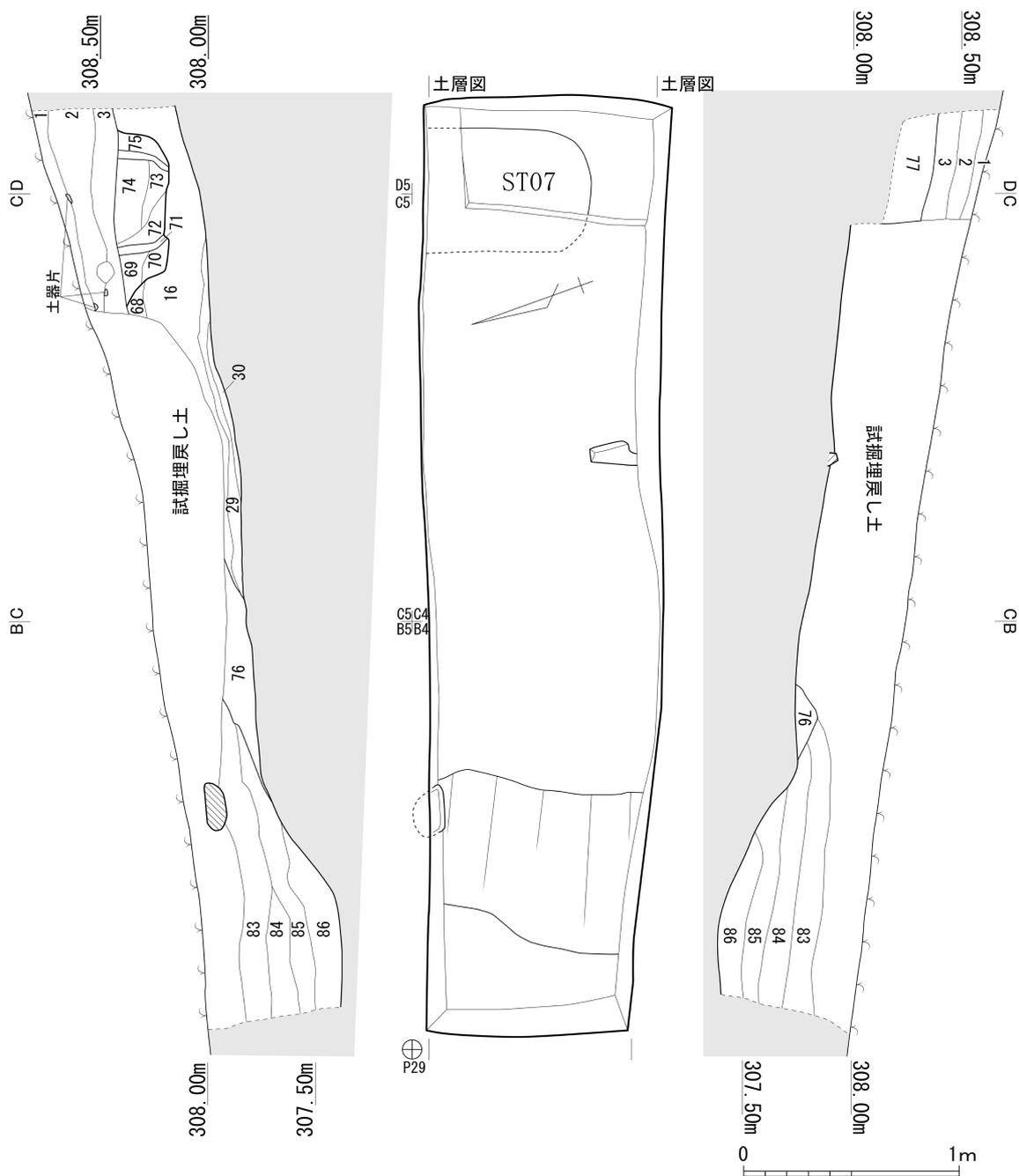
第26図 佐田峠3号墓d調査区平面図・土層図・立面図・側面図

なったためである。旧表土層である第16層を掘り込んで墓壇を造成しており、墓壇底はキビ土の地山面に達していた。墓壇を掘削した後、木棺を埋設した。第13層は木棺の痕跡で、長側板断面と考える。この層は黒褐色土層で、粒子が細かく均質な色調である。棺を設置した後、裏込め土（第8～12層）を充填していた。裏込め土はまず、黒ボク土とキビ土のブロックの混入した黒褐色土（第12層）を入れる。次に、ブロックの混入しない黒褐色土層（第11層）を薄く敷き詰める。その上に第12層と同質の土層（第10層）を入れる。そして、第11層と同質の土層（第9層）を薄く敷き、その上にさらに第12層と同質の土層（第8層）を入れている。土質の異なる2種類の土を交互に詰め込んでいる状況が窺えた。

また、裏込め土を詰め込んだのちに、第7層（黒褐色土層、黒ボク土ブロック、キビ土ブロックが混ざる）で棺を覆っていた。なお、第7層はその堆積の状況から木棺蓋となる部分と棺の封土とに分層できると思われたが、明確に分離できなかったため、第7層として一括した。続いて、墓壇 ST02全体を覆う第4～6層を施し、埋葬を終えたものとみられる。

木棺の規模は長さ1.74m、最大幅0.64mである。棺の深さは30cm程度で、棺材の厚みは約7cmである。

墓壇 ST03（図版18（2）・21（1）、第22・23図） 墓壇 ST03はa 調査区①・②・③・④区で検出した。ST02と同様に検出過程で墓壇上面を認識することができず、一部を断ち割りによって確認せざるをえなかった。よって、検出面として提示しているプランはほぼ墓壇底に近い面である。壁面から推測すれば、その規模は推定全長1.8m、最大幅1.0m前後である。墓壇は ST02の封土層（第23図1・2第5層）の上面から掘り込んでいた。墓壇底は旧表土



第27図 佐田峠3号墓e 調査区平面図・土層図

層（第16層）でとまっていた。木棺痕跡は認識できなかったが、裏込め土（第19・20・24・36層）があり、棺内側に堆積している土層が認められたため、木棺が存在した可能性が高い。棺を設置したあと、長側板の裏に第20層と第24層をそれぞれ詰め込み、第19層を第20層の上に、第36層を第24層の上に乗せている。色調の異なる土を互層状に施すST02の裏込めのような丁寧な構造ではない。第21・22・23層は棺内に流入した土である。第22・23層は長側板の痕跡を含んだ土層の可能性も考えたが、流入土と木棺痕跡を見分けることができなかった。第18層は棺の封土で、その下面には堆積の状況から木棺蓋があった可能性が考えら

れるが、長側板と同様に棺蓋も確認できなかった。第17層は墓壙 ST03の封土である。第17層でST03を覆い、埋葬を終えたようである。木棺の規模は壁面から推定すると、長さ1.65m、最大幅0.45m、深さ20cm程度である。木棺の詳細構造については不明である。

墓壙 SX04 (図版18 (2)、第22・23図) 墓壙 SX04は a 調査区①区で検出した。ST02の西端墓壙埋土を掘削している。平面形状は不整円形で、径0.5m程度である。ST02と同じレベルで検出した。上面検出にとどめたため、この遺構の詳細は不明であるが、小児埋葬の可能性が高い。

墓壙 ST05 (図版21 (2)、第22・23図) 墓壙 ST05は a 調査区③・④区で検出した。ST02・ST03と同様に検出過程で墓壙上面を確認することができず、検出面として提示しているプランは墓壙底に近い面と考えられる。しかも、④区では平面的に確認したが、③区では確認できず、その一部を壁面で確認するしかなかった。このため、平面的な墓壙の検出は10～15cmほど掘削したレベルとなった。その規模は長さ2.15m、最大幅0.67mである。墓壙 ST05は墓壙 ST03の封土(第17層)上面から掘り込んでおり、ST03よりも新しい埋葬といえる。裏込め土に相当する土層(第49・54層)が存在することから、本来は木棺があったと推定できる。第48層は棺内の流入土、木棺蓋、棺封土となる部分の埋土層である。しかし、分層することができず、1つの層としてまとめた。第47層は墓壙 ST05全体を覆う封土である。第47層でST05を覆い、埋葬を終えていたようである。

墓壙 ST07 (図版24 (2)、第27図) 墓壙 ST07は e 調査区の東端で検出された。検出過程で墓壙上面を認識できなかったため、墓壙の正確な規模は不明である。墓壙は東側では旧表土(第16層)上面から掘り込んでおり、西側では旧表土直上の第68層から掘り込まれていた。裏込め土は東側では1層、西側では2層に分けられることから、複数回にわたって詰め込んでおり、東側の裏込め土(第75層)はキビ土のブロック、西側の裏込め土(第70層)は黒ボクのブロックを含んでいる。ST07の西側では木棺の長側板痕跡を明確に確認できたが、東側では対応する長側板痕跡を明確に確認することはできなかった。棺内の流入土は3つに分層できた。第72層は西側から流れ込むような形で堆積しており、その後第73層、第74層の順で堆積したものと考えられる。

墓壙 ST07は第3層の直下に位置していた。またST05も第3層の直下に位置していたことから、ST07はST05とほぼ同時期、最も新しい墓壙であるといえる。ただし、ST07の木棺痕跡と第3層の間には封土に当たる土層が存在しなかったことから、第3層が封土の役割を兼ねていたと考えられる。この点においてはST05上の第3層と性格の差が認められることから、ST07の方が新しい埋葬の可能性があると見えよう。(石貫・辻村)

b. 墳丘周辺部 (図版22 (2)・23・24 (2)、第25図)

墳丘南東突出部 (図版22 (2)・23 (1)、第25図) 南東部隅角を構成する2面の斜面貼石は隅角に向かうにしたがって鋭角に交わるような配置をとる。また、隅角の稜線付近に遺存した石材の位置から隅角がやや突出するように盛土が行われていた様相が窺える。このことから南東部隅角は突出する形態をもっていたものといえる。この突出部は残存状態が良好では

ないものの、扁平な板石と川原石を貼石に用いてほぼ2段に貼り巡らされていることがわかる。斜面の傾斜は比較的ゆるやかで、貼石の傾斜もおおむね30度未満である。50～70cmの大きさの石材が多く、他の調査区で検出した貼石よりも大きな石材を用いる傾向にある。東側斜面ではほぼ同じ大きさの貼石が2段に貼られているが、南側斜面では大小の貼石が2・3段に貼られ、貼石の貼り方に差異が認められる。調査区北東で性格不明の遺構（SX06）を検出した。なお、調査区内から土器片が2点出土しているが、いずれも細片で器種を特定できるものはなかった。

墳丘周囲の貼石（b調査区（図版第22（1）、第24図）、d調査区（図版第24（1）、第26図））

b調査区では、墳丘斜面の流土層直下から貼石を検出した。遺存状況は良好である。貼石は扁平な板石と川原石を用い、墳丘盛土の流出を防ぐかのように置かれていた。

また、d調査区では、墳丘斜面からやや小型の貼石を5点ほど検出した。貼石は板石と川原石を用いていた。貼石の傾斜は30度前後である。試掘の際の埋め戻し土にも同様の大きさの川原石が数点含まれていたことから、d調査区付近においてこれ以外にも貼石が遺存していた可能性が高い。

（辻村）

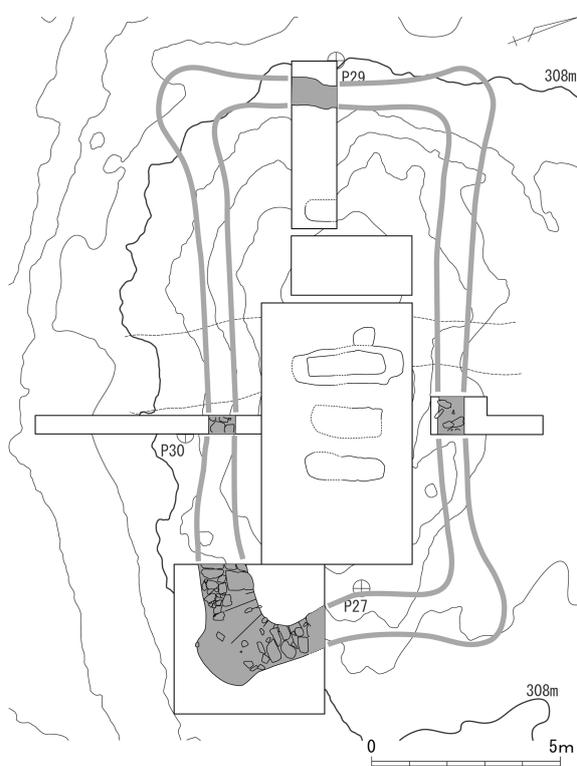
土坑 SX06（図版23（2）、第25図） 土坑 SX06は墳丘に隣接したc調査区の北東隅で検出した。SX06は試掘調査においても確認されていた遺構で、当時から土坑として認識されていたようである。今回検出した範囲は試掘調査の範囲とほとんど変わらなかったため、全体的な平面形態を確認しなかった。検出値は長さが約1.30m、幅が約0.95mである。SX06は地山面から掘り込まれている。調査区北壁に沿って長さ1m・幅0.3mの断ち割りを行い、壁面

の観察をした（第25図2）。第59層～62・66・67層まで埋めて作業面を形成した後に再度二段土坑を掘り、第65層から第64層、第63層、第58層の順で土坑が埋められたものとみられる。墳丘外に設置された埋葬施設の可能性もあるが、木棺痕跡などはみられなかった。土坑の上部が試掘の際に掘削されているため、墳丘流土との前後関係については不明である。

（石貫）

c. 墳丘構築と埋葬過程の復原

墳丘構築と埋葬過程の復原（第29図） 佐田峠3号墓墳丘の構築方法を復原する。3号墓を構築するにあたり、墳丘裾から墳丘外に相当する部分は旧表土面を地山面まで掘り下げたと考えられる。そのあと、地山面を削り出して、墳丘裾となる部分を造成

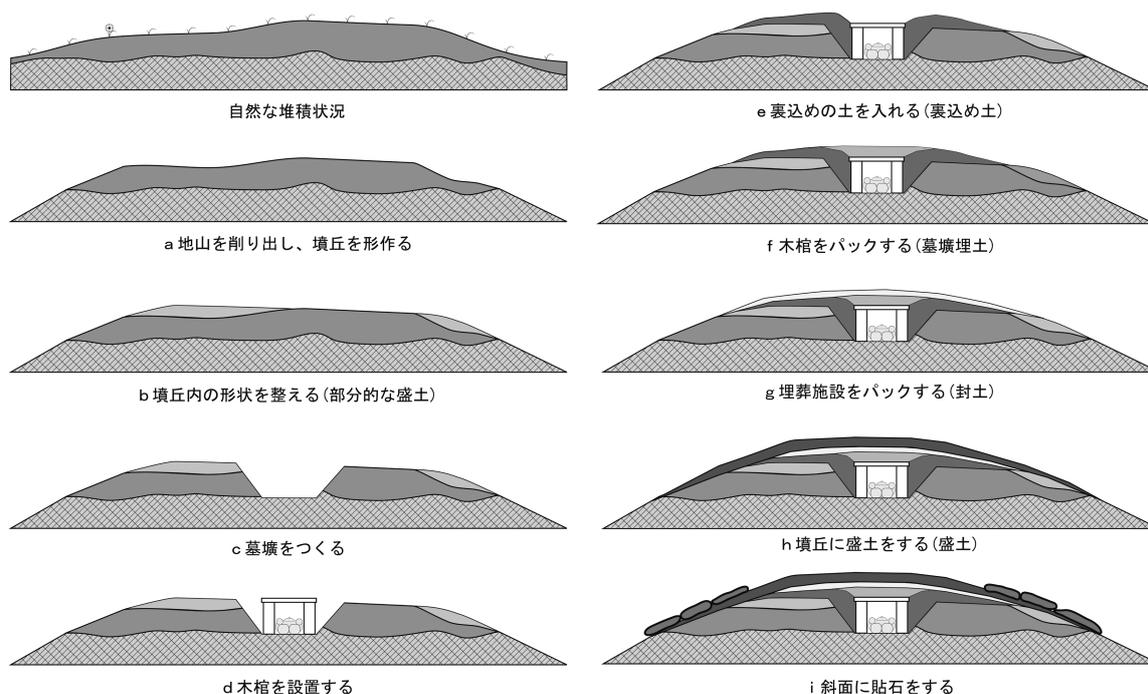


第28図 佐田峠3号墓復原図

する。このとき、旧表土面も墳丘内部に向かって緩やかに高くなるように傾斜をつけて削り、墳丘斜面となる部分の基礎とする（第29図 a）。続いて、墳丘内で高さが足りない部分に盛土（整地土）を施し、墳頂平坦部基礎の形状を整える（b）。

その後、墓壙 ST02の掘削が行われる。墓壙は旧表土面の黒ボク土からすでに掘り込まれている（c）。墓壙を掘り込んだのちに、棺を設置し（d）、それから木棺と墓壙の間に裏込め土を数回に分けて入れる（e）。続いて、棺蓋は認識できなかったものの、木棺蓋を覆う土を被せる工程が想定できよう（f）。そのあと、ST02全体を覆う封土を施し（g）、ST02の埋葬を終えている。また、ST03はST02封土を再掘削して墓壙をつくる。ST05も同様にST03の封土を再掘削して墓壙をつくる工程が想定できる。ST07は少し離れた西側の位置にあり、先述の3基のような明確な前後関係は不明であるが、ST07を覆う封土はなく、墳丘全体を覆う盛土によって封じられていることは、ST02・ST03、あるいはST05が示す在り方との違いを指摘できる。つまり、ST02・03・05は埋葬施設を覆う封土を単独でもつが、ST07は墳丘全体を覆う盛土を埋葬施設の封土としているという違いである。この構造上の違いから推測すると、ST07はST05より新しい埋葬であるということがいえるだろう。

なお、埋葬施設をすべて構築したのちに、墳丘全体を覆う盛土を施して（h）、一連の埋葬行為を完了させている。このあと、墳丘裾部の斜面に板石を貼る（i）。盛土と墳丘斜面の貼石の関係については、1段目の貼石の下から盛土層と同じ土質の土層を検出したことから、盛土層が貼石によって一部分断されているものの、もとは同一層であったようである。盛土層に貼石石材を埋め込んだために土層が分断されたものと考えられる。したがって、墳丘斜面の貼石は墳丘構築の最終工程であったことがわかる。



第29図 佐田峠3号墓墳丘構築想定図

なお、ST02検出面から60cmほど上になる第3層上面および第2層から土器片が集中して出土していた。器種は脚台付鉢形土器（第40図14）、甕形土器（第39図1・2・4）、高杯形土器（39図8）などである。おそらくこれらの土器片は3号墓において最終埋葬を執り行い、全体を盛土で覆った後に置かれたようであり、そのほとんどが原位置付近であったものと想定できる。つまり、墓壙 ST02の被葬者は墳丘全体を盛土で覆った後もその埋葬位置が記憶されていた存在であった可能性がある。（石貫・今福・野島）

第4節 佐田峠4号墓（写真図版25～35）

第3次調査において、試掘調査によって確認されていた佐田峠4号墓を再検出した。4号墓は地表に隆起していないため、墳丘規模の確認のためには掘削調査を行わねばならなかった。第3次調査の結果、g調査区で再検出した佐田峠4号墓は一辺4.5m前後となる方形墳丘と、その周囲に周溝をもつ弥生時代中期末葉前後に属する貼石墓と想定した。しかし、第4次調査において、その北側に墳丘が遺存していたことを確認した。結局、四隅突出型墳丘墓の一部墳丘を改変して方形周溝をもつ貼石墓に造り変えていたことが判明した。（野島）

(1) 調査区設定

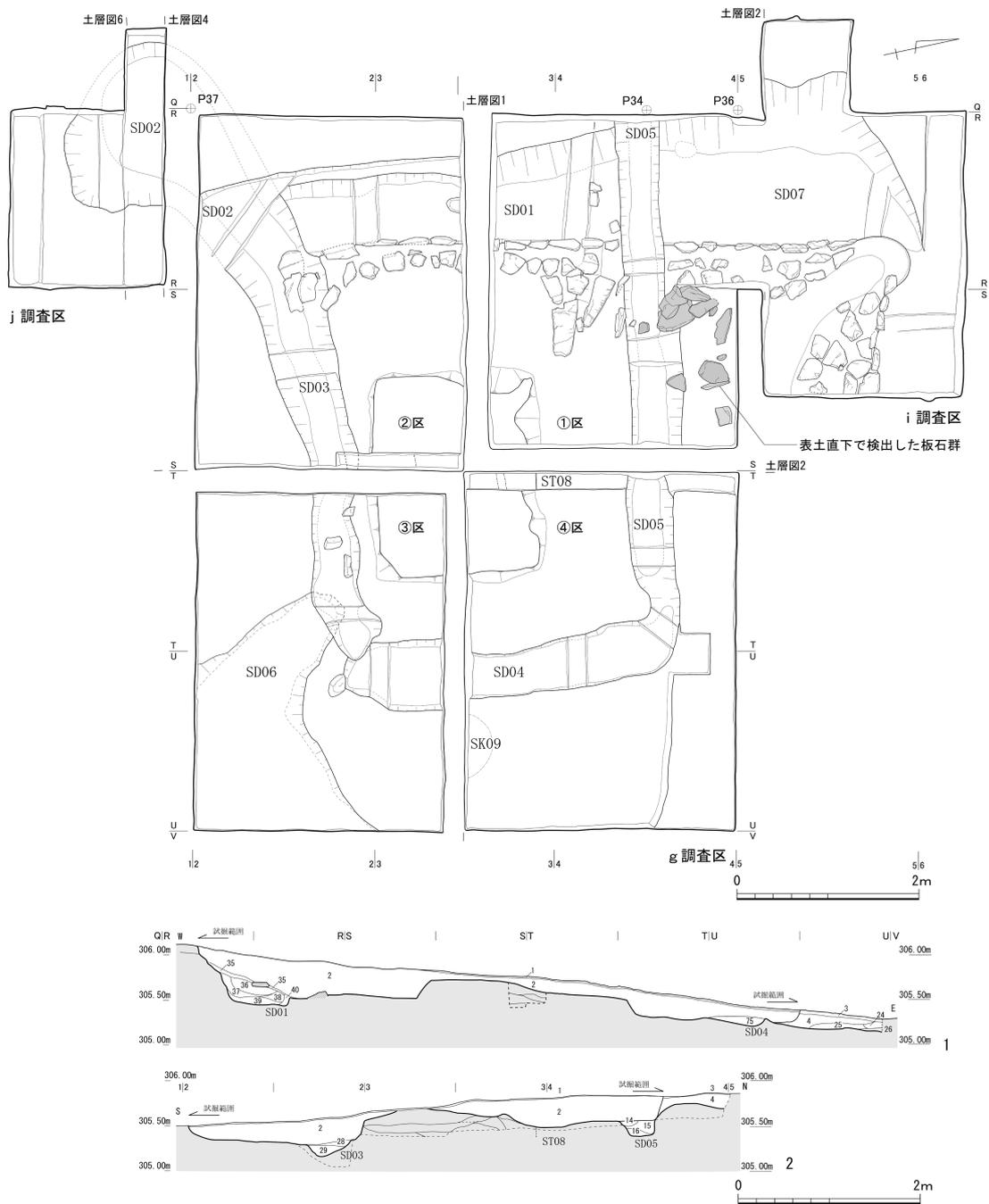
a. 墳丘中心部分（図版第25～29、第30・31図）

g調査区（図版第25（2）・26～29・33・34、第30・31・34図1～9） 第3次調査において、4号墓を再検出するためにg調査区を設定した。g調査区は試掘調査時に重機掘削された調査区とほぼ重なるように設定した（図版第25（2））。試掘時の埋め戻し土を人力で除去したのちに遺構面（試掘掘削停止面）の再検出（図版第26（1））を行った。

3号墓で使用した調査用グリッド・ラインを東側に延長させて4号墓試掘区画に重複するようにg調査区を設定した。しかし、先述したように試掘調査の記録は簡易な平板図のみであったため、平板測量杭の失われた現在では、4号墓の正確な位置を割り出すことは困難であった。このため、試掘トレンチよりもやや大きめの調査面積が確保できるように、4と5、QとRの間のグリッド・ラインの交点（P.36）を北西端とし、南北6m・東西8mの範囲にg調査区を設定した。また、g調査区内を南北3m、東西4mの4区画に分割し、北西の区画を①区として反時計まわりに②・③・④区とした。4分割した区画に沿って土層観察用の十字の畦を設定した。（野島・矢部）

b. 墳丘周辺部（図版第30～32・35、第30・32～34図10～15）

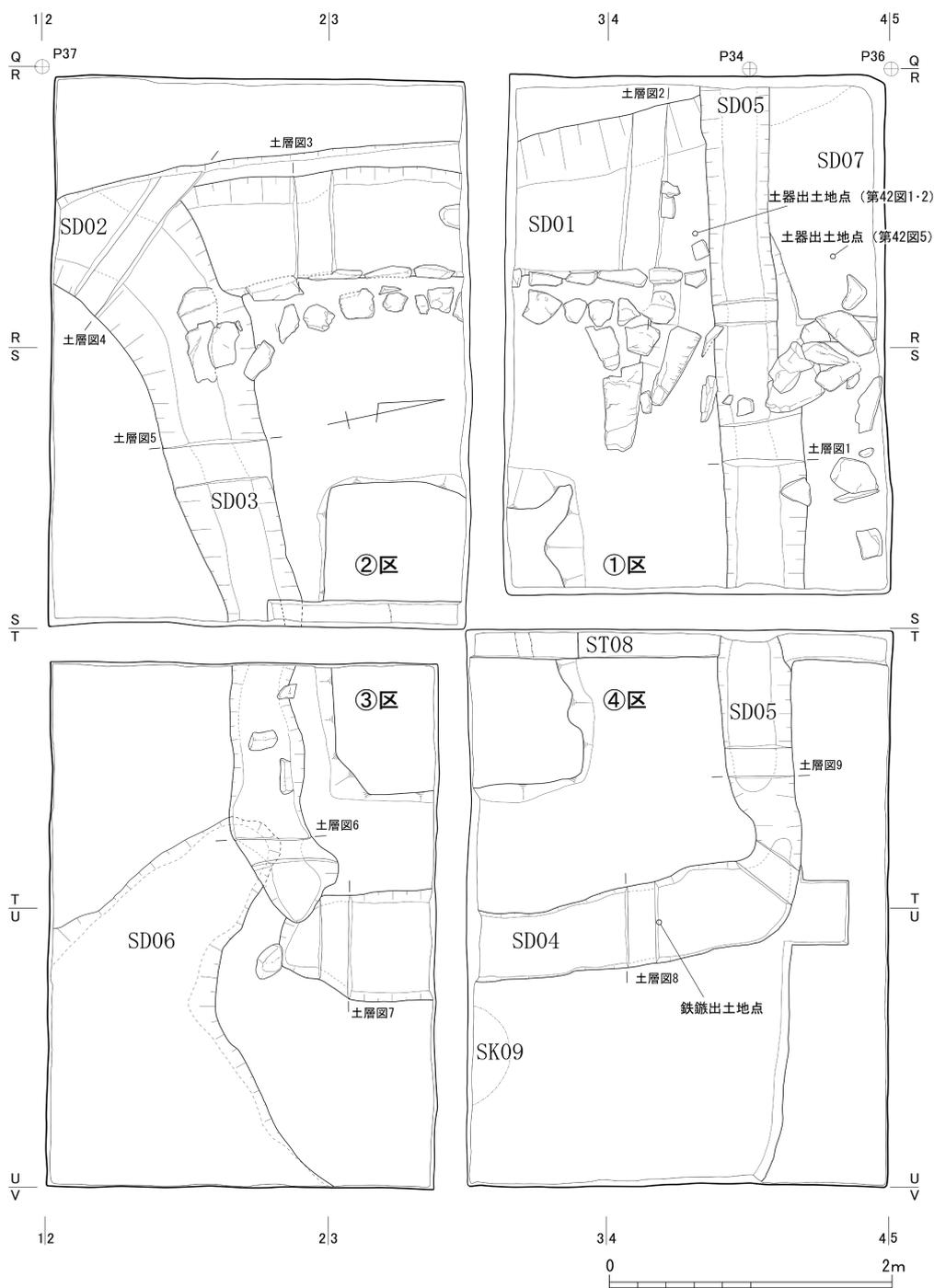
i調査区（図版第30～32、第30・32・34図10～12・14） 周溝SD05の北側に石列が伸びていたことから、4号墓の墳丘はさらに北側に広がる可能性が高いと考えた。そこで、4号墓の規模や平面形態などを明らかにするため、第4次調査では、第3次調査の調査区であるg調査区①区に北接するi調査区を設定した（図版第30・31、第30・32図）。調査当初、4と5、



第30図 佐田峠4号墓平面図・土層図

QとRの間のグリッド・ラインの交点 (P.36) を南西端として、南北6m・東西2mをi調査区とした。i調査区内を2mごとに分割し、北から①・②・③区として、各区の北側に幅0.25mの土層観察用畦を設定した。また、g調査区北西隅で検出したSD07が東側に屈曲して伸延していくのか、収束するのかを判断するために、②・③区の東側に南北2.5m・東西1.25m、西側に幅0.25mの土層観察用畦をもつi調査区④区を設定した。さらに周溝SD07の西端掘形を検出するためにi調査区③区北西を一部拡張した。

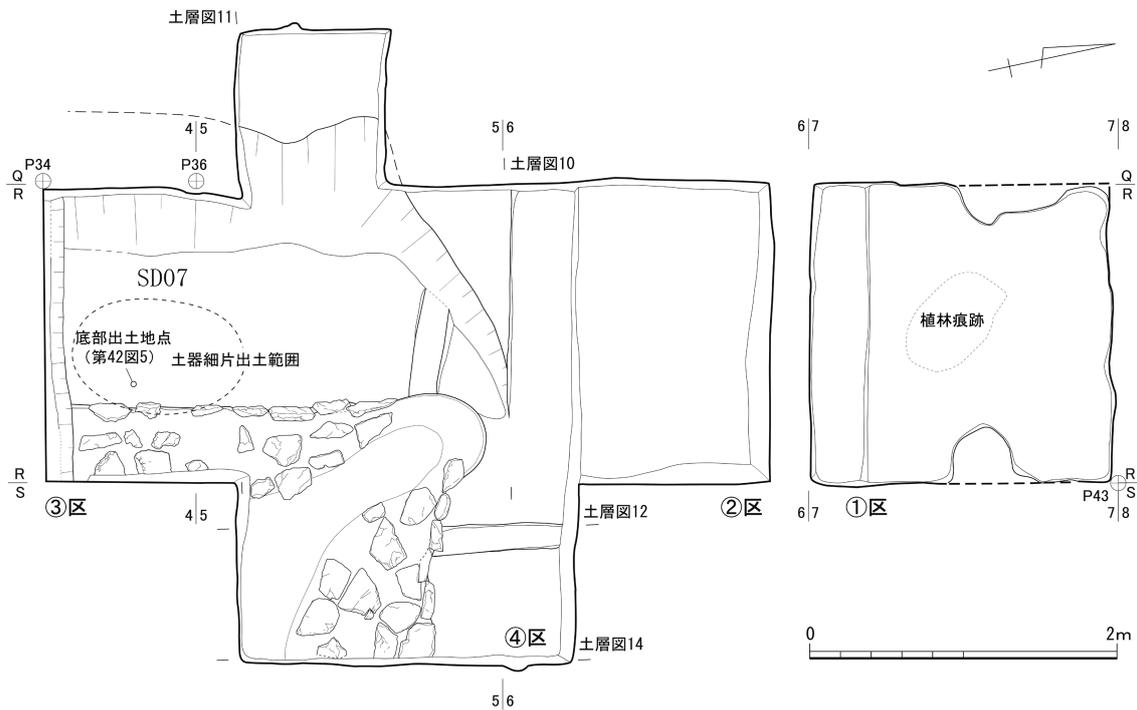
またさらに、第3次調査g調査区①区の未調査部分の確認のために第4次調査では、③区



第31図 佐田峠4号墓g調査区平面図

を南側に南北1.4m・東西2mの範囲を拡張した。(野島・今津)

j調査区(図版第35、第30・33図)第3次調査によって、g調査区②区南側で検出された4号墓南辺の周溝SD02は、東から西へ延びる際に幅を広げながら南側へと湾曲していく様相が確認できた。またSD02土層断面から南側に盛土と思われる土層の堆積が確認でき、4号墓南側に周溝を共有して別の墳丘が存在する可能性が想定された。よって第4次調査では、SD02の延伸状況を確認すること、また4号墓南側の墳墓等の有無を確認することを目的とし、1と2、QとRの間のグリッド・ラインの交点(P.37)を北西端の基準として、g調査



第32図 佐田峠4号墓 i 調査区平面図

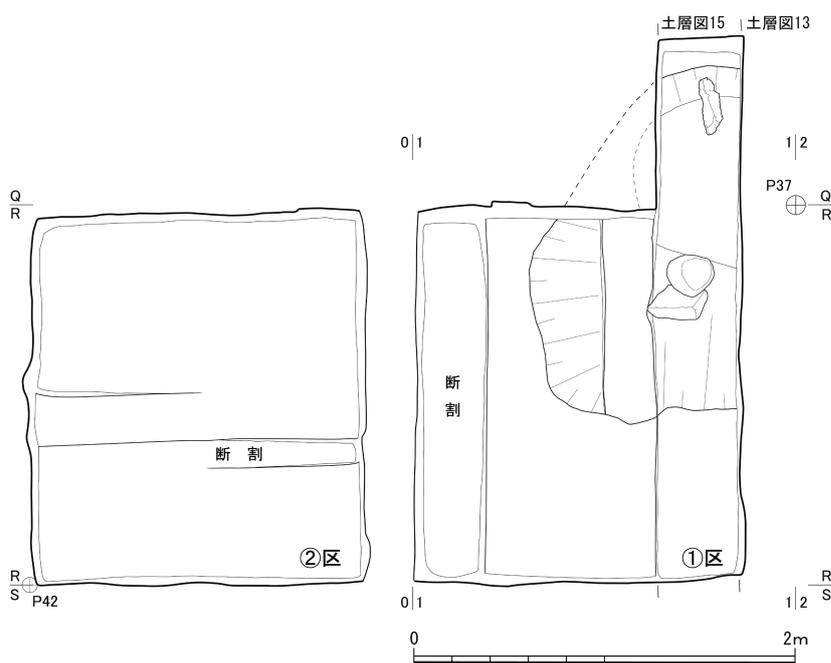
区②区の南側に j 調査区を設定した。南北4m・東西2mの調査区を北から2mごとに①・②区とし、各区の北側に幅0.25mの土層観察用畦を設定した。(津田・谷口)

(2) 墳丘規模と調査進行状況

第3次調査の結果、佐田峠4号墓は一辺4.5m前後となる方形墳丘と、その周囲に周溝をもつ弥生時代中期末葉前後に属する貼石墓と想定した。しかし構築当初は墳丘の南北がおよそ8.1mとなる四隅突出型墳丘墓であったことが判明した。以下にそのように判断した調査経緯について説明していきたい。

g 調査区では、試掘の際の埋め戻し土の掘削を行った後に、周溝掘削を開始した。4号墓の墳丘西辺、周溝 SD01・SD02などは遺存状況もよく、掘削深が50cmにおよぶ部分もあった(第34図4)。しかし、墳丘東辺では遺存状況が極めて悪く、掘削深は5cmにも満たなかった。各辺周溝埋土の土質・色調が一樣ではないことが確認されたことから、4号墓周囲で検出された周溝に便宜的な遺構番号を付した。4号墓西辺を周溝 SD01、南西隅から南側に延びる溝を周溝 SD02、南辺を周溝 SD03、東辺を周溝 SD04、北辺を周溝 SD05とした。また、周溝 SD03の底面から検出された南東に広がる浅い掘形を溝 SD06として記録した。さらに、のちに検出した g 調査区北西隅、周溝 SD01の北側への延長部分(周溝 SD05より北側部分)を便宜的に周溝 SD07とした(第30・31・32・34図11)。

そして、g 調査区①区南半および②・④区では、周溝埋土と墳丘面の土質の差異は顕著に現れた(図版第28(2))。時間的な制限もあったことから SD01の掘削を最優先した。SD01埋土掘削開始直後には、SD01北端の第35層(第30図1)から弥生土器(図版第33・48、第



第33図 佐田峠4号墓j調査区平面図

42図1・2)が出土した。4号墓周溝上層に伴うものとして写真撮影、平面図作成、レベル記入等を行って取り上げた。しかし、SD01とSD05の先後関係を明確にはせずに掘削と記録を継続したため、土器取り上げの際にすぐ北側にある周溝SD05の掘形を破壊し、さらには当初、SD05の埋土をSD01北限の掘形と誤認する状態が

続いた(図版第33(1))。①区北半と③区における土質の差異は漸移的でやや不明瞭であったことから、遺構検出面上面をさらに精査し、周溝の掘形の検出に努めた。③区では周溝の掘形が明瞭には検出されなかったことから、過掘削の危険性を考慮し、南北方向の調査用十字畦③区西壁に試掘坑を設け土層断面の観察を行った。その結果、非常に浅い掘形を検出し、墳丘裾を巡る周溝掘形をほぼ推定することができた。また、①区北端および②区南端では、周溝が南北へ延びる可能性が想定できた。そのため土層観察用畦を残し、さらに掘削を行った。②区に残した土層観察用畦から堆積状況を検討した結果、周溝埋土とは不連続の層が認められた(第34図4)。周溝掘削前後に南側に墳丘状の盛土を行っている可能性が高いものと観察されたことから、4号墓の周溝南側に別の墳丘が存在する可能性が想定された。③区の周溝底面からはグライ化した土層が検出され、墳丘南東斜面にも何らかの浅い遺構が存在した可能性を示すものと考えた。これを4号墓南東に延びる浅い溝SD06と想定して調査を行った。南東方向に延びるSD06に対して直交する土層観察用畦を残し、一部を掘り下げたが、下層には確実な遺構掘形の存在は確認できなかった。

また、i調査区では、表土除去後の状況を撮影したのち、土層の確認を行いながら、4号墓に関連する周溝、石列・貼石などの遺構検出に努めた。①区中央には植林された檜の木根があったため、土層観察用畦付近で遺構の有無を確認することとした。①区南壁沿いに長さ2m・幅0.4mの断ち割りを設定して掘削した結果、表土(第30図1・2第1層)から10cm掘り下げたところで、地山に到達した。②区では表土除去後、遺構の有無を確認するために、②区南壁沿いに長さ2m・幅0.5mの断ち割りを設定して掘削した。③区の周溝SD07の検出面と同じレベルにまで掘り下げようとしたが、西側では表土下20cm程で地山に到達した。②区南壁の土層の堆積状況を確認した結果、檜植林による攪乱を受けたSD07の埋土(第34図

10第3層)がわずかに堆積していたのみであった。このため、①区および②区北半には4号墓に関連する遺構はないものと判断して、掘削を停止した。

i 調査区③区では東端で表土から30cm程掘り下げたところで、貼石の上面を検出し、その貼石の広がりを追いつつ墳丘部分を検出していき、石列とSD07を確認した。②区南壁および③区北壁の土層の堆積状況を観察した結果、SD07は土層観察用畦の中で収束するか、もしくは東側へ回り込むものと想定された。このため、i 調査区④区を設定して掘削を行った。第4次調査では、第3次調査時の埋め戻し土を除去後、周溝SD05とSD07の切り合い関係を再確認し、SD05を完掘したのち、SD07を掘削した。その結果、周溝SD07は東側に屈曲せず、墳丘北西隅において収束することが判明した。また、墳丘北西部隅角は突出部をもつ形状であることが判明し、墳丘裾部に石列、墳丘斜面部分に貼石が続くことを確認した。

一方、j 調査区ではg 調査区で検出したSD02の延伸部分を確認するためにSD02の堆積土層(第34図4)を参考にしつつ、SD02上面の検出、周溝埋土の掘削に努めた。j 調査区①区北西では、表土から25cmほど掘り下げたところで幅1m程度の扇状を呈する黒褐色土(第34図13・15第7層)の広がりを検出し、SD02の埋土検出面であると判断した。このSD02の遺存状況を確認するため、平面精査とともに①区北側畦に沿って幅0.4mの断ち割りを行った結果、SD02がj 調査区①区のさらに西側に延伸していることが確認された。そのため先述の幅0.4mの断ち割りに沿うように西側に南北0.4m・東西0.9mの①区拡張区を再度設定し、その西端でSD02の西側掘形を検出した。②区では、北から南に向かって自然に傾斜しながら落ちていく地形となっていた。その南側一帯に黒褐色の土層堆積が確認されたため、新たな周溝である可能性も想定し、幅0.25mの土層観察用畦を残して掘削した。しかし、溝の掘形や盛土と考えられる層も確認されなかったため、②区には遺構がないものと判断した。よってj 調査区内においてはSD02とその下面の盛土以外に遺構は検出されず、4号墓南側に他の墳丘が存在する可能性は低いと考え、掘削を停止した。(野島・矢部・今津)

(3) 検出遺構

g 調査区では、試掘埋め戻し土の掘削を行った後に、試掘時に判明した周溝の精査を開始した。g 調査区各区で墳丘裾を巡る周溝を検出し、断面を確認しながら掘削を行った。i 調査区④区南半では、表土を除去する際、地表下15~20cmで原位置を留めた貼石の一部を検出し、周囲の貼石から推察できる墳丘傾斜面を確認しながら、埋土(第34図12・14、第5層)を除去しつつ、石列を確認した。4号墓墳丘北西部で、SD07と石列・貼石の広がり、墳丘隅角の全体像を把握するために、②区南壁・③区南壁・④区西壁の土層観察用畦を除去した。墳丘隅角の裾部付近を精査した結果、4号墓北西部隅角には明確な突出部があることを確認した(図版第30)。(野島)

a. 墳丘中心部(図版第25~29、第30・31図)

墓壙ST08(図版第34、第30・31図) 墳丘中央に残された墳丘未掘部分を南北方向の調査用十字畦に沿って断ち割りをを行い、墳丘盛土の堆積状況の確認を行った。g 調査区④区では、

東西方向に走る人工的な不整合面を観察することができた。墳丘を北側に落ち込む掘形の可能性もあり、埋葬施設と想定した。主要墳丘盛土の下層に埋葬施設が遺存している可能性が高いものと判断し、墓壇 ST08と仮称した。

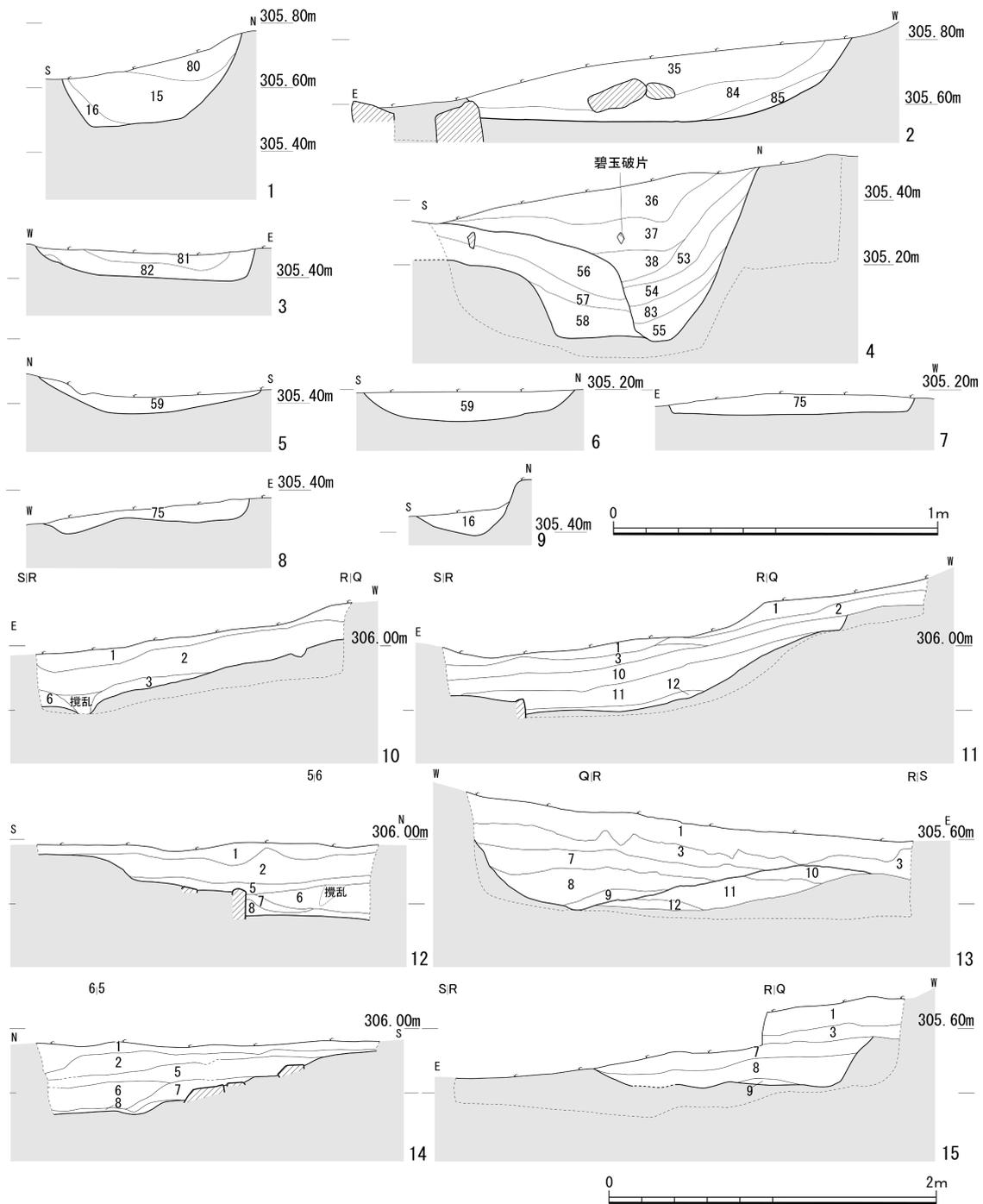
b. 墳丘周辺部 (図版第30～32・35、第30・32～34図10～15)

墳丘北西突出部 (図版第30～32、第30・32・34図12・14) i 調査区③区北側および④区西側で、4号墓北西部隅角の墳丘突出部を検出した。突出部の遺存状況は良好で、墳丘西辺・北辺の石列・貼石は原位置をほぼ留めていた。突出部先端は半円に近い形状を呈する。先端部分と隅角稜線部分には石列・貼石の抜き取り痕跡などもなかったことから、当初から石列と貼石を置かなかったようである。隅角稜線部分には幅約30cmのなだらかな平坦面があり、墳丘頂部に向かってスロープ状に続く。突出部から墳丘西辺には厚さ10cm前後の板状角礫がほぼ直線的に立て並べられる。墳丘北辺の石列も西辺同様に厚さ10cm前後の板状角礫を用いるが、突出部付近では墳丘外側にわずかにカーブを描くように配されている。墳丘西辺で検出した2段の貼石は10～30cm弱とやや不揃いの角礫を石列と並行するように配置していた。墳丘北辺で検出された3段の貼石は20～30cm大の角礫を用いていた。石列と並行するように、ある程度揃えて配置されていた。(野島・今津)

石列・貼石 (図版第26・29、第30・31図) g 調査区試掘埋め戻し土 (第2層) の掘削の最終段階で石列・貼石が確認され、以前の記録写真 (第3図) によって一石ごとにその位置を確認しながら検出を行った。原位置を留めている石列・貼石は墳丘西辺で認められた。石列は薄手の板状角礫を用いている。ほぼ直線状に配され、南西のコーナー部分ではわずかに墳丘内側にカーブする。貼石は1段目に塊状角礫を配置している。2段目がある場合は厚手の板状角礫を石列と並行するように配置していた。

4号墓墳丘の西辺を画するSD01の東側掘形に直接的に貼り込まれている状況から、SD01の掘削と石列設置はほぼ同時期に行われたものとみられる。しかし、調査用の十字畦付近では、埋土の堆積以前に石列の表面に沿って堆積した土層 (第30図1、第40層) を検出した。部分的に石列・貼石の上に貼土を行った可能性も想定できよう。g 調査区②区南辺では、わずかに石列2石、貼石2石が出土した。このうち石列2石は南側、SD03内に倒れ込んだものと判断した。SD03底面に直接倒れこんでおり、その上に第59層 (第34図5) が堆積していたことから、周溝掘削からそれほど経ずに石列が南側に倒れたものと考えられる。g 調査区②区でも2・3段目の貼石を伴っていた可能性が考えられるが、墳丘検出面直上には試掘の埋め戻し土 (第30図1・2、第2層) が堆積していたことから、おそらくは後世に削平されてしまったものと想定しうる。(野島・矢部)

周溝 SD01・SD07 (図版第27 (2)・29・30、第30～32・34図2・3) 周溝 SD01・07は墳丘西辺を南北に走る溝で、幅0.7～1.2m前後となる。周溝のなかでは最も遺存状況の良いものであったため、一部では掘削深30cmとなった。東西に走る溝SD05の南北で便宜的にSD01とSD07に分けたが、同一の遺構である。SD01の掘形東側には4号墓に伴う石列が確認された。掘形斜面に直接的に貼り込まれている状況から、g 調査区SD01の掘削と石列の



第34図 佐田峠4号墓周溝土層図

設置はほぼ同時期に行われたものとみられる。なお、g調査区②区北壁付近では、埋土の堆積以前に石列の表面に沿って堆積したであろう土層（第30図1、第40層）を検出した。第35～39・84・85層の埋土を確認し、その上に第2層が堆積していた。第35層には石列石材等が含まれており、g調査区②区北壁付近では試掘調査における周溝検出時の排土なども若干含まれていた。

また、i調査区③区で検出した周溝SD07は墳丘西辺を南北に走り、底面で幅1m前後と

なる。遺存状況はよく、検出面からの掘削深は最大40cm、浅い掘形の上場は幅1.8m前後である。4号墓北西突出部分に近づくとつれて、溝幅を減じながら収束する。SD01・SD07埋土は周溝SD05によって掘削され、SD01の南端は周溝SD03によって掘削される先後関係がある。

なお、i調査区③区南側の土層観察用畦付近の底面直上（第34図11、第11層）から、甕形土器の口縁部と胴部の細片が出土した（第42図1）。底面に遺存していた胴部上半は著しく細片化しており、かつ湿ったクッキーのように軟質化していたため、取り上げの際に原形を損なってしまったものもあり、一部図化しえなかった。（野島・矢部）

周溝SD02・SD03（図版第35、第30・31・34図4・5）周溝SD02・03は墳丘南側を東西に走る溝で、最大幅は西端で90cm前後となる。東側に行くにつれて遺存状況が悪くなる。掘削初期の見解ではSD02はSD01の周溝の延長部分と考えていたが、SD02堆積土の観察（第34図4）から、SD01埋土の一部を再掘削してSD02・03が掘削されていたことが判明した。

第3次調査j調査区①区北西から検出された溝状遺構は、第2次調査で検出されたg調査区4号墓南西から続く周溝SD02の南側延伸部分である。j調査区で検出されたSD02は①区拡幅区では南北1m・東西1.8m程度と幅広く掘削されていた。南側に大きく湾曲しており、西端では急に収束する掘形をもつ。最大深は約40cmであり、最深部も南西側に大きく偏っている。j調査区①区北側の土層観察から、東側は盛土（第34図13、第10～12層）をともない、比較的緩やかな斜面を形成するのに対し、西側の掘形の傾斜は急であり、地山を深く掘り込んだ状態のままであることがわかった（第34図13）。特に東側では緩く地山を掘り込んだ後、土層が3層にわたって確認された。断面観察からすると、初期の墳丘を構築する際に地山を溝状に掘り込み、盛土あるいは埋土が堆積した後に、再び溝の掘削が行われた可能性が高いと判断できる。一方で、j調査区北側断ち割りの南壁（第34図15）ではこの3層の土層は確認されず、地山を緩く掘り込んだままの状態であった。SD02埋土（第34図13・15、第7～9層）の堆積は緩やかであり、流出土などの自然堆積により埋没したと考えられる。SD02・03は4号墓を改変する際、新たに掘削された溝である可能性が高いといえる。なお、SD02土層断面からは碧玉片が1点出土した（図版第49（1）、第34図4、第37層、第46図4）。また、SD02埋土（第34図13・15、第7層）からは弥生土器細片2点が出土しており、そのうち口縁部の1点を図化した（図版48（1）、第42図3）。（野島・矢部・津田・谷口）

周溝SD04（図版第27（1）・28（2）、第30・31・34図7・8）周溝SD04は3号墓墳丘東辺を南北に走る溝である。g調査区③区では75cm、④区では50cm前後と、③区と④区では検出面での溝幅が異なる。再確認のため一部断ち割りを行ったが、壁面においてもそれぞれ異なる溝幅の掘形を検出した。おそらく調査用十字畦付近で溝幅に変化があるようである。掘削深は2～5cmと著しく浅い。土層観察用に残した畦からは鉄鍬が出土した（図版第49（1）、第31図、第44図1）。溝の南端掘形はSD03によって破壊されているように見えたが、掘削深3cm程度なので確実な切り合い関係の有無は断じ難い。北端側は4号墓墳丘北東部隅角を回ってから収束する（図版第28（2））。そして浅く収束してくるSD05東端に接続する。なお、

周溝 SD04が北方向へ延びる可能性も想定し、確認のために g 調査区の一部を拡張し、断ち割り等を行ったが、北側に延伸した形跡は確認できなかった。

周溝 SD05 (図版第28、第30・31・34図 1・9) 周溝 SD05は墳丘北辺を東西に走る溝で、最大検出幅は50cm前後、掘削深は60cmになる。西側では比較的深く掘削されており、東側になるにつれて、遺存状況が悪く浅くなる (第34図 1・9)。狭く深い掘形断面の形状や灰色がかった埋土 (第34図 1、第80層) の色調も他の周溝とは異なる。周溝 SD01・07埋没後に掘削されたもので、西側は g 調査区西側外へ延伸していることが確認された。出土遺物はみられなかった。後述する 4号墓西側 k 調査区で検出された溝 SD05と同一の遺構である。

溝 SD06 (図版第27 (1)、第30・31図) 溝 SD06は g 調査区③区南東隅において確認された落ち込みで、掘形が明確ではない部分があり、性格については不明な点が多い。溝 SD06と一部重複する周溝 SD03はこの SD06より新しい時期に掘削されていたことから、4号墓の南東方向に、4号墓構築以前に何らかの遺構が形成されていた可能性を考えることもできる。不明土坑 SK09 (図版第27 (1)、第30・31図) 不明土坑 SK09は周溝 SD04の東側にあり、一部調査用畦に重なっていた。長さ70cm半円の形状のみ検出したが、楕円形に近い平面形態になるものと思われる。掘削調査を行っておらず、性格については不明である。東西方向の土層断面では埋め戻し土の直下から検出されているが、埋土は周溝のものとは異なることから、弥生時代以前あるいはそれ以降の遺構の可能性も残されている。 (野島・矢部)

第5節 佐田峠5号墓 (写真図版36・37)

C地区試掘トレンチ (5 tr.) 東端で検出された一辺8.5mを超える方形周溝墓である。周溝の遺存状況は悪く、検出面から溝底までの埋土はかなり浅いものとみられた。このため、檜の植林による攪乱坑を掘削したのみで、周溝埋土は掘削せず、再度埋め戻した。

(1) 調査区設定 (図版第36・37、第35図)

5号墓再検出のために h 調査区を設定した (第20・35図)。試掘調査 (5 tr.) において検出された周溝 SD03の再検出のために、5と6、A aとA bのグリッド・ラインの交点 (P.39) から南に2.7m、東に10m (A b～A f グリッド) の範囲に h-1 調査区を設定した。また、埋葬施設の確認のために、2と3、A aとA bのグリッド・ラインの交点 (P.40) から北に2.8m、東に4.5mの範囲に h-2 調査区を設定した (第20・35図)。h-1 調査区は試掘調査時に重機掘削された調査区とほぼ重なるように設定し、それぞれ試掘の埋め戻し土を重機と人力で除去したのちに遺構面 (試掘掘削停止面) の再検出を行った (図版第36、第35図)。

(2) 墳丘規模と土層堆積状況

一辺8.5mを超える方形周溝墓の北側周溝部分を検出したが、周溝近辺は試掘段階です

に地山まで掘削されていたため、墳丘はすでに遺存してはいなかった。試掘埋め戻し土の再掘となったため、表土を小型重機によって掘削し、遺構検出面直上から人力による掘り下げを行った。

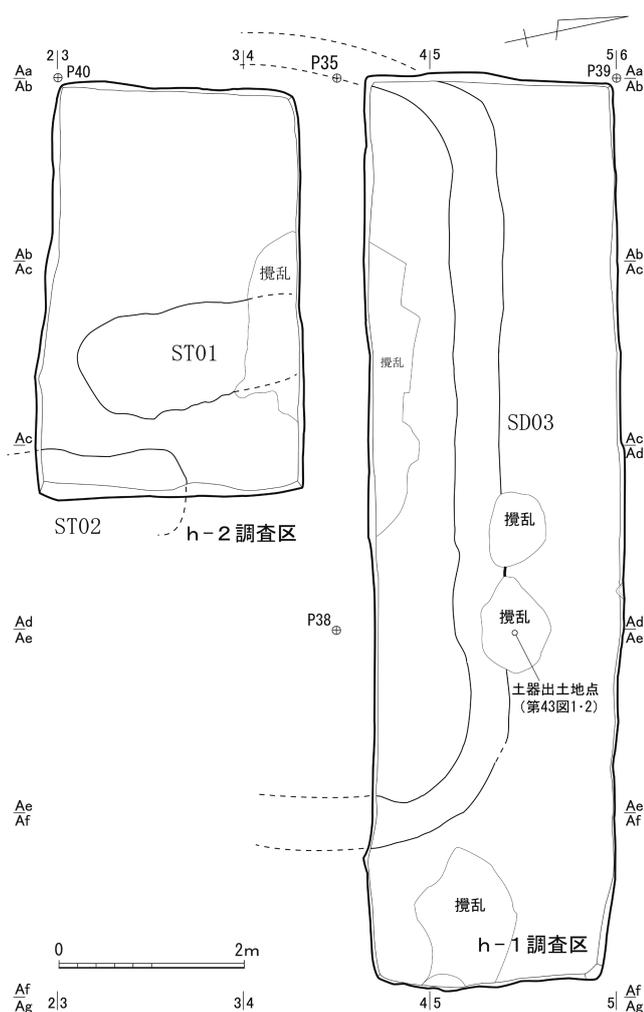
(3) 検出遺構 (図版第36・37、第35図)

試掘調査によって確認されていた5号墓周溝の内側、h-2調査区において墓壙ST01および墓壙ST02を検出した。植林された檜を抜根したのちに墓壙掘形の輪郭の一部を検出したため、遺構の検出面はかなり凸凹にならざるをえなかった。

墓壙ST01 (図版第37、第35図) 墓壙ST01は北側を重機バケットによる攪乱によって破壊されているものの、長軸1.7m以上、短軸1.1mの楕円形の掘形をもつ土壙で、埋土はクロボクを主体としていた。

墓壙ST02 (図版第37、第35図) 墓壙ST02はh-2調査区の南東端で、長さ1.5m、幅0.4mの範囲を部分的に検出した。埋土は土壙ST01と同様にクロボクを主体としたもので、同様の性格をもつ土壙と考えることができる。いずれも、平面的な確認を行っただけで、これ以上の掘削を停止し、再度埋め戻した。

周溝SD03 (図版第36、第35図) 周溝SD03はおおよそ8.2m検出され、h-1調査区の東西両端とともに南側に曲がることから、試掘検出部分が北側の一边であることがわかる。検出状況から推測される方形周溝の規模はおおよそ8.5mに達することから、おそらくは一边8m前後の方形墳丘をもつ大型の周溝墓であった可能性が高い。ただし、南西側は地形改変によって1.5mほど崖状に一段低くなっており、南西側に想定できる周溝自体は既に削平され、遺存してはいない。なお、h-1調査区、周溝の東側に2基の浅い土坑状の不明瞭な不整形の掘形を検出した。植林された檜の樹列に位置し、内部では檜の根が確認されたことから、これら2基は檜の抜根坑と判断した。東側の1基から塩町式土器の壺破片 (図版第48(2)、第43図1・2) が出土した。



第35図 佐田峠5号墓h調査区平面図

第6節 溝 SD05他 (写真図版38・39)

佐田峠4号墓西側に遺存した遺構群である。C地区試掘トレンチ(5 tr.)西端で検出した。試掘当初は溝状遺構とされていたが、埋葬施設であることが判明した。C地区の周囲ではこのほかにも墳丘をもたない埋葬施設が存在する可能性は高いといえる。

(1) 調査区設定 (図版第39 (2)、第20・36図)

k 調査区は、4号墓の西側に走る溝 SD05の再確認のために設定した。4と5、NとOの間のグリッド・ラインの交点から南へ2m、東へ2mの範囲をk 調査区とし、南北方向に調査用畦を設定した。しかし、試掘調査の情報が簡易なものであったため、試掘トレンチ(C地区5 tr.)の正確な範囲を特定することができず、2m四方のk 調査区の表土を除去した時点で試掘幅が設定した調査区内に収まらないことが判明した。このため、k 調査区を南側へ1m拡幅し、幅1.3m程の試掘トレンチ埋め戻し土を確認した。試掘トレンチ内の埋め戻し土を取り除くと、試掘時に確認された溝状遺構の兆候が見られたことから、さらに東半部分を南へ1m拡幅した。また、調査区北東から東へ幅(南北)1m・長さ(東西)3mのL字状に拡張をおこなった。精査の結果、周溝状遺構とされたものは木棺をもつ埋葬施設(ST10)であることが判明した。

(2) 土層堆積状況

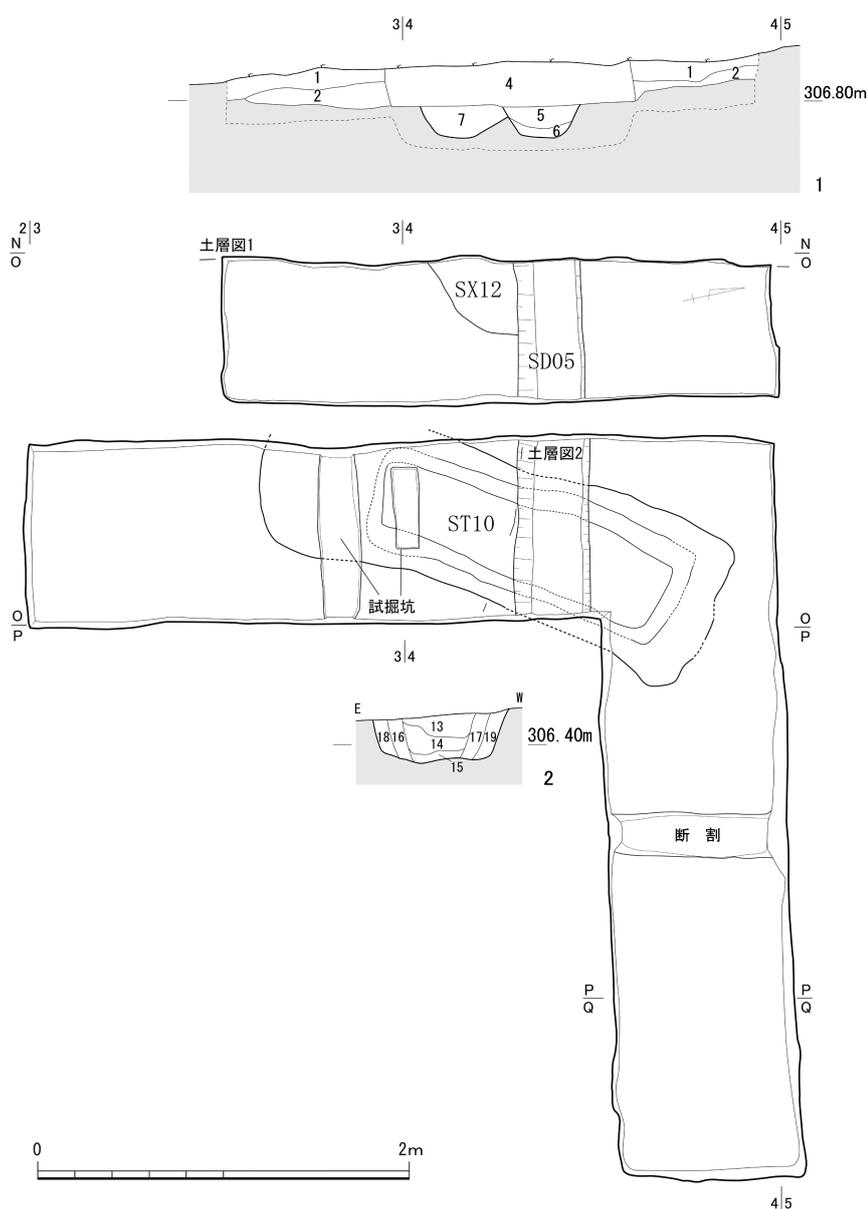
試掘埋め戻し土を確認し、それを除去して溝 SD05を検出した。SD05は調査区を東西に走る溝で、幅0.35~0.4m、検出面からの深さ20cm前後である。試掘調査における写真や平板図から、また第3次調査g 調査区①・④区で検出した周溝 SD05の一直線上に位置すること、掘形や埋土の土質・土色が類似することから、同一の遺構であることを再確認した。SD05はさらにk 調査区西側にも延伸すると考えられる。k 調査区のSD05の底面は最も標高の高い地点で306.6mである。一方、g 調査区において検出された最も標高の低い地点は305.39mであり、約1.2mの高低差がある。SD05は約20~25cmの深さを保ち、なだらかに弥生時代の旧地形に沿って西から東へと低くなっていることがわかる。SD05は埋葬施設 ST10よりもちに掘削された溝であることが切り合いによる先後関係から確認できた。なお、SD05埋土掘削中より弥生土器細片を1点出土したが、図示できなかった。

調査区西側でSD05と接する状況で確認された不明土坑 SX12は、平面精査からではその切り合い関係が判然としなかったため、調査区西壁において試掘トレンチ(C地区5 tr.)幅に0.2m幅の断ち割りを設定した。その結果、SX12埋土はSD05によって掘削されていたことがわかったが、具体的な時期差は明らかにはできなかった。

(3) 検出遺構 (図版第38・39、第36図)

埋葬施設 ST10 (図版第38、第36図) 埋葬施設 ST10は試掘調査時、および埋め戻し土を除

去した段階では調査区北端付近で東へと曲がる周溝状遺構とされていたため、当初の呼称も周溝SD10としていた。そこでSD10の延伸部分の広がりを追うため、幅1mで東側へと段階的な拡張を行った。またSD10は南方向へも調査区外に延伸していると想定していたため、調査用畦によって分割された調査区東半を延長させ、南北1m・東西1mの拡張を行った。しかしSD10が東へと屈曲すると判断していた部分の精査を行った結果、その遺構は北東隅部分が拡張区域にかかる墓壇であることが判明し、名称



第36図 佐田峠k調査区平面図・土層図

を埋葬施設ST10と変更した(図版第38、第36図)。それまでSD10としていた東へと伸びる部位は、試掘トレンチ(C地区5tr.)埋め戻し土からこれに沿うように伸びた、笹根に起因する土質・土色の変化の影響であり、遺構ではないことが明らかとなった。なお、ST10の上部については、試掘時に削平を受けており、遺存しない。

埋葬施設ST10はk調査区中央部付近で検出した。北東から南西方向にのびるST10の墓壇の一部と木棺痕跡を平面的に確認した。埋葬施設の主軸は北から東に35度振っており、佐田峠3・5号墓の埋葬施設の主軸がほぼ南北方向であったこととは異なっている。検出時点で木棺痕跡が確認されている点から、本来の墓壇上面は検出面よりも高い位置であったと考えられる。試掘トレンチ外においても、表土層の直下で墓壇を平面的に検出したことから、ST10に伴う墳丘盛土などは確認できなかった。

墓壙小口の形状は北東側では隅丸方形を呈し、南西側では丸みをおびる。墓壙の規模は最大長2.55m、幅は中央で0.72m、北東端で0.85mである。墓壙の底面は、溝 SD05の掘形を利用して確認すると幅0.59mで、中央はやや盛り上がるがほぼ平らである。

墓壙内に納められた木棺の南西部は一部未検出だが、明瞭に長方形の木棺痕跡を確認することができた。検出面において、木棺内法は長さ約1.6m、幅は中央0.35m、南西端0.35m、北東端0.40mであり、検出面からの木棺の深さは20cm前後である。木棺側板の横断面は底部に向かって湾曲しており、およそ断面U字形に近い(図版第38(2)、第36図2)。側板の横断面が箱形木棺のように垂直ではない状況から、刳抜き式木棺の可能性も考えられる。側板の幅は6～8cmである。木棺は一定幅を残して内部を刳抜き、身と小口を一体のものとして作り出していたと想定できる。裏込め土は東側・西側ともに1層(第36図2、第18・19層)ずつ確認できた。墓壙と側板の間には地山に由来するクサリ礫を多く含む混合土を充填しており、地山を崩し混合して使用したようである。ST10の南側、試掘抗断面では、裏込め土を4層確認した。南側では複数回にわたって裏込めが行われたと考えられる。木棺痕跡の内側には棺内に流入した土(第36図2、第13・14層)を確認した。

なお、埋葬施設 ST10の時期については、後述する溝 SD05埋土を除去した段階で木棺痕跡を明瞭に確認できた点から、木棺が完全に腐朽した後に SD05によって掘削されたものとする。このことから ST10は、4号墓が周溝 SD05によって改変された時期にはすでに木棺が完全に腐朽するほどの時間が経過していたと推測でき、ST10と SD05の時間差は4号墓と SD05の時間差よりも大きいと思われる。SD05掘削時に墳丘が存在していたとすると、k調査区の溝も深く掘削されたと考えられるが、g調査区からk調査区にかけて確認される SD05は、一定の深さを保っていることから、k調査区のみ非常に深く掘削された可能性は低いと考えられる。SD05の掘削からみれば、ST10の上に墳丘がたとえ存在していたとしてもかなり低いものであったと想像できる。墓壙の大きさからは埋葬施設 ST10には墳丘が存在していた可能性も考えられるが、その証拠はない。溝 SD05の掘削深と傾斜角度からは墳丘をもたない埋葬施設であった可能性の方が高いものとみてよかろう。先述したように ST10は佐田峠3・5号墓の埋葬施設の主軸方向とは異なっているが、このことも ST10と4号墓の築造時期にはかなりの時間差を想定できる根拠の一つとして指摘しておきたい。

溝 SD05(図版第39、第36図) 溝 SD05はk調査区中央を東西方向に走る溝で、2m足らずを再確認した。幅0.35～0.4m、検出面からの深さ20cm前後である。SD05は西側へと行くに従って徐々に浅くなっており、k調査区西側で収束している可能性が高い。また SD05は埋葬施設 ST10と性格不明の土坑 SX12を掘削して破壊している(図版第39(1)・第36図1)。このことから SD05は両遺構よりも新しいと判断した。

この溝 SD05の掘削時期については調査中にもたびたび問題となり、その掘削時期が古墳時代以降にまで降る可能性も指摘された。しかし、次の理由から SD05は弥生時代における掘削、あるいは佐田峠墳墓群の墓域において造墓活動が終息する以前に掘削された可能性のほうが高いものと判断した。つまり、SD05は現地表下22cmで確認された埋葬施設 ST10と

現地表面下45cm前後で確認された周溝 SD07の両遺構の底面とほぼ同じレベルに掘削されており、現地表面ではなく、弥生時代の遺構に沿う掘削深であるといえる¹⁴⁾。また、4号墓墳丘北辺の SD05周溝南側掘形に沿って2石の列石が貼り込められたことも4号墓が廃絶・埋没する以前に掘削されたと考える根拠となる。4号墓墳丘東辺を画する周溝 SD04に連結する状況が確認されたことも、4号墓と SD05の掘削にそれほどの時期的隔たりがないことを想定できる。しかし、この改変が意図的であるというよりは、周溝に外部からの溝を接続させたやや偶発的なものである可能性も否定できない。

不明土坑 SX12 (図版第39、第36図) 不明土坑 SX12は、SD05の南側に位置し、k調査区の西側で部分的に検出した。埋土は分層できず、1層とした(第36図1、第7層)。現存する深さは20cm足らずである。調査区西側に設定した断ち割り断面の観察から、SX12はSD05の掘削によって破壊された状況が確認でき、SD05よりも古い(図版第39(1))。なお、SX12の掘削および西側への広がりを確認するための調査は行っておらず、その規模は不明である。

(脇山・横山)

VI. 出土遺物

今回の一連の発掘調査において出土した遺物は多くはない。墳丘墓から出土した土器のほか、佐田峠4号墓の周溝から出土した鉄鏃や石器製作時の剥片などがみられた。まず、墳丘墓ごとに出土土器について説明し、次にその他の遺物をまとめて説明する。

第1節 土器

(1) 佐田峠1号墓

a. r 調査区出土土器 (図版第42～44 (1)、第12・37図)

r 調査区ではST08上から弥生土器片が集中して出土した。土器片は接合関係、胎土の特徴などから考えて5個体となり、11点を図化した。

1～3は同一個体の高杯であり、これを高杯①とする(第12図参照)。1は口縁部から脚柱部の一部にかけて残存する。口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は内外に拡張される。端面にはごく浅い凹線文が3条施される。口縁部復原径は26.4cmである。連続成形手法によって作られており、杯部内面には粘土円板の剥落痕が明瞭に残る。調整は口縁部内外に横ナデ、脚柱部外面に横ナデ、脚柱部内面に横方向のヘラケズリが施される。杯部の内外面は風化が著しいがミガキが施されると考えられ、赤色顔料が塗布される。内外面ともにぶい黄褐色ないしは褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5mm程の黒色光沢鉱物を含む。2は脚柱部の細片である。外面には櫛歯状工具による直線文が施され、横並びの円孔が外面から2カ所穿たれる。内面には横方向ないしは斜め方向のヘラケズリがみられる。外面には赤色顔料が塗布される。3は脚部片で、脚部復原径は14.5cmである。端部は肥厚しながら下方へ弱く張り出し、上端は拡張される。端面には凹線文が3条施される。外面には櫛歯状工具による縦方向の直線文が等間隔で施され、赤色顔料が塗布される。内面に横方向のヘラケズリが施された後、下端部に横ナデが施される。

4・5は同一個体の高杯であり、これを高杯②とする。4は口縁部の細片である。内外面は風化が著しいが、横ナデで調整されると考えられる。内外面とも明黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1mm程の石英・長石を多量に含む。5は脚部の細片である。端部は先端へ向かって若干肥厚する。端面には凹線文が2条、外面には浅い凹線文が5条施される。風化により観察困難であるが、外面にはミガキが施されると考えられる。また、底部に充填した粘土円板が出土したため、高杯②は連続成形手法によって作られていると考えられる。

6・7は同一個体の脚付鉢である。6は鉢部から脚柱部にかけて残存する。脚柱部復原径は8.0cm前後である。鉢部内面には粘土円板の剥落痕が認められる。脚柱部内面に横方向のヘラケズリが施され、鉢部内面、脚柱部外面にはミガキ後に不定方向のナデが施される。また、脚柱部内面全体に黒色有機物が付着している。明黄褐色ないしはぶい黄橙色を呈し、

焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を多量に含む。7は脚部で、脚径18.0cmである。端部は横ナデによって上下方向に拡張され、端面に凹線文が3条施される。内面には横方向のヘラケズリが施され、端部に横ナデが施される。外面にはミガキが施される。また、内面全体に黒色有機物が付着している。

8・9は同一個体の直口壺である。8は口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部復原径は17.0cmである。口縁部は若干外湾しながら立ち上がり、端部は横ナデによって内面がわずかに凹む。平坦な端面には浅い凹線文が4条施された後、9にみられるような竹管文が施されるが、何カ所に施されたかは不明である。口縁部外面には細い凹線文が14条施される。肩部外面にはナデ、内面には横方向のヘラケズリが施され、口縁部内面には横方向の細かいヘラミガキが施される。内外面ともにぶい黄褐色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土は径1mm程の石英・長石を多量に含む。

10・11は壺あるいは甕で、同一個体である。10は口縁部細片である。端部は上方に拡張され、端面にごく浅い凹線文が4条施され、内外面にはナデが施される。内外面ともにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1mm程の長石を含むが、緻密なものである。11は底部で、底径5.8cmである。粘土充填によって作られ、底面がヘラナデされることで若干上げ底気味となっている。内面はヘラでケズリ上げられた後、横方向のヘラケズリが施される。外面には横ナデが施される。

b. 試掘調査時出土土器（図版第43（2）、第37図12～15）

平成9年度の庄原市教育委員会による試掘調査時に、1号墓においても土器片が出土した。詳細な出土位置は不明であるが、4点を図化した。

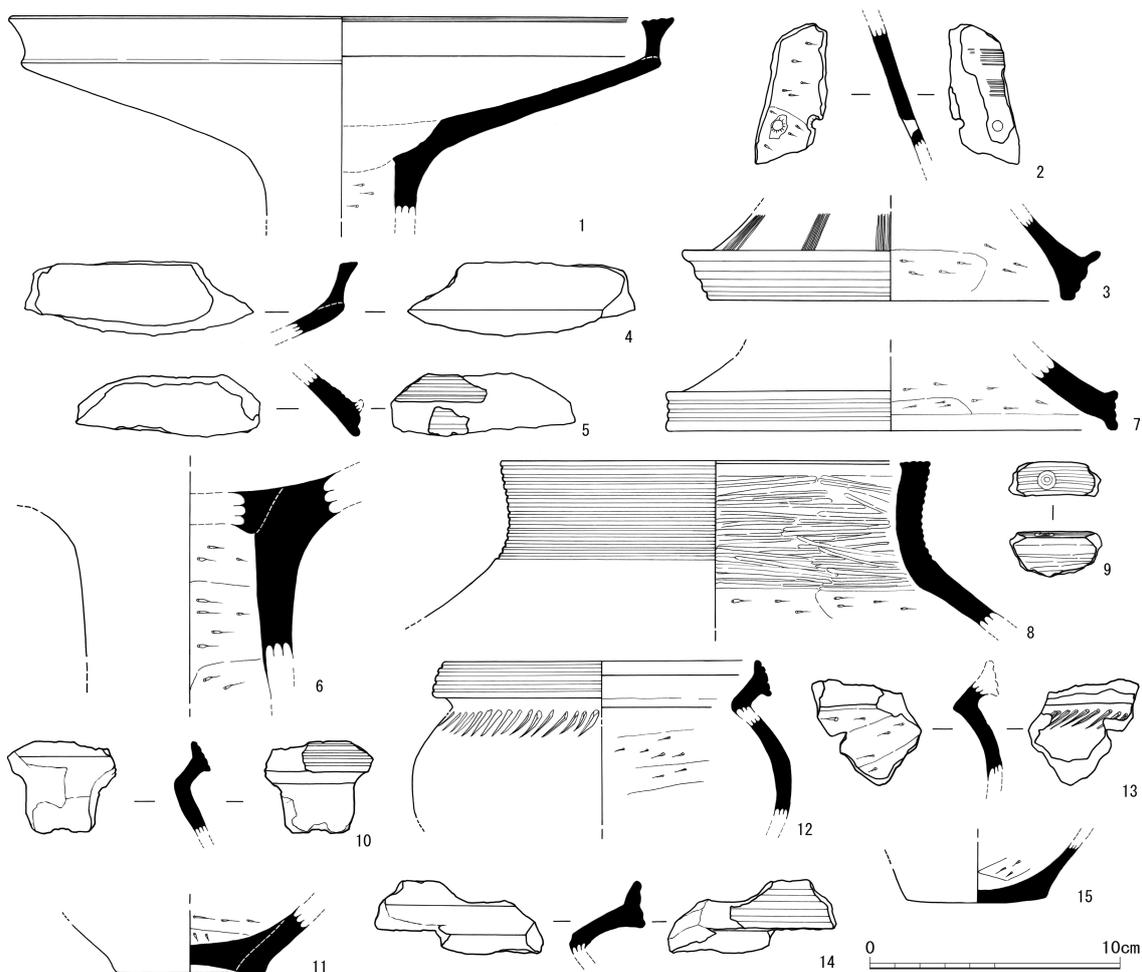
12は甕の上半部である。口縁部復原径は12.4cmである。口縁端部は上下方向に拡張される。胴部復原径約14.8cmで、胴部最大径は上半にある。口縁端面には浅い凹線が4条施され、頸部直下には刺突文が約5mm間隔で施される。外面は口縁部・頸部にナデ、内面は頸部の屈曲付近までヘラケズリが施される。外面は浅黄色、内面は褐灰色から灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～2mm程の長石、径0.5mm程の石英を含む。

13は甕の肩部片である。頸部直下には刺突文が施される。外面にナデ、内面には頸部付近に横方向のヘラケズリが施される。外面はぶい黄褐色、内面は灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1mm程の石英・長石を含む。

14は周溝コーナー出土の口縁部片である。口縁端部は上下方向に拡張され、端面に凹線文が3条施される。内外面ともナデで仕上げられる。ぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～2mm程の石英を稀に含むが、密である。

15は底部である。底径5.6cmで平底である。外面にナデ、内面にヘラケズリが施される。黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1mm程の石英・長石を含む。

これら佐田峠1号墓の出土土器は、ほぼすべての器種に内面ヘラケズリが盛用されることや形態などから後期の特徴を備えている。8のように凹線文を積極的に施す個体や、佐田谷1号墓出土土器（妹尾編1987）と近い特徴をもつものが含まれることを考慮すれば、時期は



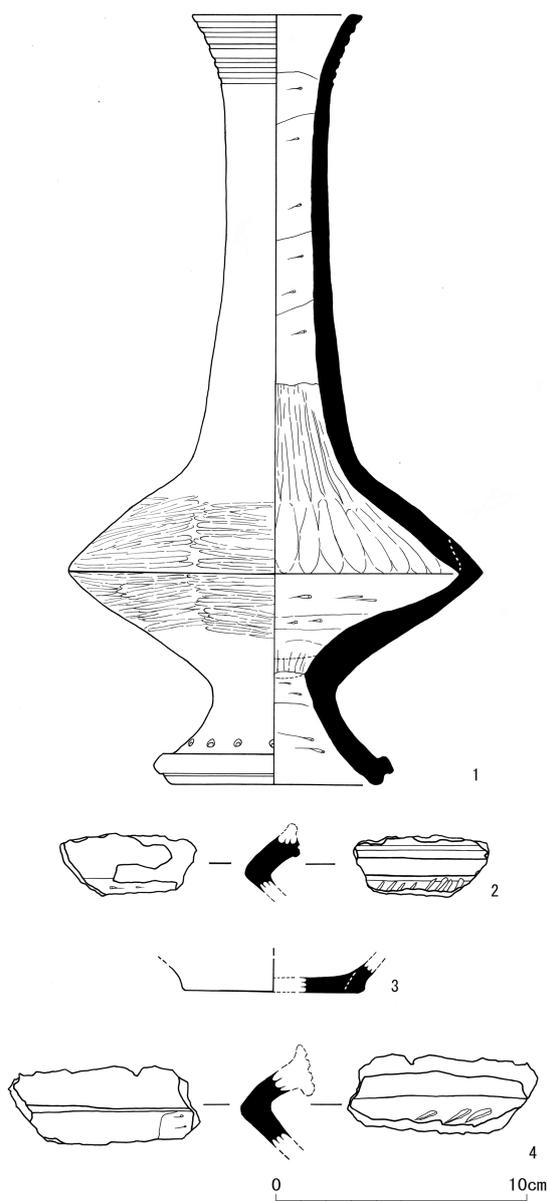
第37図 佐田峠1号墓出土土器

弥生時代後期初頭に位置づけられる。

(2) 佐田峠2号墓

a. q調査区出土土器 (図版第44 (2)、第38図1~3)

1はST06上で出土した台付長頸壺である。短い脚台にのった算盤玉形を呈した胴部に長い頸部がつき、緩やかに外湾する口縁部となる。一部口縁が欠損するがほぼ完形に近い形で遺存する。器高30.7cm、口縁部復原径6.8cm、胴部最大径16.4cm、脚径8.0cmである。口縁端部に浅い6条の凹線文、脚部外面に竹管文、脚端面に1条の凹線が施される。胴部外面には横方向あるいは斜め方向の丁寧なヘラミガキが施され、脚部内面と胴部内面下半には横方向のヘラケズリ、胴部内面上半には貼り合わせた際の指頭圧痕、内面には絞りが認められる。製作工程は、以下のとおりである。まず、脚部と胴部下半を成形して、底部に粘土円板を充填する。次に、口縁部・頸部・胴部上半となる粘土を貼り合わせ、頸部を絞り出す。最後に、頸部内面にヘラケズリを施し、外面調整後に施文する。内面は明黄褐色、外面は橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.3mm程の石英を稀に含むが、きわめて緻密である。



第38図 佐田峠2号墓出土土器

2はST06付近で出土した甕の口縁部片である。口縁端面に凹線文、頸部直下に刺突文が施される。頸部内面直下に横方向のヘラケズリが施され、口縁部内外は横ナデで仕上げられる。内外ともにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石、および径0.3mm程の黒色鉱物を多量に含む。

3はST06付近で出土した底部片で、底部復原径は7.0cmである。粘土充填によって作られている。外面には横ナデ、内面にはヘラケズリの後にナデが施される。内面はにぶい黄橙色、外面は橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径2mm以下の石英を含むが、1の台付長頸壺と酷似した緻密なものである。

台付長頸壺（図版第44（2）、第38図1）台付長頸壺は高梁川下流域から旭川下流域を中心とした岡山県南部地域に類例が多く知られている。分布からみれば系譜は当該地域に求められるが、胎土の明らかな違いから、直接搬入されたとは考えにくい。使われ方についても、墳墓からの出土例が少ない岡山県南部地域よりは、新見市横見墳墓群と共通しており（下澤・友成1977）、高梁川中・上流域の人々による仲介が想定される¹⁵⁾。

b. 試掘調査時出土土器（図版第45（1）、第38図4）

4は試掘調査7トレンチ（第10図）2号墓南西周溝から出土した、甕の頸部片である。頸部直下には刺突文が約7mmの間隔で施されており、内外面にナデ、頸部内面には一部ヘラケズリが施される。黄褐色を呈し、やや焼成不良気味である。胎土は径0.5～1mmの長石を含む。

これらの2号墓の出土土器は、内面のヘラケズリや文様・形態などの特徴から弥生時代後期前葉に位置づけられる。

(3) 佐田峠3号墓

a. a～e 調査区出土土器（図版第45（2）・46、第39・40図）

佐田峠3号墓の本調査時出土の土器片17点を図化した。

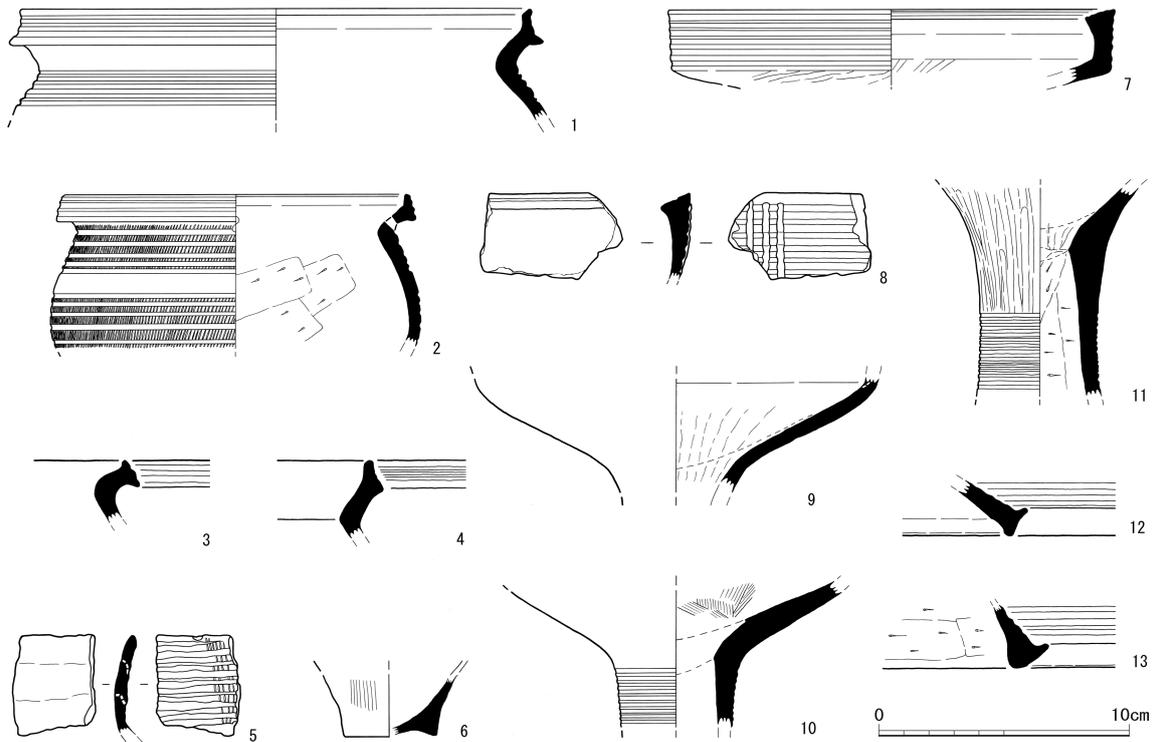
1はa調査区①区から出土した甕で、口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部復原径は20.1cmである。口縁部はく字状に外反し、端部は上下に拡張される。口縁部端面には浅い凹線文が3条、肩部には凹線文が5条施される。内外面ともナデで仕上げられる。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5mm程の石英・長石を多く含む。

2はa調査区①区から出土した甕で、口縁部から胴部にかけて残存する。口縁部復原径は13.4cmである。口縁部は短く外反し、端部は上方に拡張される。端面には3条の凹線文が施される。頸部には穿孔が認められる。肩部から胴部にかけて、一部の間帯を除く全面に刻目文が施され、その上から凹線文が施される。外面は風化が激しく不明であるが、内面は肩部までヘラケズリが施され、口縁部はナデで仕上げられる。にぶい黄橙色を呈し焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を多く含む。

3はb調査区で出土した、甕の口縁部細片である。口縁部は短く、端部は上下に弱く拡張される。端面には凹線文が2条施される。内外面ともナデで仕上げられる。内面がにぶい橙色、外面が褐灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1mm程の石英・長石を多く含む。

4はa調査区①区から出土した、甕の口縁部細片である。口縁部は急角度で立ち上がり、端部は上方に拡張される。端面には細く浅い凹線文が3条施される。内外面ともにナデで仕上げられる。黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1.5mmの石英・長石を含む。

5はf調査区①区第2層から出土した、直口壺の口縁部片である。外面には部分的に刻目文が施された後、凹線文が8条施される。明黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5



第39図 佐田峠3号墓出土土器 (1)

mm程の石英・黒色鉱物を含む。

6はe調査区北壁で出土した。底部片で、復原径は3.7cmである。外面に縦方向のハケ、内面にナデが施される。内面がにぶい黄橙色、外面が黒褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を多く含む。

7はf調査区①区第2層から出土した高杯で、口縁部から杯部の一部にかけて残存する。口縁部復原径は17.7cmである。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は内外に拡張される。外面に凹線文が6条、端面に凹線文が4条施される。杯部の内外面には斜方向のヘラミガキが施される。内外面ともににぶい黄橙色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土は径1mm程の石英を稀に含むが、緻密なものである。

8はa調査区②区で出土した。高杯の口縁部片である。外面には凹線文が6条施された後、棒状浮文が貼り付けられる。器形や胎土が、試掘時出土の23に酷似しており、接合はしないが同一個体と考えられる。

9はe調査区で出土した。高杯の杯部片である。杯部下半は大きく広がりながら口縁部に向けて緩やかに湾曲する。内外面にナデが施され、内面に絞り目が認められる。内面は灰黄褐色、外面はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5mm程の石英・長石を含む。

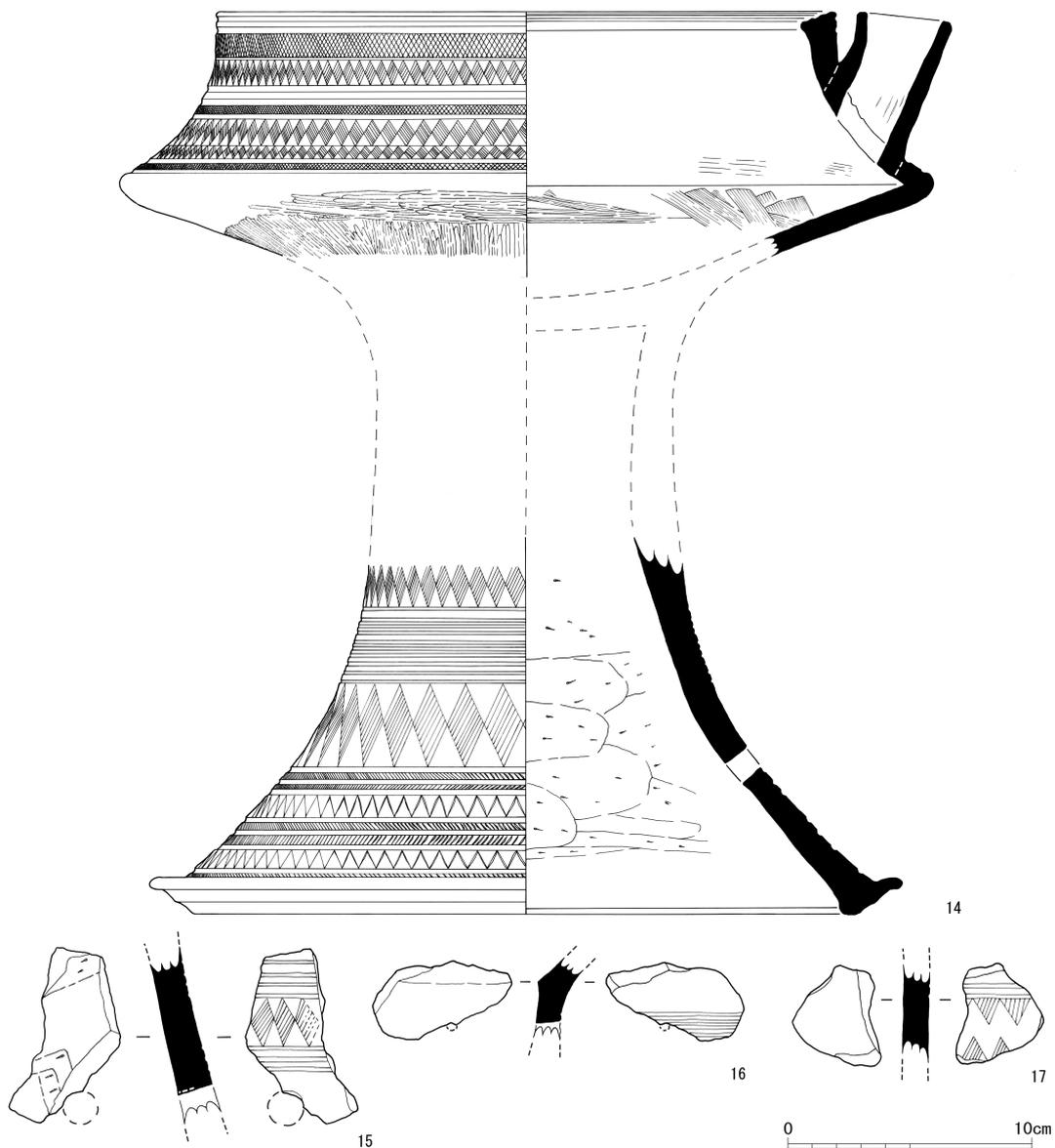
10はe調査区の表土中から出土した。高杯で、杯部下半から脚柱部にかけて残存する。脚柱部外面に浅い凹線文が9条認められる。外面は風化が激しく不明であるが、杯部内面に不定方向のハケが施される。内面には粘土円板の剥落痕が認められる。外面および脚柱部内面はにぶい黄橙色、杯部内面は暗灰黄色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1.5mmの石英・長石等を含む。

11はb調査区で出土した。高杯の脚柱部である。外面には縦方向のヘラミガキが施され、その上から凹線が施される。内面は器壁に沿ってヘラケズリが施され、上方には絞り目がみられる。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。外面には赤色顔料が付着している。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を含む。

12はe調査区より出土した脚部細片である。脚端部は上下方向に拡張される。内外面ともナデで仕上げられる。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5mm程の石英・長石を含む。

13はb調査区から出土した脚部細片である。脚部下端は肥厚して丸みを帯び、上端は跳ね上げるように拡張される。外面にナデ、内面にヘラケズリが施される。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～2mmの石英・長石を含む。

14は注口・脚台付鉢形土器で、a調査区①区および②区から出土した。接合しないが、本個体の破片は50以上にのぼり、鉢部および脚部は比較的良好な状態で遺存する。口縁部は内傾して端部を若干肥厚させる。口縁部復原径は25.0cmである。外面には注口が付設され、注口は口径3.7cmである。鉢部は強く外方へ突出し、鉢部復原最大径は33.1cmである。口縁部外面には凹線文、菱形文、斜格子文がそれぞれ段を分けて施され、端面には凹線文が3条施される。鉢部外面には縦方向のヘラミガキの後、横方向のヘラミガキが施され、内面には



第40図 佐田峠3号墓出土土器 (2)

ハケの後、横ナデが施される。注口部は外面がナデで仕上げられ、風化が激しいが内面には絞り目が認められる。脚部は下方に向かって緩やかな弧を描きながら開く。脚部下端は若干肥厚して平坦面をもち、上端は跳ね上げるように拡張される。脚部復原径は26.0cmである。脚部は鉢部と文様構成がやや異なり、外面に凹線文、菱形文、刻目文、鋸歯文が施されるほか、円孔が1ヶ所に認められる。内面には横方向のヘラケズリが施され、端部はナデで仕上げられる。鉢部内面がにぶい黄橙色、外面が橙色、脚部はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～3mmの石英・長石を含むが、緻密なものである。また、鉢部外面にはわずかに赤色顔料の付着が認められる。15・16・17は、接合しないが14の一部となる可能性がある。

15はa調査区②区において出土した。14の脚部の一部と思われる。外面には7条の細い

凹線文が施され、その間に菱形文が施される。外面は風化しているため不明であるが、内面は横方向のヘラケズリが部分的にみられ、ナデで仕上げられる。にぶい褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を含む。

16はa調査区①区より出土した。14の鉢部から脚柱部にかけての細片である。外面には4条の細い凹線文がみられ、穿孔が1ヶ所認められる。内外面ともナデで仕上げられる。橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を多く含む。17はc調査区で出土した。外面には2条の凹線文および鋸歯文が認められる。風化が進み調整は不明である。橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を含む。

今回の調査において出土した土器は、その大半がa調査区内から出土している。これらは墓壙ST02の上面にほぼ集中しており、またST02以外の埋葬施設上に伴う土器がみられなかったことから、これらの土器は最終埋葬を執り行い、墳丘全体に及ぶ封土で覆ったのちに、最初に掘り込まれた墓壙ST02上に置かれたものと考えられる。

注口・脚台付鉢形土器（図版第46（2）、第40図）注口・脚台付鉢形土器は、墳墓出土のものを含め備後北部の塩町式土器分布圏内に目立って出土している。佐田峠3号墓出土の個体は、凹線文・斜格子文・菱形文・鋸歯文・刻目といった多様な文様が施されており、備後北部でも三次地域のものとは形態・文様とも違いが大きい。文様構成は大きく異なるが、形態的にみた場合、東城町戸宇大仙山遺跡D地点の例が最も近く（松村1979）、また、形態も比較的近く同様な凹線文と菱形文を施すものとしては奥出雲町（旧横田町）国竹遺跡の例が挙げられる（田中・石田2000）。戸宇大仙山D地点、国竹の両遺跡では脚付鉢に加えて塩町式土器の甕が出土しており、備後北部地域、特に庄原盆地の人々の交流範囲が、高梁川上流域および斐伊川上流域の山間まで独自に及んでいることがわかる。

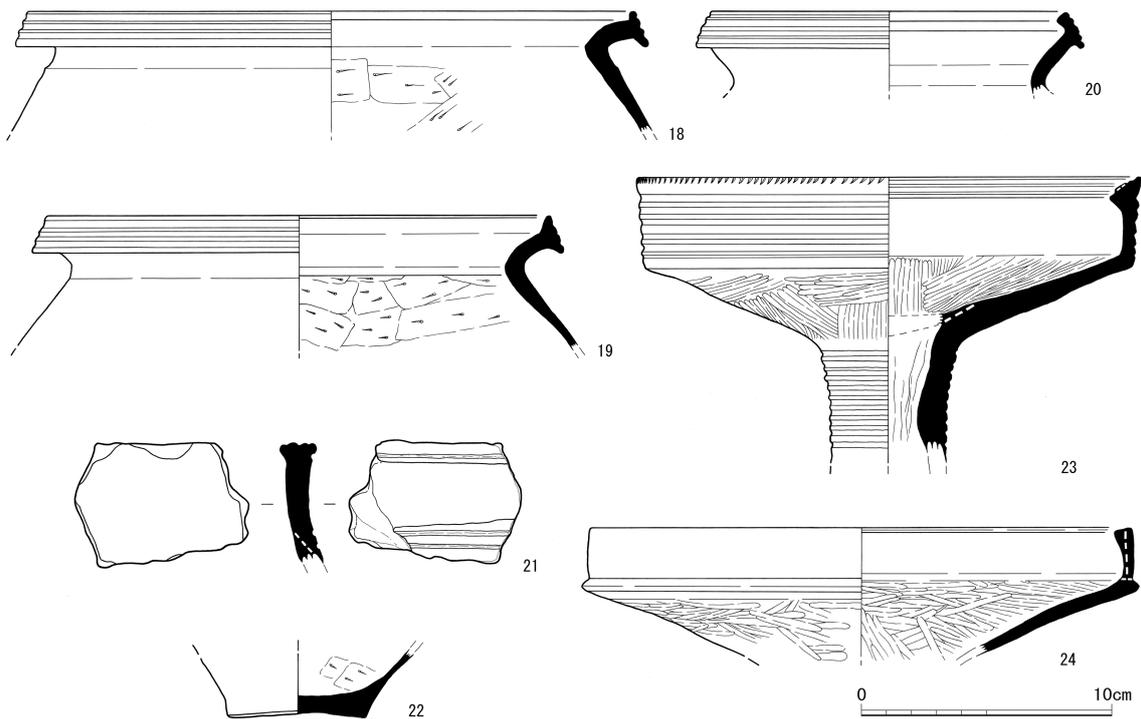
b. 試掘調査時出土土器（図版第47、第41図）

試掘調査時に出土した土器のうち7点を図化した。

18は甕で、口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部復原径は24.0cmである。口縁端部は上下方向に拡張され、端面には凹線文が3条施される。頸部は緩やかに屈曲する。肩部外面から口縁部にかけてはナデ、肩部内面には横方向のヘラケズリが施される。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を多量に含むが、緻密なものである。

19は甕で、口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部復原径は20.0cmである。口縁端部は上下方向に拡張され、端面には凹線文が3条施される。頸部は緩やかに屈曲する。肩部外面から口縁部にかけてはナデが、肩部内面には横方向のヘラケズリが施される。にぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5～1mmの石英・長石を多量に含む、やや粗いものである。

20は口縁部片である。口縁部復原径は14.0cmである。口縁端部は上下方向に拡張され、端面には凹線文が4条施される。にぶい黄褐色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土は径0.5mm程の石英・黒色鉱物を含むが、緻密なものである。



第41図 佐田峠3号墓出土土器(3)

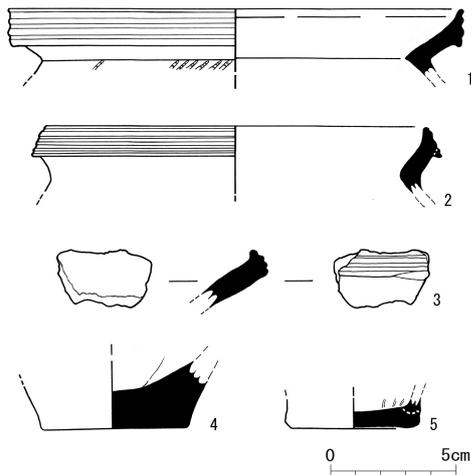
21は直口壺の口縁部片である。口縁端面には凹線文が3条施される。外面には凹線文が4条認められ、器壁が広く剥がれているが、全体に凹線文が施されると考えられる。内面には横ナデが施される。内面にがにぶい黄褐色、外面にがにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5mm程の石英・長石を含む。

22は底部である。底径5.6cmで、平底である。外面と底面にはナデが、内面にはヘラケズリ後にナデが施される。にぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1～2mmの石英・長石を含む。

23は高杯で、口縁部から脚柱部にかけて残存する。口縁部復原径は20.0cmである。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は横ナデによって内側に張り出す。口縁部外面には凹線文が5条施される。端面には凹線文が3条施された後、円形浮文が貼り付けられ、口縁部の上端にはヘラによる刻目文が施される。杯部は内外にヘラミガキが施され、内面には粘土円板の剥落痕が認められる。脚部外面には凹線文が10条以上施される。脚部内面には絞り目が認められる。にぶい黄橙色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土は径1mm程の石英を稀に含む程度の緻密なものである。

24は高杯で、口縁部から杯部にかけて残存する。口縁部復原径は21.0cmである。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は若干肥厚する。口縁部外面の一部には赤色顔料が認められる。杯部内外面にはヘラミガキが、口縁部内外面には横ナデが施される。橙色を呈し、焼成は非常に良好である。胎土は径1mm程の長石を稀に含む程度の緻密なものである。本個体は、器形や胎土からみて在地のものではなく、備後南部からの搬入品と考えられる。

これらの3号墓の出土土器は、装飾性の高さという点で中期後葉から末葉にかけての塩町



第42図 佐田峠4号墓出土土器

式の古い様相を残す。一方で、ほぼすべての個体に内面ヘラケズリが盛用され、甕ではヘラケズリの位置が頸部直下まで達していることから、弥生時代中期末葉から後期初頭に位置付けられる。搬入品である24の高杯をみても、口縁部が外傾せず、口縁端面が未発達であるなど中期末葉の特徴を残していることから、この時期比定は妥当と考えられる。

(4) 佐田峠4号墓

a. g調査区出土土器 (図版第48 (1)、第42図)

1・2は周溝SD01上層から、3は周溝SD02上層から、4は周溝SD07上層からそれぞれ出土した。

1は甕の口縁部片である。風化が著しく復原は困難であるが、同一個体の細片が周囲から出土しており、各部位の出土位置からみるに完形で供献されたと考えられる。口縁部の復原径は18.3cmで、口縁端面は外傾し、頸部内面は稜をもって屈曲する。端面に3条の凹線文、頸部に刻目文が施され、内外面はナデで仕上げられる。内面は黄褐色、外面は浅黄色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.5mm程の長石を含むが、緻密である。

2は甕の口縁部片である。口縁部の復原径は15.0cmで、端部は上下方向に拡張され、口縁端面は若干内傾する。端面に4条の凹線文が施され、内外面はナデで仕上げられる。にぶい淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.3~0.5mmの石英・長石・黒色鉱物を含むが、緻密である。

3は口縁部片である。上端が欠損するが端部は上方に拡張され、端面は外傾する。端面には3条の凹線が認められ、内外面はナデで仕上げられる。黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は径0.3mm程の石英・長石を含む。

5は底部である。底径5.3cmで、平底である。風化が著しく調整は観察困難である。淡黄褐色を呈し、やや焼成不良気味である。胎土は径0.5mm程の石英を含む。

b. 試掘調査時出土土器 (図版第48 (1)、第42図4)

4は底部である。底径5.7cmで、厚手の平底である。外面と底面にはナデが、内面は風化により不明瞭だがヘラケズリが施されると考えられる。浅黄橙色を呈し、やや焼成不良気味である。胎土は径0.2mm程の石英・長石を多量に含むが、緻密である。

これら4号墓の出土土器は、甕の口縁部が厚みをもった後期に近い形態をとる一方で、頸部内面にヘラケズリが観察されないこと、底部の作りが後期的な粘土充填法によらないことなどから、弥生時代中期末葉に位置づけられる。

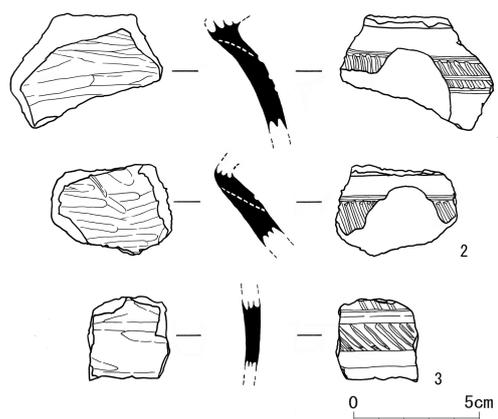
(5) 佐田峠5号墓

a. h調査区出土土器 (図版第48 (2)、第43図1・2)

1・2は周溝上面攪乱坑（櫓の抜痕坑）から出土した。1は甕の肩部片である。外面は刻目文が施された後、凹線文が施されている。内面は横方向の丁寧なヘラミガキ、外面はナデで仕上げられる。内面は暗灰黄色、外面はにぶい黄色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1mm程の石英・長石・黒色鉱物を含む。

2は甕の肩部片である。外面には凹線文が巡らされ、直下に刻目文が施される。内面は横方向の丁寧なヘラミガキ、外面はナデで仕上げられる。

内面は黄灰色、外面はにぶい黄色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1mm程の石英・長石を含むが緻密なものである。



第43図 佐田峠5号墓出土土器

b. 試掘調査時出土土器（図版第48（2）、第43図3）

3は肩部片である。外面には2段の列点文が施された後、間を強く横ナデされており、内外面ともナデで仕上げられる。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は径5mm程の石英・長石、径1mm程の雲母を含むが、緻密なものである。このほか細片3点がある（図版第48（2））。

これら5号墓の出土土器は、備後北部の中期後葉から末葉に盛行する塩町式土器の指標である重層刻目文（伊藤2005）、あるいはその退化型と考えられる文様が施される一方で、肩部内面にまでヘラケズリが観察されないことから、弥生時代中期末葉に位置づけられる。

（村田）

第2節 その他の遺物

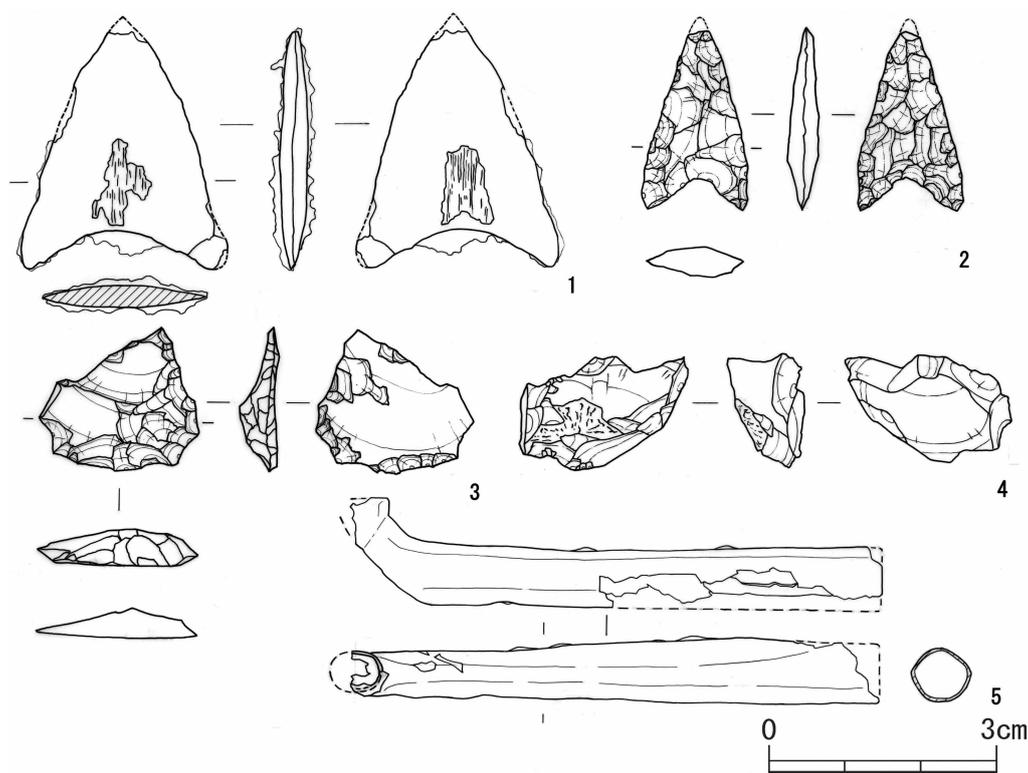
(1) 鉄 鍬

g 調査区④区周溝 SD04第75層から出土した無茎の三角形鍬（図版第49（1）、第44図1）である。先端部と逆刺の一部を欠損するが、鍬身3.3cm、逆刺部幅2.7cm、厚さ0.3cmに復原できる。重量3.5gとなる。根挟みの部分に木質痕跡が確認できる。（矢部）

(2) 石鍬・石器剥片他

石 鍬（図版第49（1）、第44図2） i 調査区④区第1層から出土した縄文時代の凹基無茎鍬である。現存長2.4cm・幅1.4cm・厚さ0.4cmで上端を欠損する。安山岩製で、精緻な押圧剥離が施され、素材面をほとんど残さない。

二次加工のある剥片（図版第49（1）、第44図3） k 調査区表土直下から出土し、時期は不明である。長さ1.9cm・幅2.1cm・厚さ0.5cmであり、島根県隠岐島産と考えられる漆黒の黒曜石製である。背面上端に折損による剥離がみられ、それを切るように縁辺に細かな加工が施



第44図 佐田岬出土遺物

される。

碧玉片 (図版第49 (1)、第44図4) g 調査区②区周溝 SD02調査用哇断面第37層 (第34図4) から出土した。長さ1.5cm、幅2.2cm、厚さ1.1cmである。石材は碧玉 (珪質緑色岩) で、加工目的のための剥片ではなく、製品を製作した後の残核と考えられる。

煙管 (図版第49 (1)、第44図5) i 調査区②区第2層から出土した鍛造品であり、素材である真鍮を厚さ0.5mm前後まで鍛打して成形している。現存長は約7.0cmで、火皿と首部の口径はそれぞれ5.5mmと6.5mmである。火皿と首部には欠損が認められる。脂反しには小さな屈曲が観察されるが、首部全体としては直線的な形態を示していることから古泉弘氏による編年 (古泉1992) のV段階後半、幕末から明治初頭期のものと考えられる。(谷口・横山)

寛永通宝 (図版第49 (2)) 佐田岬1号墓北西の調査区外、p 調査区南西端より1.45m南西付近で表採した。銭径2.5cm・銭厚1.8mm・重さ2.3gである。銅質と鑄上がりはともに悪い。色調は褐色を呈する。銭種は「寛永通宝」(1636年初鑄)であり、背文に「文」の字が鑄出される「文銭 (寛文期亀戸銭)」(1668年初鑄)である (鈴木1999)。(小森)

VII. 調査成果

第1節 各墳丘墓の形態と構築時期

(1) 墳丘墓の築造順序

佐田谷・佐田峠墳墓群の造営時期を再度確認しておきたい。まず、少ないながらも出土した塩町式土器片から、佐田峠4・5号墓は中期後葉のなかでもやや降り、末葉前後となる。佐田峠4号墓の造営以前に埋葬施設ST10が存在していた可能性が高く、佐田峠墳墓群はおそらく弥生時代中期後葉前後から墓域として利用され始めたと考えられることができる。

佐田峠3号墓の築造開始は出土した土器により、弥生時代中期末葉に構築され始めたようであるが、後期初頭まで埋葬と墳丘構築がくり返されていたことがわかる。佐田峠1・2号墓は後期に降るが、佐田峠1号墓が後期初頭、佐田峠2号墓は後期前葉に位置づけられることが判明した。

(2) さまざまな墳墓形態

昭和61(1986)年の佐田谷墳墓群の発掘調査(妹尾1986・妹尾編1987)で明らかにされたように、佐田谷墳墓群は方形台状墓(3号墓)から四隅突出型墳丘墓(1号墓・2号墓?)へと変化していたことが推測された。

一方、佐田峠墳墓群では、弥生時代中期後葉から末葉にかけて、すでに墳丘をもたない埋葬施設(ST10)と方形周溝墓(5号墓)、それに四隅突出型墳丘墓(3・4号墓)が造営されていた。4号墓は当初、四隅突出型墳丘墓として造営されていたが、列石・貼石をもつ方形墳丘に変形させられていた実態も明らかになった。つまり、弥生時代中期末葉から後期初頭の間には、方形周溝墓、周溝をもつ方形貼石墓に改変された四隅突出型墳丘墓、四隅突出型墳丘墓が併存していたと想定できる。しかし、後期前葉には、方形台状墓(1・2号墓)へと、その墳丘墓形態が変化していった。四隅突出型墳丘墓に注目すれば、中期段階の佐田峠墳墓群から、後期段階の佐田谷墳墓群へ移行していたようにもみえるが、両墳墓群においては四隅突出型墳丘墓と方形台状墓がともに併存しつつ、連綿と造営されていたという複雑な造墓状況を想定することができる。

(3) 弥生時代中期段階

a. 佐田峠4号墓西側埋葬施設ST10

C地区中央、試掘調査時に周溝と考えられていた溝状遺構は内部に木棺を埋置した埋葬施設(ST10)であることが判明した。埋葬施設ST10については出土遺物がないため、厳密な時期の確認はできなかったが、4号墓の造営時期よりも遡る可能性がある。溝SD05の掘削が4号墓墳丘の構築からそれほどの時間を経たおらず、ST10の埋設後、木棺木材が腐朽す

るぐらいの時間が経っていたとすれば、埋葬施設 ST10は弥生時代中期末葉となる4号墓よりも遡り、中期後葉に属する可能性もあろう。

b. 佐田峠5号墓

C地区東端に位置する。佐田峠5号墓は周溝一辺の長さが8.5mとなる方形周溝墓である。墳丘の南西側は地形改変によって既に削平されており、遺存してはいない。周溝内の墳丘部に楕円形の掘形をもつ土壙など、埋葬施設と考えうる遺構2基が検出された。この2基が墓壙であるとすれば、その検出面のレベルや遺存状況からみて、墳丘盛土層下に埋葬施設があったと考えるしかない。おそらく墳丘構築以前に墓壙が掘削され、被葬者が埋葬された後に墳丘盛土が施されたものとみられる。周溝攪乱坑から出土した土器細片は塩町式の甕形土器の特徴を持っていたことから、当該遺構が弥生時代中期末葉までに造営された大型方形周溝墓と想定することができた。

c. 佐田峠4号墓

C地区中央に位置する。第3次調査において再検出した佐田峠4号墓は、最終的には一辺およそ4.5mとなる方形墳丘と、その周囲に周溝をもつ弥生時代中期末葉前後に属する貼石墓であった。石列は西辺を中心に北辺と南辺の一部でしか検出できなかったものの、南辺にも周溝内で板状角礫が散在していたことから、ある程度石列が巡っていた可能性が高いと判断した。墳丘裾部に石列を立て並べ、数センチの間隙をおいて墳丘斜面に1～2枚の貼石を行うといったもので、三次市陣山墳墓群2号墓（落田1996）など、初期四隅突出型墳丘墓に近い列石・貼石構造を持つことが判明した。

しかし、第4次調査の結果、北辺周溝 SD05は4号墓よりも西側に延伸して掘削された区画溝であり、築造当初の4号墓の墳丘はさらに北側に延びていたことがわかった。造営当初、長方形の墳丘をもつ四隅突出型墳丘墓であったのである。墳丘築造後、溝 SD05によって4号墓の北側が再掘削され、方形墳丘の南北に列石・貼石を施して改変していたことが判明した。

墳丘南西では突出部は検出されなかったが、周溝 SD02によって突出部および墳丘の一部が削平されてしまった可能性が高くなった。仮に SD02が突出部を破壊したのちに再掘削されたものであるとすると、墳丘西側の南北規模はおよそ8.1mとなる。墳丘東側はすでに当初の周溝下面まで削平されており、東西規模を復原することは難しい。

なお、墳丘下層の下に墓壙（ST08）と思われる掘り込みの掘形を確認した。4号墓も墳丘構築以前に墓壙が掘削され、埋葬された後に墳丘盛土を構築し、列石・貼石が施されたものとみられる。

d. 佐田峠3号墓

C地区西端の最高所にあり、試掘調査によって確認した四隅突出型墳丘墓である。墳丘の遺存状況は悪く、北側の盛土の流出や重機の通過によって著しく変形を被っていた。よって、その遺存状況を明らかにするために最初に調査を手掛けた。

3号墓の墳丘規模は墳丘中央で南北7.05m・東西15.3m・高さ1.5m以上となり、かなり細

長い長方形を呈するものであった。墳頂平坦部墳丘の下からは4基の墓壙（ST02・ST03・ST05・ST07）を検出した。墓壙 ST02埋土を掘り込んだ小土坑 SX04は小児土壙墓の可能性も考えられよう。これらの墓壙は順次、掘削され、埋葬をくり返し、最終的にすべてを覆う墳丘を構築していた。弥生時代中期末葉から後期初頭の土器が出土した。

墳丘裾部に列石はなかったが、墳丘斜面には、拳大から人頭大の板石が2段から3段に貼り巡らされていた。墳丘南東部隅角は南側貼石面と東側貼石面の交差角度がわずかに狭角となり、突出部は若干外方に向かって膨らむように成形されていた。両貼石面の交差した稜線付近には特に大型の板石が貼り込まれていた。稜線にはステッピング・ストーンになるような貼石は検出できなかったが、以前から現地表面に露出していた部分であり、元来貼石が稜線部分に存在しなかったと断言することは難しい。

なお、墓壙 ST02の封土・盛土上からは注口のある脚台付の大型鉢形土器が出土した。鋭利な刃物で精緻な文様を施しており、塩町式土器には例のない施文技術をもっていた。

(4) 弥生時代後期段階

a. 佐田峠1号墓

A地区丘陵の南側先端にある。佐田峠2号墓の南側に隣接していた。墳丘の遺存状況はおおむね良好だが、西側の墳丘裾部が山道によって削平されていた。斜面地に構築されたため、墳丘高は一定ではないものの、1号墓は南北17.2m・東西12.6m・高さ1.4～1.7mほどの方形台状の墳丘墓で、墳丘南辺裾まわりには浅い周溝が巡る。墳丘の長幅比からも後期前葉のものと考えられる。

墳頂平坦部では、長楕円形の墓壙2基（ST08・ST09）と不明土坑2基（SX10・SX11）を検出した。墓壙 ST08の検出面直上から標石とみられる角礫と岡山県南部地域の影響を受けた後期初頭の高杯などが出土した。墳丘を構築した後に墓壙を掘削し、埋葬を行ったことがわかる。

b. 佐田峠2号墓

A地区丘陵にある。1号墓北側に隣接して築造されていた。2号墓は南北14.4m・東西15.0m・高さ0.6～2mほどの正方形に近い方形台状の墳丘をもち、墳丘裾まわりに周溝が巡る。墳頂平坦部では、隅丸方形の墓壙2基（ST06・ST07）を検出した。いずれも墓壙の直上に標石を配置しており、墓壙 ST06上面からは後期前葉の脚台付長頸壺が出土した。岡山県南部地域に起源をもつものである。1号墓と同様、墳丘構築後に墓壙を掘削し、埋葬を行ったようである。墳丘南西部隅角は突出しておらず、方形を呈する墳丘墓（方形台状墓）であると考えられた。墳丘北辺の周溝 SD01と南辺の周溝 SD02とでは1m以上の標高差があることから、1号墓同様に墳丘裾の周溝は全周していないものと推測できる。なお、周溝 SD04底面で検出した焼土坑 SX05は放射性炭素の年代測定によって7世紀中葉から8世紀初頭という実年代を得たことにより、SD04は後世に一部改変を受けている可能性も考えられる。

（野島・今福・村田）

第2節 墳丘構築の変化と埋葬施設の墓壙配置

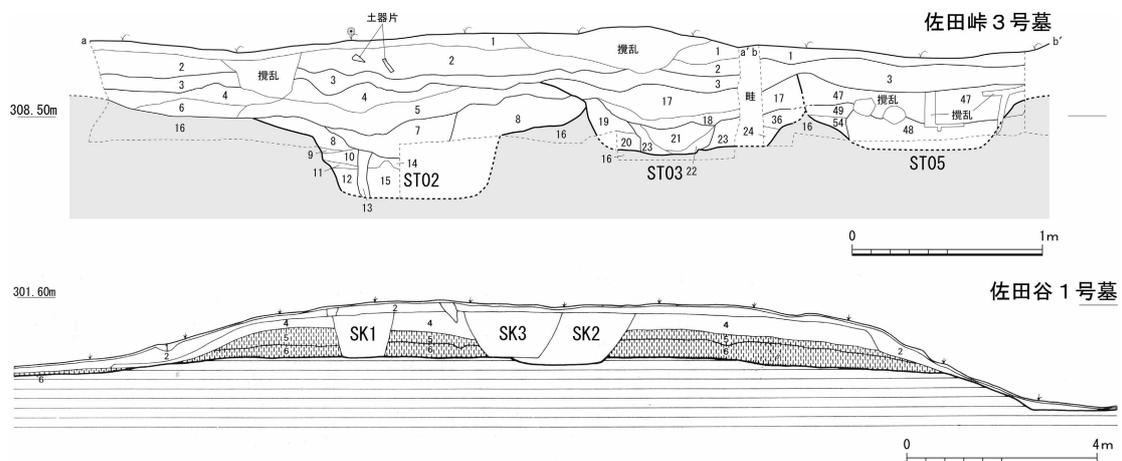
(1) 墳丘構築方法の変化と墳墓間格差

これまでの発掘調査のなかで最も重要な調査成果のひとつに、墳丘構築方法の差異を確認したことがある。中期末葉から後期初頭に属する佐田峠3号墓では、墓壙を掘削後、埋葬して封土を行うが、隣接してさらなる埋葬を行いつつ、墳丘が徐々に形成され、最後に貼石が施されていたことを明らかにした(第45図上)。ほぼ同時期となる佐田峠4号墓も墳丘を巡る周溝や墳丘裾部の列石と墓壙がほぼ同じレベルに存在すると想定できたことから、被葬者の埋葬後に墳丘が構築され、列石・貼石が施されたとみられる。佐田峠5号墓も、周溝よりも墓壙のほうが低い位置にあったと思われることから、被葬者の埋葬後に墳丘が構築された可能性が高い。

しかし、後期初頭に築造された佐田谷1号墓では、墓壙4基はいずれも墳頂平坦部の地表直下において確認された(第45図下、妹尾編1987)。佐田峠1・2号墓でも、墳頂平坦部の地表直下で複数の墓壙の並列配置が確認された。このことから、墓壙掘削および埋葬の段階が墳丘構築前(埋葬後に墳丘構築が行われる「墳丘後行型」)あるいは、墳丘構築中(埋葬と墳丘構築が交互に行われる「同時進行型」)となる墳丘墓と、墳丘構築後(墳丘構築が埋葬に先行する「墳丘先行型」(和田2003、今福2012))となる墳丘墓がともに確認されたわけである。

仔細にみれば、中期末葉の段階では、同時進行型の墳丘構築方法である可能性が高いのに対して、後期初頭から前葉の段階では、墳丘先行型へと変化していた様相を窺い知ることができた。

また一方で墳墓群(グループ)の間に格差もみられた。つまり、佐田峠墳墓群にはA・C調査地区ともに、全長が15~17mを超えるものはなく、全長20m前後あるいはそれを凌駕する墳丘をもつ佐田谷墳墓群よりも相対的にはやや小さな墳丘規模であったといえる。



第45図 墳丘構築方法の差異

(2) 墓壙規模とその配置

中期末葉に構築され始めた佐田峠3号墓で確認した埋葬施設はおそらく5基（ST02～05・ST07）で、中心埋葬の墓壙 ST02は全長2.64m・幅1.15mである。当時としては大型の部類ではあるが、他のものと比べて突出する規模とまでは言いにくい。墳丘築造の契機となった被葬者の埋葬とすることができるが、追葬者との社会的地位に著しい隔たりがあったとまでは言い切ることはできない。これに対して、後期初頭の佐田谷1号墓には、中心となる埋葬施設が顕現していた。中心埋葬のために穿たれた墓壙 SK2は検出面で全長3.85m・幅3.23mと他の墓壙よりも際立って大きく、木棺を覆い囲む木槨を埋葬施設として新たに採用していたわけである。墳丘構築方法の変化とも関係する葬送祭祀の変革と思える。

また、墳丘の長軸方向と埋葬施設の主軸方向の位置関係についてみてみたい。まず、弥生時代中期後葉の墳丘墓である三次市宗祐池西1号墓（尾本原2000）や陣山2号墓（落田1996）では、墳丘長軸に平行して埋葬施設が配列されていたのに対して、後期初頭の佐田谷1号墓では中心埋葬施設が墳丘長軸に直交していた。佐田峠3号墓の埋葬施設も墳丘長軸に直交するという点では佐田谷1号墓に類似している。

次に、後期初頭の佐田峠1号墓の墳丘構築方法は墳丘先行型に変化しているものの、墓壙 ST08は全長2.07m・幅0.95mと大きくはない。墓壙 ST08・09ともに長方形の墳丘長軸方向に直交して配置されており、比較的小規模な墓壙が数基並列していた状況を想定することができる。後期前葉に下る佐田峠2号墓は墳丘の形状を復原しづらい。南北14m、東西15mあまりと想定され、正方形に近い墳丘をもつ。墳頂平坦部の形状から、東西方向を長軸とすれば、墓壙 ST06・07は長軸方向に直交するといえる。墓壙 ST06は全長2.20m・幅1.07mと佐田峠1号墓の墓壙群と大差なく、中心埋葬が顕現してはいない並列配置であった。（野島・今福・村田）

第3節 墳丘墓における土器配置状況の変化

中期末葉の佐田峠4号墓は墳丘西辺を巡る周溝 SD01・SD02上層、SD07底面直上から甕形土器が出土した。いずれも細片化し、取り上げの際に原形をとどめないまでに軟質化してしまっていたが、口縁部から胴部上半が遺存していた。墳丘南辺の周溝は削平が著しく、土器が遺存していたかどうかは不明と言わざるをえない。墳丘検出面や墳丘中央部の断ち割りによって土器が出土したことはなく、周溝内に甕形土器が位置していたとみられる。

同じく中期末葉前後となる佐田峠5号墓では周溝からの土器の出土は見られなかったものの、周溝 SD03を破壊していた檜の抜根坑から塩町式土器細片が出土した。周溝内に遺存していた可能性があるが、遺構の多くを失っていたため、詳細は不明というしかない。

中期末葉から後期初頭となる佐田峠3号墓は中心的埋葬施設（墓壙 ST02）上から注口・脚台付鉢形土器が出土した。墓壙に直接伴うものではなく、全体を覆う墳丘の上層から出土

した。佐田谷1号墓でみられたように、墓壙直上あるいは木棺腐朽に伴う墓壙落ち込み埋土から出土する供献土器などとはその性格がやや異なるものと考えられよう。弥生時代中期、広島県北部の墳丘墓では周溝や墳丘裾周辺など、墳丘外部に長頸壺や高杯、甕などが数点供献されていることがあるが、佐田谷・佐田峠墳墓群では、供献土器の位置が墳丘外部から墳頂平坦部墓壙上に移動したことが見て取れる。佐田峠3号墓は供献土器が中心的墓壙に埋葬される被葬者の葬送に伴うようになるまでの過渡的な様相とすることができよう。

後期初頭となる佐田峠1号墓では、墳丘先行型の構築方法に変化し、墓壙ST08の上面に高杯・脚付鉢・直口壺・壺（あるいは甕）がそれぞれ供献されていた。後期前葉となる佐田峠2号墓でも墳頂平坦部の墓壙ST06上面に台付長頸壺が供献されていた。試掘調査時に1号墓および2号墓墳丘南西周溝から土器が出土しているものの、いずれも細片となっており、本来の位置をとどめていない。発掘調査では周溝から全く土器片が出土していないことから、墳頂付近から転落したと推測できる。

今回の発掘調査では、墳丘後行型あるいは同時進行型の墳丘墓としうる佐田峠4号墓は周溝に供献土器が配置されていたと想定することができる。埋葬と封土に際してではなく、墳丘完成以降に土器供献を伴う葬送儀礼が執り行われたものと想像することができよう（野島2015）。同時進行型でも墳丘が大型化する佐田峠3号墓では、数回の埋葬と封土を経たのちに墳丘を構築しており、その最終段階に、墳頂平坦部において土器供献を伴う葬送儀礼が行われた。墳丘先行型の佐田峠1・2号墓では、墳丘構築後、墳頂平坦部に墓壙を掘削し、埋葬と封土を行う際に装飾性の高い土器の供献を伴う葬送儀礼が執り行われたとすることができよう。つまり、土器供献の対象が墳墓全体から中心的墓壙の被葬者個人に変化していったものと想像することができる。墳丘構築方法と埋葬のタイミングの変化が葬送儀礼にも影響を及ぼした可能性を指摘することができよう。吉備南部系の土器がみられるようになることにも何らかの関連を見出すことができるかもしれない。（野島・今福・村田）

第4節 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

広島県庄原市宮内町に位置する弥生時代後期初頭から前葉の佐田峠墳墓群SX05および、庄原市新庄町字和田原に位置する弥生時代中期末葉の和田原E地点遺跡より検出された炭化材・炭化種実（第46図）について、両遺跡の時間差を調べる目的で、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った¹⁶⁾。

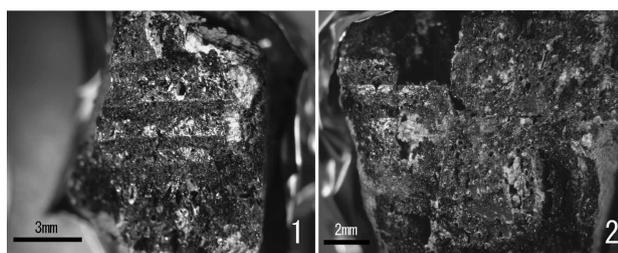
(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第2表のとおりである。試料は、佐田峠1号墓北西のSX05から土坑の底面に貼りつく状況で出土した炭化材2点（試料No.5：PLD-19515、試料No.

6: PLD-19516) と、和田原 E 地点遺跡の焼失住居跡である SB05 の 3 層から炭化した建築材や焼土の中からまとまって出土したトチノキ炭化種子 2 点 (試料 No. 3: PLD-19517、試料 No. 4: PLD-19518) の、計 4 点である。なお、佐田峠 1 号墓北西の SX05 から出土した炭化材は、同じ木材が炭化したものと考えられているが、樹種が異なるので別個体である。

考古学的な所見から、佐田峠墳墓群の試料は弥生時代後期初頭から前葉、和田原 E 地点遺跡の試料は弥生時代中期末葉 (塩町式土器併行期) と推定されている。試料は調製後、加速器質量分析計

(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代および、暦年代を算出した。



第46図 年代測定試料の外観

1. 佐田峠墳墓群1号墓 SX05炭化材試料No5 (PLD-19515)
2. 佐田峠墳墓群1号墓 SX05炭化材試料No6 (PLD-19516)
3. 和田原 E 地点遺跡 SB05トチノキ炭化種子試料No3 (PLD-19517)
4. 和田原 E 地点遺跡 SB05トチノキ炭化種子試料No4 (PLD-19518)

(3) 結果

第 3 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 47 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

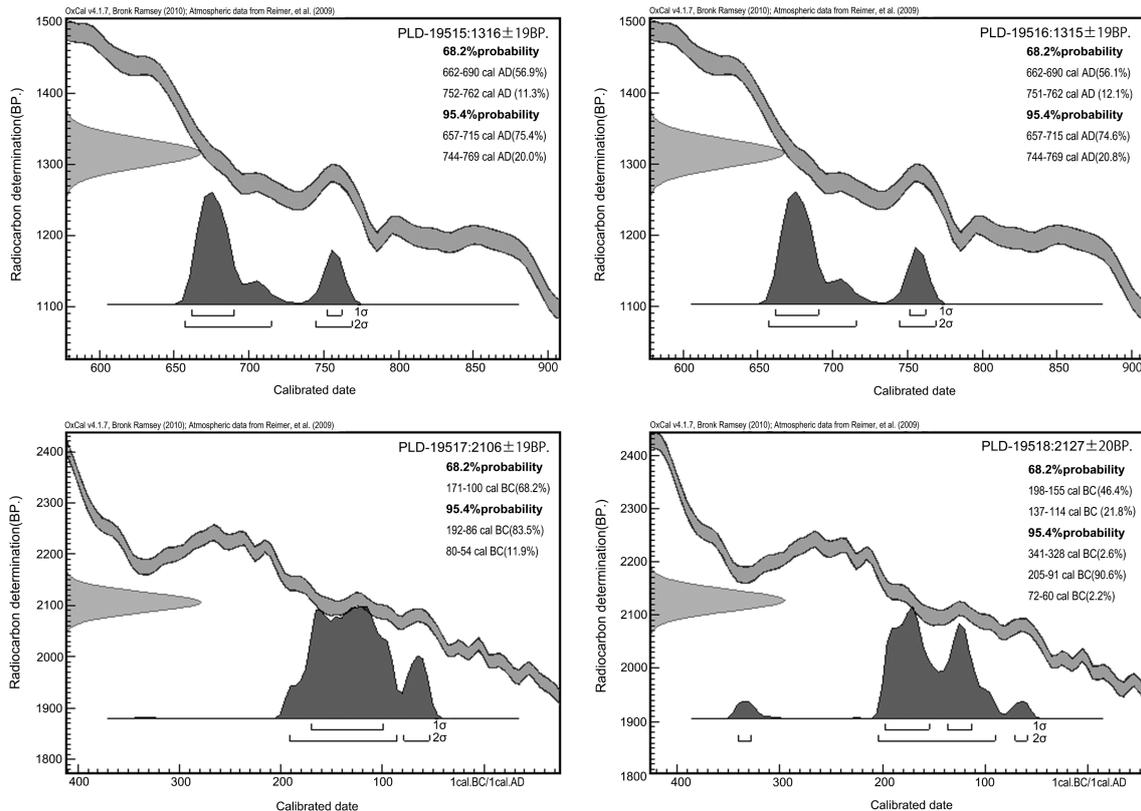
^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

第2表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-19515	遺跡名：佐田峠墳墓群 調査区：A区 遺構：SX05 層位/深度：含炭黒色砂質土層（遺構検出面から-10~15cm） 試料No.5	試料の種類：炭化材（散孔材） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 採取位置：6年輪中外側1年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD-19516	遺跡名：佐田峠墳墓群 調査区：A区 遺構：SX05 層位/深度：含炭黒色砂質土層（遺構検出面から-10~15cm） 試料No.6	試料の種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 採取位置：9年輪中外側3年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD-19517	遺跡名：和田原E地点遺跡 遺構：SB05（焼失住居跡） 層位：3層 試料No.3 備考：SB05の炭化建築材や焼土中からまとめて出土	試料の種類：炭化種実（トチノキ種子，1点） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）
PLD-19518	遺跡名：和田原E地点遺跡 遺構：SB05（焼失住居跡） 層位：3層 試料No.4 備考：SB05の炭化建築材や焼土中からまとめて出土	試料の種類：炭化種実（トチノキ種子，1点） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1N，塩酸：1.2N）



第47図 放射性炭素年代測定および暦年較正結果
(グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。)

第3表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-19515 佐田峠墳墓群 SX05 試料No.5	-24.24 \pm 0.14	1316 \pm 19	1315 \pm 20	662AD(56.9%)690AD 752AD(11.3%)762AD	657AD(75.4%)715AD 744AD(20.0%)769AD
PLD-19516 佐田峠墳墓群 SX05 試料No.6	-23.83 \pm 0.14	1315 \pm 19	1315 \pm 20	662AD(56.1%)690AD 751AD(12.1%)762AD	657AD(74.6%)715AD 744AD(20.8%)769AD
PLD-19517 和田原 E 地点遺跡 SB05 試料No.3	-21.11 \pm 0.14	2106 \pm 19	2105 \pm 20	171BC(68.2%)100BC	192BC(83.5%)86BC 80BC(11.9%)54BC
PLD-19518 和田原 E 地点遺跡 SB05 試料No.4	-22.97 \pm 0.13	2127 \pm 20	2125 \pm 20	198BC(46.4%)155BC 137BC(21.8%)114BC	341BC(2.6%)328BC 205BC(90.6%)91BC 72BC(2.2%)60BC

(4) 考 察

各試料の暦年較正結果のうち、2 σ 暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については小林（2009）を参照した。

佐田峠1号墓北西のSX05の底面から出土した炭化材2点は、試料No.5（PLD-19515）が657-715 cal AD（75.4%）および744-769 cal AD（20.0%）、試料No.6（PLD-19516）が657-715 cal AD（74.6%）および744-769 cal AD（20.8%）の暦年代範囲を示した。2試料ともまったく同じ暦年代範囲を示している。ただ、試料の年代は7世紀中葉から8世紀後半に相当し、考古学的所見から予想された弥生時代後期初頭から前葉よりも新しい年代を示す結果となった。出土遺構であるSX05が弥生時代後期初頭から前葉の遺構であったとすれば、底面の炭化材は何らかの理由により後世の7世紀中葉から8世紀後半あるいはややそれ以降に埋まった可能性が考えられる。

和田原E地点遺跡の焼失住居跡SB05の3層から出土したトチノキ炭化種子2点は、試料No.3（PLD-19517）が192-86 cal BC（83.5%）および80-54 cal BC（11.9%）、試料No.4（PLD-19518）が341-328 cal BC（2.6%）、205-91 cal BC（90.6%）、72-60 cal BC（2.2%）の暦年代範囲を示した。試料No.3は紀元前2世紀初頭から紀元前1世紀前半、試料No.4は紀元前4世紀中葉から紀元前1世紀前半に相当し、弥生時代中期末葉との予想年代に対しておおむね整合的であった。
(パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)

VIII. 総 括

佐田谷・佐田峠墳墓群は弥生時代中期後葉から後期前葉まで造営された。今回報告した佐田峠墳墓群の発掘調査からでも、無墳丘の埋葬施設・方形周溝墓・方形貼石墓・方形台状墓・四隅突出型墳丘墓など多様な墳墓形態が併存している状況を確認できた。

それだけでなく、同形態の墳丘をもつと思われていた墳墓でも、墳丘構築方法が異なることもわかってきた。佐田峠3号墓は埋葬をくり返した後に全体の墳丘を構築する同時進行型の四隅突出型墳丘墓であることが判明した。墳丘を構築した後に墓壙を穿ち、埋葬を行う墳丘先行型の四隅突出型墳丘墓である佐田谷1号墓とは異なるものであったわけである。四隅突出型墳丘墓が成立し、変容していく過程と捉えることができ、それが両墳墓群における墳丘墓造営のなかで起こっていたのである。三次・庄原地域の四隅突出型墳丘墓が独自に成立・発展した可能性が高くなったといえる。

また一方で、両墳墓群においては、墳丘規模の格差と埋葬配置の差異も明確となった。佐田峠墳墓群では墳丘規模が佐田谷墳墓群を超えるものはなく、相対的に小規模な墳丘墓で構成されていた。佐田峠墳墓群は同時進行型の3号墓、墳丘先行型の1・2号墓の違いはあっても、いずれも格差のみられない複数の墓壙が並列して配置されており、佐田谷1号墓のような中心となる大型墓壙を認めることはできなかった。当該時期に墳丘墓群間における格差があらわれてきたことも考慮すべきであろう。

墳丘構築方法が墳丘先行型に変化し、墳丘自体が大型化した後期初頭前後には、葬送儀礼に関わる供献土器が墓壙直上に置かれることとなった。被葬者個人の埋葬に土器の供献を伴う儀礼が執り行われていくこととなったと思える。ここにも墳丘墓の変化だけでなく、葬送儀礼の変化を見出すことができる。佐田谷・佐田峠墳墓群ともに吉備南部系の供献土器がみられるようになることも注目する現象として指摘できる。当該地域の弥生墳丘墓の発展とともに、備後北部を取り巻く社会情勢の変化や当該地域の対外交渉の推移を窺うことのできる知見を得ることができた。両墳墓群のさまざまな変化は弥生時代中期から後期への墳丘墓と弥生社会の発展の諸様相を如実に示しているといっても過言ではない。

以上の調査成果からみても、佐田谷・佐田峠墳墓群は中国地方における弥生墳丘墓の発展の様相を知ることができる、きわめて重要な墳墓群であるといえる。

IX. おわりに

佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査は庄原市教育委員会の協力連携と、広島大学大学院文学研究科教授であった古瀬清秀の指導のもと、同准教授の野島と広島大学大学院文学研究科考古学研究室の大学院生、および学部生たちが現地調査を行ってきた。学部2・3年次生は考古学野外実習として参加していただいた。

はじめての発掘調査に参加した学生たちは戸惑いながらも、事前に勉強会を行い、調査目的と自らの調査分担を理解し、その使命を全うするため、懸命に実地作業を行ってくれた。大学院生たちは数回の発掘調査を経験してきたため、毎年の発掘調査の計画を組み立てる協議を野島と行った。現地調査では学部生の調査作業を統括し、調査成果を取りまとめていった。夏の発掘調査から帰り、秋には土器などの遺物実測を始め、冬にかけて実測図のトレース浄書をくり返した。検出遺構図はドローイング・アプリケーションツールによるデジタル・トレースを行った。年末・年始には原稿作成と幾度にもわたる推敲をくり返し、概要報告を帝釈峽調査室年報に掲載してきた。本報告は大学院生たちが作成してきた文章や図化資料をもとにしており、彼ら彼女らの真摯な努力がなければなしえなかった。

特に広島大学学部生として佐田峠墳墓群での発掘調査を経験し、大学院に進学して後輩学部生たちの指導まで行ってくれた今福拓哉・村田晋両氏の献身的な協力に感謝したい。

広島大学と庄原市教育委員会が締結した共同研究における発掘調査は、平成20（2008）年から平成24（2012）年までであり、広島大学と庄原市の共同研究が終了したのち、平成25（2013）年以降、庄原市教育委員会が単独で佐田谷墳墓群の発掘調査を継続した。これらの調査成果については来年度以降、報告する予定である。

今後、佐田谷・佐田峠墳墓群の調査成果が考古学研究者に共有されるだけでなく、庄原市民を中心に広く周知していただき、庄原の文化財として保護活用と普及啓発が進むことを切に期待している。

註

1. 本報告で示した黒曜石・碧玉の剥片（図版第49・第44図3・4）も後期旧石器時代の所産であろう。
2. 佐田谷1号墓の発掘調査に関しては、当時の調査を担当した妹尾周三氏（現 東広島市教育委員会）にご教示をいただいた。また、佐田谷1号墓の発掘調査における記録資料閲覧に関しては、広島県埋蔵文化財調査室向田裕始氏にご協力をいただいた。記して感謝したい。
3. 平成9年の試掘調査による掘削地点は「トレンチ」とし、tr.と略した。平成20～24年度、広島大学考古学研究室の発掘調査による掘削地点は「調査区」とした。
4. のちにこのB地区を設定した丘陵尾根全体を開削して高規格道路が開通することとなった。
5. 佐田峠墳墓群の存在する調査地区（A・C地区）には、平成12年前後に檜の植林がなされた。重機による削平が行われたようであり、キャタピラの痕跡なども確認することができた。5号墓近辺など一部にはバケットによる掘削、産業廃棄物の遺棄が行われていることも確認できた。
6. 佐田峠墳墓群の発掘調査の概要については、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室年報に掲載した（石貫・斉藤2008、野島2008、野島ほか2009～2011・2013、脇山ほか2012）。
7. 平成23年8月31日に佐田峠墳墓群発掘調査検討委員会（広島県文化財保護審議会委員 古瀬清秀・小都隆、庄原市文化財保護審議会会長 武田祐三、広島県立歴史民俗資料館長（当時）植田千佳穂）が開催された。
8. 便宜上、g調査区で検出した溝を周溝SD05とし、k調査区のを溝SD05として記述するが両者は同一の遺構である。
9. 発掘調査最終年度の第6次調査とその後の保存および史跡指定のために庄原市教育委員会によって設置された佐田峠墳墓群発掘調査検討委員会では、墳丘構築と埋葬施設の関係の確認が重視され、佐田谷2・3号墓および佐田峠1・2号墓の埋葬施設の確認を行うこととなった。
10. 埋葬施設（墓壙）については、断ち割りや掘削を極力行わず、その破壊を最小限にとどめる方向で調査を進める旨、庄原市教育委員会を通じて文化庁からの指導があった。
11. 調査において確認した土層の層序・名称・土色・性質などについては、文末の土層観察表を参照されたい。
12. 平成24年度第6次調査q調査区南端で検出した角礫2点は平成23年度第5次調査m調査区北端で検出した角礫2点と同一のものである。なお、第5次調査時点では墳頂平坦部の調査を実施しておらず、標石の可能性のあるものとして認識していた。
13. 土層に番号をつけるにあたり、l調査区では西壁、m調査区では西壁、n調査区では西壁の層序をそれぞれ基準とした。他の壁面で新しく確認した層には、その続きの番号をつけることとした。したがって、例えばl調査区第1層、第2層といった1つの層番号はl調査区では同一の層であるが、mおよびn調査区の第1層、第2層とは同一の層ではない。また、それらの層序番号が堆積の順序を示しているわけではない。o調査区では東壁、p調査区では東壁の層序をそれぞれ基準とした。o・p調査区は接続する調査区となったため、o・p調査区では層序の番号を統一している。
14. 試掘区の再発掘を行っているため、再確認はできなかったが、試掘では埋葬施設ST10と周溝SD07とはほぼ同一レベルで検出されたようである。
15. 台付長頸壺の類例に関しては、寝屋川市教育委員会濱田延充氏、四條畷市教育委員会實盛良彦氏および、総社市教育委員会平井典子氏・高橋進一氏にご教示をいただいた。記して感謝したい。
16. パレオ・ラボ AMS年代測定グループが放射性炭素による年代測定を行った。なお、本節の執筆は伊藤茂・安 昭炫・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子による。

引用・参考文献

- 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。
- 石貫弘泰・斉藤 礼 2008 「佐田峠墳墓群（第1次）調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室、34～36頁。
- 伊藤 実 1992 「備後地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編、木耳社、156～195頁。
- 伊藤 実 2005 「四隅突出型墳丘墓と塩町式土器－四隅突出の思想とその背景－」『考古論集－川越哲志先生退官記念論文集－』川越哲志先生退官記念事業会、375～398頁。
- 稲垣寿彦編 1999 『妙見山遺跡』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2000 『広島県史跡 唐櫃古墳』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦編 2001 『和田原C地点遺跡発掘調査報告書』庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行編 2004 「和田原E地点遺跡・小和田横穴墓」『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 稲垣寿彦・今西隆行 2005 『広島県史跡唐櫃古墳整備事業報告書』広島県庄原市教育委員会。
- 今福拓哉 2012 「弥生墳丘墓の埋葬施設と墳丘構築に関する研究」『広島大学考古学研究室紀要』第4号、広島大学大学院文学研究科帝釈峽調査室・考古学研究室、83～100頁。
- 会下和宏 2003 「西日本における弥生墳墓副葬品の様相とその背景」『島根考古学会誌』第17集、島根考古学会、49～72頁。
- 落田正弘 1996 『陣山遺跡』三次市教育委員会。
- 尾本原勇人 1996 「宗祐池西遺跡について」『芸備』第25集、51～54頁。
- 尾本原勇人 2000 『宗祐池西遺跡発掘調査報告書』三次市教育委員会。
- 門脇俊彦 1973 『波来浜遺跡発掘調査報告書』江津市。
- 金井亀喜・向田裕裕他 1978 「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1)、広島県教育委員会。
- 桑原隆博 1982a 「小和田遺跡」『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、31～50頁。
- 桑原隆博 1982b 「西山遺跡」『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、9～30頁。
- 桑原隆博 1986 「四隅突出型方形墓覚書(1)－備後北部を中心として－」『芸備』第17集、1～16頁。
- 桑原隆博 2000 「四隅突出型墳丘墓の出現と展開－備後北部を中心として－」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』大塚初重先生頌寿記念会、713～738頁。
- 古泉 弘 1992 「日本の初期煙管に関する覚書」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』第II集、郵政考古学会、117～133頁。
- 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣、55～82頁。
- 三枝健二・妹尾周三 1985 『石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告－県営農地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第39集、広島県埋蔵文化財調査センター、37～106頁。
- 沢元保夫 1982 「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、51～70頁。
- 潮見 浩 1958 「広島県庄原市鎌寄遺跡の調査」『私たちの考古学』第5巻第1号、1～12頁。
- 潮見 浩 1974 「シカの絵のある弥生式土器」『考古学雑誌』第60巻第2号、73～81頁。
- 潮見 浩・川越哲志・河瀬正利 1971 「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第9集、広島県教育委員会、103～151頁。

- 重松辰治 2007 「山陰地方における墳丘墓出土土器の検討」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、67～88頁。
- 下澤公明・友成誠司 1977 「横見墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第15集、岡山県教育委員会。
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会。
- 妹尾周三 1986 「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会－佐田谷1号墓の調査とその意義を中心として－」『芸備』第17集、17～34頁。
- 妹尾周三 1992 「注口付き脚台付鉢形土器について」『古代古備』第14集、95～115頁。
- 妹尾周三編 1986 「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第25集、10～19頁。
- 妹尾周三編 1987 『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 高橋彰子 1986 「庄原市矢崎古墳測量実習略報」『続トレンチ』第6巻第4号、1～12頁。
- 田中清美 1997 「弥生時代の木槨と系譜」『堅田 直先生古希記念論文集』真陽社、109～127頁。
- 田中裕貴 2003 「四隅突出型墳丘墓論」『博古研究』第25号、9～30頁。
- 田中義昭・石田為成 2000 「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』第17集、島根考古学会。
- 永井久美男 1996 『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会。
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編『日本先史時代の¹⁴C年代』日本第四紀学会、3～20頁。
- 中村芳昭・向田裕始 1979 『史跡 花園遺跡 ー調査と整備ー』三次市教育委員会。
- 中村芳昭・向田裕始 1980 『史跡 花園遺跡 ー第2次調査と整備ー』三次市教育委員会・三次市文化財協会。
- 仁木 聡 2007 「四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、21～31頁。
- 野島 永 1991 「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集、京都府埋蔵文化財調査研究センター、31～38頁。
- 野島 永 2008 「佐田谷墳墓群2007年度の調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXII、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室、1～3頁。
- 野島 永 2015 「広島県北部における弥生墳丘墓の成立と展開－佐田谷・佐田谷墳墓群の発掘調査を通して－」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』第7号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、1～12頁。
- 野島 永・野々口陽子 1999 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、19～32頁。
- 野島 永・石貫弘泰・小林昂博・辻村哲農・宮岡昌宣 2009 「佐田谷墳墓群(第2次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXIII、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。
- 野島 永・矢部俊一 2010 「佐田谷墳墓群(第3次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXIV、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～39、46～53頁。
- 野島 永・脇山佳奈・齋藤友紀・津田真琴・今津和也・谷口早季・横山瑛一 2011 「佐田谷墳墓群(第4次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXV、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～38、44～51頁。
- 野島 永・辻村哲農・藤井雅大・村田 晋 2013 「佐田谷・佐田谷墳墓群(第6次)調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峽遺跡群発掘調査室年報』XXVII、広島大学大学院文学研究科帝釈峽遺跡群発掘調査室・考古学研究室、27～48、55～64頁。

- 平井泰男 1997 「河道6」『窪木遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120、岡山県古代吉備文化財センター、211～221頁。
- 平井泰男 2002 「備中南部における弥生時代中期後葉から後期前葉の土器編年」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』上巻、古代吉備研究会、389～410頁。
- 広島大学測量実習参加学生一同 1982 「広政古墳群測量実習について」『続トレンチ』第6巻第1号、1～5頁。
- 福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号、81～106頁。
- 藤田広幸 1988 『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第68集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 藤野次史編 1983 『旧寺古墳群測量報告』広島大学文学部考古学研究室。
- 古瀬清秀 1991 「広島県」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社、336～337頁。
- 古瀬清秀・竹広文明・野島 永 2008 「佐田峠墳墓群2007年度の調査」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅱ X、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、1～3頁。
- 古屋紀之 2007 『古墳の成立と葬送祭祀』雄山閣。
- 松井和幸編 1999 『和田原D地点遺跡発掘調査報告書』(財)広島県埋蔵文化財センター調査報告書第186集、簡易保険福祉事業財団・庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。
- 松村昌彦 1979 「戸宇大仙山遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2)、広島県教育委員会。
- 吉川 正 1998 「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」『島根考古学会誌』第15集、1～20頁。
- 脇山佳奈・今福拓哉・小森由佳利・野島 永 2012 「佐田峠墳墓群(第5次)の調査」『広島大学大学院文学研究科 帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』X XVI、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、21～37、42～46頁。
- 渡邊貞幸 2003 「四隅突出型弥生墳丘墓の「突出部」」『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論文集—』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁。
- 渡邊貞幸 2007 「まとめにかえて—四隅突出型墳丘墓概説—」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、199～205頁。
- 和田晴吾 1989 「葬制の変遷」『古代史復元』第6巻、講談社、105～109頁。
- 和田晴吾 2003 「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究—葬制の比較研究—』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 課題番号11410108、3～29頁。
- Bronk Ramsey, C., 2009. “Bayesian Analysis of Radiocarbon dates” *Radiocarbon*, 51(1), pp.337-360.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E., 2009. “IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP” *Radiocarbon*, 51, pp.1111-1150.

要 約

The Sata-dao group of graves with burial mound, where the excavations were carried out, is located in the urban area on the east side of Shōbara city in the northern part of Hiroshima Prefecture. The group was built between the end of the last third of the Middle Yayoi period (1st century BC) and the first third of the Late Yayoi period (1st century AD).

A series of excavations yielded the following results: Sata-dao No. 1 and 2 are square-shaped ditch-enclosed slightly elevated burial precincts (*hōkei shūkō bo*); No. 3 is a grave with rectangular burial mound and four corner projections (*yosumi toshtsugata funkyū bo*); No. 4 is also a grave with rectangular burial mound and four corner projections, but has subsequently been modified and altered into a square-shaped burial mound; No. 5 is a square-shaped ditch-enclosed slightly elevated burial precinct (*hōkei shūkō bo*), where on the inside of the ditch-enclosed space a grave pit was confirmed.

Towards the end of the last third of the Middle Yayoi period after repeated burials of several individuals, the burial mound of the Sata-dao No. 3 grave was completed. At grave No. 4, which is from the same phase, in the lower strata of the burial mound the surface of the excavation of a grave pit could be confirmed. In other words, it became clear, that at the graves No. 3 and 4 with rectangular burial mound and four corner projections, grave pits were first excavated before the burial mound was finally taking shape. Then the deceased persons were buried within and thereafter the grave pits were backfilled with the soil of the pit excavation. The so repeated iterations of grave pit excavation, burial and backfilling gradually produced the mound. However, on the other hand at Sata-dao grave No.1 and 2 the burials took place after the earthworks of the mound were nearly completed.

According to the results of the surveys, within the same group of graves one could confirm that the construction methods of the burial mounds changed: from the type, where the mound and the burial facilities are simultaneously constructed [co-occurrent progression type] of the end of the last third of the Middle Yayoi period to the type, where burial mound construction proceeds first [“mound first” type] of the first third of the Late Yayoi period. It became clear that is a rather rare group of graves with burial mound. This group is not only constructed during a relatively early stage of Yayoi period graves with burial mound, but also it became obvious that this is a very important site, if one is taking into consideration the development of construction methods of burial mounds of Yayoi period graves. Hereafter, for an understanding of the development of construction methods of burial mounds of Yayoi period graves the site is offering important insights.

第4表 佐田峠1号墓墳頂平坦部r調査区(第14図1・2)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第7層	黒褐色土	7.5YR3/2	弱	弱	砂質土をベースとする。表土直下の層であり、根が混じる。m調査区第7層(第9表)と同層。	1号墓盛土
第32層	にぶい黄褐色土	10YR5/4		弱	シルト質土をベースとし、砂はほとんど含まない。クサリ礫を若干含む。一部に根が混じる。	1号墓盛土
第33層	黄褐色土	10YR5/6	やや弱	強	シルト質土をベースとし、5mm程度のクサリ礫を多く含む。上面は1号墓の全遺構の検出面に相当する。	1号墓盛土
第34層	暗褐色土	10YR3/3	やや強	強	シルト質土をベースとし、3mm程度のクサリ礫を含む。一部黒色土を含む。	ST09埋土
第35層	明黄褐色土	10YR6/6	強	やや強	粘土質土であり、2mm以下のクサリ礫を若干含む。	SX11埋土

第5表 佐田峠1号墓南端n調査区(第14図3)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第2層	暗褐色土	7.5YR 3/3	弱	弱	砂質土をベースとし、2~3mmの礫を5%程度含む。	SD03埋土
第3層	暗褐色土	7.5YR 3/3	弱	弱	シルト質土をベースとし、3mm程度の橙褐色の礫を10%程度含む。	SD03埋土
第4層	黒褐色土	7.5YR 3/2	弱	弱	シルト質土をベースとし、2mm程度の橙褐色のクサリ礫を1%程度含む。クロボク土を多く含む。	SD03埋土
第5層	褐色土	7.5YR 4/4	強	強	シルト質土をベースとし、1mmの橙褐色の粗砂を3%程度含む。地山直上の盛土。	1号墓盛土

第6表 佐田峠1・2号墓隣接部分西端o・p調査区(第14図4、第19図8・9)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第2層	—	—	—	—	—	試掘埋戻し土
第3層	褐色土	10YR 4/4	弱	弱	砂質土、木の根による攪乱を受ける。m調査区第2層(第9表)と対応する。	SD04埋土
第4層	褐色土	10YR 4/4	強	弱	シルト質土をベースとし、砂はほとんど含まない。m調査区第3層(第9表)と対応する。	SD04埋土
第5層	黒褐色土	10YR 2/3	弱	弱	シルト質土であり、2~5mmの礫をやや含む。炭化物と焼土をやや含む。	SD04埋土
第6層	暗褐色土	10YR 3/3	弱	弱	砂質土をベースとし、炭化物とを多く含む。焼土を含む。2~3mmの礫を5%程度含む。	SX05埋土
第7層	暗褐色土	10YR 3/3	弱	弱	シルト質土であり、炭化物を多く含む。焼土を含む。	SX05埋土
第8層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	弱	シルト質土であり、5~20mmの炭化物を多く含む。焼土を含む。	SX05埋土
第9層	褐色土	10YR 4/3	強	強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	1号墓盛土
第10層	褐色土	10YR 4/4	強	やや強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	1号墓盛土
第11層	暗褐色土	10YR 3/4	強	強	粘土質土をベースとし、0.1mmの細砂を5%程度含む。	1号墓盛土
第12層	暗褐色土	10YR 3/4	強	やや弱	粘土質土であり、木の根による攪乱を一部受けている。	1号墓盛土
第13層	褐色土	10YR 4/4	強	やや強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	1号墓盛土
第14層	褐色土	7.5YR 4/3	弱	弱	砂質土であり、グライ化した土をブロック状に含む。地山土が一部流出していると考えられる。	自然堆積土

第15層	褐色土	7.5YR 4/3	弱	強	シルト質土であり、0.1mm程度の黒色の細砂を5%程度含む。	1号墓盛土
第16層	褐色土	10YR 4/4	強	強	シルト質土であり、表土下の層であり一部に木の根の攪乱を受ける。	1号墓盛土
第17層	褐色土	10YR 4/4	強	やや強	シルト質土であり、一部黄褐色土を含んでいる。	1号墓盛土
第18層	褐色土	7.5YR 4/3	弱	弱	砂質土をベースとする。	自然堆積土
第19層	褐色土	10YR 4/4	強	強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。	2号墓盛土

第7表 佐田峠2号墓墳頂平坦部q調査区(第19図5)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第6層	黄褐色土	10YR5/8	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。m調査区第6層(第9表)に対応する。	2号墓盛土
第20層	褐色土	10YR4/4	弱	やや強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第21層	暗褐色土	10YR3/4	弱	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第22層	褐色土	10YR4/6	弱	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第23層	黄褐色土	10YR5/8	やや強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	流土
第24層	明褐色土	7.5YR5/8	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第25層	橙色土	7.5YR6/8	強	弱	シルトをベースに、細礫～中礫が2%程度含まれる。	2号墓盛土
第26層	明褐色土	7.5YR5/8	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。上面は2号墓の全遺構の検出面に相当する。	2号墓盛土
第27層	黄褐色土	10YR5/6	強	弱	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第28層	黄褐色土	10YR5/6	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第29層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	強	弱	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第30層	褐色土	10YR4/6	強	強	シルトをベースとし、礫はほとんど含まない。	2号墓盛土
第31層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	強	強	固くしまったシルト土。	自然堆積土

第8表 佐田峠2号墓北端l調査区(第19図6)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第2層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	弱	やや強	砂質土をベースとする。	自然堆積土
第3層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	弱	弱	シルト質土で、1mm程度の粗砂を5%程度含む。	SD01埋土
第4層	褐色	10YR4/4	弱	弱	シルト質土をベースとし、砂はほとんど含まない。	SD01埋土
第5層	暗褐色土	10YR3/4	弱	弱	シルト質土をベースとし、砂はほとんど含まない。	SD01埋土
第6層	暗褐色土	10YR3/4	やや強	強	粘土質土をベースとし、砂はほとんど含まない。	SD01 初期流土
第7層	暗褐色土	10YR3/3	強	強	粘土質土をベースとし、1mm程度の粗砂を5%程度含む。	SD01 初期流土

第9表 佐田峠1・2号墓隣接部分中央m調査区(第19図7)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第2層	黒褐色土	10YR3/2	弱	弱	砂質土をベースとする。o調査区第3層(第6表)に対応する。	SD02埋土
第3層	黒褐色土	10YR2/3	やや強	弱	シルト質土をベースとし、砂はほとんど含まない。北側はやや厚く堆積する。o調査区第4層(第6表)に対応する。	SD02埋土
第4層	暗褐色土	7.5YR3/3	弱	強	粘土質土をベースとし、砂はほとんど含まない。一部黒色土含む。南側は比較的厚く堆積する。	SD02埋土

第5層	黒色土	10YR2/1	やや強	強	シルト質土であり、砂はほとんど含まない。クロボク土を多く含む。	SD02埋土
第6層	褐色土	10YR4/4	弱	強	シルト質土であり、砂はほとんど含まない。地山直上に堆積する。	2号墓盛土
第7層	黒褐色土	7.5YR3/2	やや強	強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。表土直下の層であり一部根の攪乱を受ける。r調査区第7層(第4表)と同層。	1号墓盛土
第8層	暗褐色土	10YR3/3	強	強	粘土質土であり、砂はほとんど含まない。地山直上に堆積する。	1号墓盛土

第10表 佐田峠3号墓 a - e 調査区 (第23図1・2、第24～27図)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第2層	褐色土	7.5YR 4/3	弱	弱	3号墓の盛土に特有の黒ボク・キビ土土粒の混入が無く、かなり練られた状態になっていることから、再堆積土の可能性が高い。	攪乱土
第3層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや弱	やや弱	1～3mm程度のキビ土土粒を含む(約10%程度)。	盛土
第4層	黒褐色土	7.5YR 3/1	やや弱	強	0.5～1cm程度の黒ボク土粒(30%程度)、1～2cm程度のキビ土土粒(30%程度)を含む。	ST02封土
第5層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや弱	強	1～5cm程度の黒ボク土粒(30%程度)、1～3cm程度のキビ土土粒(30%程度)を含む。	ST02封土
第6層	黒褐色土	7.5YR 2/2	やや強	やや弱	0.5～1cm程度の黒ボク土粒(30%程度)、2cm程度のキビ土土粒(30%程度)を含む。	ST02封土
第7層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	弱	2cm程度の黒ボク土粒(40%程度)、5mm程度のキビ土土粒(40%程度)を含む。	ST02 木棺の封土
第8層	黒褐色土	10YR 2/2	やや弱	やや強	5mm以下の黒ボク土粒(30%程度)、3cm程度のキビ土土粒(50%程度)を含む。他の層にくらべ、キビ土土粒の量が多い。	ST02 裏込め土
第9層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	やや強	均質な黒ボクの土。	ST02 裏込め土
第10層	黒褐色土	10YR 2/2	やや弱	やや強	第8層とほぼ同じ土。	ST02 裏込め土
第11層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	やや強	第9層とほぼ同じ土。	ST02 裏込め土
第12層	黒褐色土	10YR 2/2	やや弱	やや強	第8層とほぼ同じ土。	ST02 裏込め土
第13層	黒褐色土	7.5YR 2/2	やや弱	やや弱	均質な土。	ST02 木棺痕跡
第14層	黒褐色土	7.5YR 2/2	弱	強	5mm以下のキビ土土粒(30%程度)を含む。	ST02 棺内埋土
第15層	暗褐色土	10YR 3/4	強	強	1mm程度のキビ土土粒(30%程度)を含む。	ST02 棺内埋土
第16層	黒色土	10YR 1.7/1	ほぼ無し	やや強	黒ボク土の旧表土層。	旧表土
第17層	暗褐色土	10YR 3/4	ほぼ無し	強	2cm程度の黒ボク土粒(10%程度)、5mm以下の黒ボクの土粒(30%程度)を含む。	ST03封土
第18層	暗褐色土	10YR 3/4	ほぼ無し	強	1cm以下のキビ土土粒(40%程度)を含む。	ST03 木棺の封土
第19層	黒褐色土	10YR 2/2	やや強	強	1mm程度の黒ボク土粒(30%程度)、1cm以下のキビ土土粒(40%程度)を含む。	ST03 裏込め土
第20層	黒褐色土	10YR 2/2	やや強	強	1mm程度の黒ボク土粒(10%以下)、1cm程度のキビ土土粒(50%程度)を含む。	ST03 裏込め土
第21層	暗褐色土	10YR 3/3	やや弱	やや強	黒ボク土粒はほとんど含まない(1%以下)。1mm程度のキビ土土粒(40%程度)を含む。	ST03 棺内埋土
第22層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	やや弱	5mm以下のキビ土土粒(20%程度)を含む。	ST03 棺内埋土
第23層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	やや弱	1mm以下のキビ土土粒(10%以下)を含む。	ST03 棺内埋土

第24層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	やや強	5mm以下のキビ土土粒（10%程度）を含む。	ST03 裏込め土
第27層	黒褐色土	7.5YR 3/2	弱	やや強	1mm以下の黒ボク土粒（40%程度）を含む。	盛土
第28層	黒色土	10YR 1.7/1	弱	やや強	1mm以下のキビ土土粒（30%程度）を含む。	盛土
第29層	黒褐色土	10YR 2/2	ほぼ 無し	やや強	ややキビ土の混ざった黒ボク土層。第16層との境界が曖昧で、明瞭に分層することはできない。	自然堆積土
第30層	黒褐色土	7.5YR 2/2	やや強	やや強	盛土とは異なる土層	自然堆積土
第36層	黒色土	7.5YR 2/1	やや弱	強	5mm以上のキビ土土粒を含む。	ST03 裏込め土
第47層	黒褐色土	10YR 2/3	弱	やや弱	1cm程度のキビ土土粒をまばらに含む。第17層の上に乗る、第51層と同一層の可能性あり（根の攪乱があり、層の境目が不明瞭）。	ST05封土
第48層	黒褐色土	10YR 2/3	やや強	やや強	5mm以下のキビ土土粒を含む。棺内の土と棺の封土に分層できると考えられるが、明確に分層できなかったため一層としてまとめた。	ST05 棺内埋土・ 封土
第49層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	やや弱	強	1cm以上のキビ土土粒を多量に含む。	ST05 裏込め土
第54層	黒褐色土	10YR 2/2	やや強	強	粘質土。キビ土土粒は含まない。	ST05 裏込め土
第56層	オリブ褐色土	2.5Y 4/4	やや弱	強	粘質土。木の根による攪乱がある。10cm以上のキビ土土粒を含む。	ST05 裏込め土
第57層	暗オリブ褐色土	2.5Y 3/3	やや強	やや弱	粘質土。木の根による攪乱がある。5mm以下のキビ土土粒がまばらに混じる。	ST05 裏込め土
第58層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	弱	強	砂質土。	SX06 の埋土
第59層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	やや弱	強	0.3～1.5cmの黒色・灰白色・黄褐色・明黄褐色の土粒が存在する。	SX06 の作業面を作る際の埋土
第60層	にぶい灰黄褐色土	10YR 4/2	やや強	やや強	59層と同色・同大の土粒が存在する。	SX06 の作業面を作る際の埋土
第61層	暗褐色土	7.5YR 3/3	やや強	やや強	0.3～1cmの59層と同色の土粒が存在する。	SX06 の作業面を作る際の埋土
第62層	灰黄褐色土	10YR 4/2		やや弱	1.5～2cmの59層と同色の土粒が存在する。61層と接する部分にキビ土、65層と接する部分に黒土が多く混じる。	SX06 の作業面を作る際の埋土
第63層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	弱	やや強	0.1～1cmの59層と同色（黄褐色は含まない）の土粒が存在する。土壌中心にキビ土が多く混じる。	SX06 の埋土
第64層	暗褐色土	7.5YR 3/3	やや弱	強	0.2～1cmの59層と同色の土粒が存在する。	SX06 の埋土
第65層	暗褐色土	7.5YR 3/3	やや強	やや強	0.2～2cmの59層と同色の土粒が存在する。61層との境にキビ土が多く含まれる。	SX06 の埋土
第66層	灰黄褐色土	10YR 4/2	やや弱	強	1～8mmの59層と同色の土粒が存在する。	SX06 の作業面を作る際の埋土
第67層	灰黄褐色土	10YR 4/2	やや強	やや弱	0.5～1cmの59層と同色の土粒が存在する。	SX06 の作業面を作る際の埋土
第68層	明黄褐色土	2.5Y 6/6	ほぼ 無し	強	1cm程度の黒ボク土粒を含む。	盛土
第69層	明黄褐色土	2.5Y 6/6	ほぼ 無し	強	シルト質。	ST07 裏込め土
第70層	明黄褐色土	2.5Y 6/6	弱	強	1cm程度の黒ボク土粒を含む。	ST07 裏込め土
第71層	暗褐色土	10YR 3/3	やや強	弱	シルト質。	ST07 木棺痕跡
第72層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	なし	強	砂質土。	ST07 木棺内流入土

第73層	褐色土	10YR 4/4	やや強	やや強	砂質土。	ST07 木棺内流入土
第74層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	弱	極細砂含む。0.5～1 cm以下のキビ土土粒を含む。	ST07 木棺内流入土
第75層	褐色土	10YR 4/6	やや強	やや強	砂質土。0.5～1 cm以下のキビ土土粒を含む。	ST07 裏込め土
第76層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	強	砂質土。地山層の直上に位置し、旧表土（第16層）と明らかに異なる土。	墳丘斜面盛土
第77層	黒褐色土	10YR 2/3	弱	強	砂質土。旧表土（第16層）とほぼ同じ標高だが土質が異なるため別層とした。	墳丘斜面盛土
第78層	褐色土	7.5YR 4/4	弱	やや強	砂質土。	b, c 調査区 の3度目の 流土層
第79層	黒褐色土	7.5YR 3/2	弱	やや強	砂質土。	b, c 調査区 の2度目の 流土層
第80層	黒褐色土	5YR 2/1	やや強	弱	黒ボク土。	b, c 調査区 の最初の 流土層
第81層	褐色土	7.5YR 4/4	弱	やや強	第78層とほぼ同じ土層。	d 調査区 の2度目の 流土層
第82層	黒褐色土	5YR 2/2	やや強	弱	黒ボク土。第80層と同質の土層。	d 調査区 の最初の 流土層
第83層	褐色土	7.5YR 4/4	やや強	やや強	砂質土。	e 調査区 の4度目の 流土層
第84層	暗褐色土	7.5YR 3/3	強	やや強	砂質土。	e 調査区 の3度目の 流土層
第85層	暗褐色土	7.5YR 3/3	強	やや強	極細砂。	e 調査区 の2度目の 流土層
第86層	黒褐色土	10YR 3/1	ほぼ 無し	やや強	黒ボク土。他の黒ボク土と比べて湿り気がある。	e 調査区 の最初の 流土層

第11表 佐田峠4号墓墳丘g 調査区（第30図1・2、第34図1～9）

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	試掘調査終了後の埋め戻しの後に形成された土層。	表土
第2層	浅黄橙色土	7.5YR 8/6	弱	やや強	試掘調査埋戻し土。部分的に表土が形成される。	攪乱土
第3層	—	—	—	—	試掘調査における未調査部分の表土層。	表土
第4層	褐灰色土	10YR 6/1	弱	弱	もろい砂質土を含む（20%程度）。	攪乱土
第14層	青灰色土	5B 6/1	強	強	粘質土のグライ土をベースとし、酸化した明褐色の土粒が混じる。	SD05埋土
第15層	褐色土	10YR 4/4	やや強	強	細砂質土をベースとし、褐色の砂粒（1%程度）、白色の砂粒（1%程度）を含む。	SD05埋土
第16層	黒褐色土	10YR 3/2	やや強	強	細砂質土をベースとし、白色の砂粒（5%程度）、キビ土（1%程度）を含む。	SD05埋土
第24層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	やや強	強	細砂質土をベースとし、2mm程の白色土粒を含む（2%程度）。	4号墓盛土 他流土
第25層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	やや弱	橙色の中土粒（5%程度）、白色の細砂粒（10%程度）を含む。	4号墓盛土 他流土
第26層	黄褐色土	10YR 5/6	やや強	強	細砂質土をベースとし、一部に黒褐色度が混じる。	4号墓盛土 他流土
第28層	黒褐色土	7.5YR 3/2	やや強	強	極細砂質をベースとし、2mm以下のキビ土（20%程度）とわずかな炭化物を含む。	SD03埋土

第29層	褐色土	10YR 4/4	やや強	強	極細砂質をベースとし、2mm程度のキビ土土粒を含む(30%程度)。	SD03埋土
第35層	黒褐色土	10YR 3/1	強	強	極細砂質をベースとし、キビ土細粒を含む(5%程度)。	SD01覆土
第36層	黒褐色土	7.5YR 3/1	強	強	極細砂質をベースとし、キビ土中粒を含む(10%程度)。第16層及び第28層と対応するものか。	SD01埋土
第37層	灰褐色土	7.5YR 5/2	強	強	極細砂質をベースとし、キビ土の中粒を含む(20%程度)。	SD01埋土
第38層	にぶい黄橙色土	10YR 6/3	やや強	やや強	細砂質土をベースとし、キビ土中粒を含む(15%程度)。4号墓墳丘の流土で第31層に対応する。	SD01埋土
第39層	灰褐色土	7.5YR 5/2	弱	やや強	細砂質土をベースとし、キビ土土粒を含む(5%程度)。	SD01埋土
第40層	橙褐色土	5YR 6/6	やや強	やや強	極細砂質をベースとし、白色細土粒を含む(1%程度)。石列直上に上るようなラインから石列に関連するものか。	石列上置土か
第53層	暗灰黄色土	2.5Y 4/2	弱	弱	シルト質をベースとし5mm程度のクサリ礫を含む。第53～55層はSD01もしくはSD03埋土の可能性も考えられる。	SD02埋土
第54層	明黄褐色土	10YR 6/6	やや強	やや強	シルト質をベースとし、クサリ礫を含む。	SD02埋土
第55層	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	強	弱	黄色・白色のクサリ礫を含む。	SD02埋土
第56層	褐色土	10YR 4/4	強	強	黄褐色・黒色のクサリ礫が不明瞭に混じる。	SD01埋土か
第57層	褐色土	10YR 4/6	強	強	灰色・黒色のクサリ礫を含む。黒色のものが多く斑状を呈する。第33層に対応する層か。	SD01埋土か
第58層	褐色土	10YR 4/4	強	弱	灰黄色・黒色のクサリ礫が不明瞭に入り込み、第34層に対応する層か。	SD01埋土か
第59層	黒褐色土	2.5Y 3/1	やや弱	やや強	シルト質をベースとし、1mm程度のクサリ礫を含む。	SD03埋土
第75層	灰赤色土	2.5YR 5/2	非常に弱	強	3～10mm程度の明黄褐色クサリ礫が不明瞭に混じり合う。	SD04埋土
第80層	灰オリーブ色土	5Y 5/2	非常に弱	強	シルト質をベースとする灰グライ化土で、赤褐色の酸化土を含む。	SD05埋土
第81層	オリーブ黒色土	5Y 3/1	非常に弱	非常に弱い	シルト質をベースとし、5mm程度のクサリ礫を含む。	SD01埋土
第82層	褐色土	10YR 4/4	強	やや強	シルト質をベースとし、5～10mm程度のクサリ礫を含む。	SD01埋土
第83層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	強	やや強	10mm程度までのクサリ礫を不明瞭に含む。	SD01・02埋土
第84層	暗褐色土	10YR 3/3	非常に強	やや強	粘土質をベースとし、クサリ礫の極小粒を多く含み、小粒の黒色土もみられた。	SD01埋土
第85層	褐色土	10YR 4/4	強	強	極細砂質をベースとし、黄褐・黒・白色からなる2mm程度のクサリ礫を15%程度含む。	SD01埋土

第12表 佐田峠4号墓北西隅 i 調査区 (第34図10・11・12・14)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	灰黄褐色土	10YR 4/2	—	—	砂質土で、2～5mmの礫を含んでおり、層全体に攪乱がみられる。	表土
第2層	にぶい黄褐色土	10YR 5/3	弱	—	シルト質で、2～3mmの礫を含んでいる。第1層と同様、攪乱がみられる。	自然堆積土
第3層	暗褐色土	10YR 3/4	やや弱	弱	シルト質で礫はほとんどない。	SD07埋土
第5層	黄褐色土	10YR 5/6	弱	やや強	シルト質で、礫はほとんど含まない。	遺構埋土
第6層	暗褐色土	10YR 3/3	弱	やや強	シルト質で、礫はほとんど含まない。	遺構埋土
第7層	暗褐色土	10YR 3/4	弱	やや強	シルト質で、2mm程度のクサリ礫を1%程度含む。	遺構埋土
第8層	橙褐色土	2.5YR 6/6	弱	やや強	シルト質で、2～5mm程度のクサリ礫を5%程度含む。	置土および整地土

第10層	にぶい黄褐色土	10YR 5/3	ほぼ無	やや弱	シルト質で、砂粒は含まず、1～2mmのキビ土を1～2%程度含む。	SD07埋土
第11層	黒褐色土	10YR 3/1	弱	ほぼ無	黒ボク土に近い層。砂粒は含まず、シルト質でキビ土を含む。	SD07埋土
第12層	暗褐色土	10YR 3/3	弱	弱	砂粒はほとんど含まず、5～10mm程度の黄褐色土・黒褐色土のクサリ礫を20%程度含む。カーボンが少量含まれる。	整地土

第13表 佐田峠4号墓南西隅j調査区(第34図13・15)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	—	表土
第3層	灰褐色土	7.5YR 4/2	やや弱	強	細砂質土をベースとし、もろい砂質土を含む。	自然堆積土
第7層	黒褐色土	10YR 3/1	やや弱	強	シルト質土をベースとする。	SD02埋土
第8層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	強	強	細砂質土をベースとし、2mm程度のキビ土土粒が混じる。	SD02埋土
第9層	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	強	強	粘質土をベースとし、2mm程度のキビ土土粒が混じる。	SD02埋土
第10層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	弱	弱	シルト質土をベースとし、1mm程度のキビ土土粒が混じる。	旧溝埋土か盛土
第11層	褐色土	10YR 4/6	強	強	砂質土をベースとし、3mm程度のキビ土土粒が混じる。	旧溝埋土か盛土
第12層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	強	弱	粘質土をベースとする。	旧溝埋土か盛土

第14表 佐田峠4号墓北側検出遺構SD05・ST10(k調査区)(第36図1・2)

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	腐植土	—	—	—	竹根の侵食を著しく受ける。	表土
第2層	にぶい黄褐色土	10YR 4/3	弱	やや強	堆積範囲が狭い。西の3号墓方向から流れてきたと考える。	自然堆積土
第4層	—	—	—	—	第1次調査終了後の埋め戻し土によって形成された層。竹根の侵食が著しい。	攪乱土
第5層	にぶい黄褐色土	10YR 5/3	弱	強	砂質土をベースとし、2～5mmのクサリ礫をまばらに含む。	SD05埋土
第6層	にぶい黄褐色土	10YR 5/3	やや強	強	砂質土をベースとし、2mm程度のクサリ礫をまばらに含む。	SD05埋土
第7層	にぶい黄褐色土	10YR 5/3	弱	強	砂質土をベースとし、2～8mm程度のクサリ礫をまばらに含む。	SX12埋土
第13層	黒褐色土	10YR 2/3	非常に弱	非常に弱	砂質土をベースとし5～15mmのキビ土土粒をやや含む。黒ボクも含む。	木棺内埋土
第14層	暗褐色土	7.5YR 3/3	非常に弱	やや強	砂質土をベースとしキビ土土粒をやや含む(10%程度)。地山に含まれる明褐色(7.5YR 5/6)の礫(5～15mm)をやや含む(10%程度)。	木棺内埋土
第15層	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	やや強	やや強	砂質土をベースとする。礫などは含まれない。	木棺内埋土
第16層	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	やや強	やや強	粘質土をベースとする。1～3mmの砂粒を含む。キビ土土粒(10mm)をやや含む。	木棺痕跡
第17層	にぶい黄褐色土	10YR 5/4	やや強	やや強	粘質土をベースとし、1～3mmの砂をやや含む。	木棺痕跡
第18層	褐色土	10YR 4/4	強	強	粘質土をベースとし、2～5mmのクサリ礫を多く含む(10%程度)。地山土を裏込めとして使用していると考え。	裏込め土
第19層	褐色土	10YR 4/4	強	強	粘質土をベースとし、1～4mmのクサリ礫を多く含む(10%程度)。地山土を裏込めとして使用していると考え。	裏込め土

写真図版



(1) 佐田谷・佐田峠墳墓群遠景（南東から）



(2) 佐田谷・佐田峠墳墓群遠景（南西から）



(1) 佐田峠 1 号墓近景 (北西から)



(2) 佐田峠 1 号墓近景 (北から)



(1) 1号墓 r 調査区遺構検出状況（東から）



(2) 1号墓 r 調査区ST08検出状況（北から）



(1) 1号墓 r 調査区ST08土器出土状況（北から）



(2) 1号墓 r 調査区ST09・SX10検出状況（北から）



(1) 1号墓 r 調査区SX10検出状況 (東から)



(2) 1号墓 r 調査区SX11検出状況 (南から)



(1) 1号墓 r 調査区中央畦土層堆積状況（西から）



(2) 1号墓 r 調査区SX11土層堆積状況（北から）



(1) 1号墓n調査区SD03検出状況（南西から）



(2) 1号墓n調査区SD03土層堆積状況（東から）



(1) 1号墓p調査区東壁土層堆積状況（西から）



(2) 1号墓p調査区南壁土層堆積状況（北から）



(1) 佐田峠 2 号墓近景 (南西から)



(2) 佐田峠 2 号墓近景 (南から)



(1) 2号墓q調査区遺構検出状況（南から）



(2) 2号墓q調査区ST06検出状況（西から）



(1) 2号墓q調査区ST06土器出土状況（西から）



(2) 2号墓q調査区ST07検出状況（東から）



(1) 2号墓q調査区断ち割り南側土層堆積状況（東から）



(2) 2号墓q調査区断ち割り北側土層堆積状況（東から）



(1) 2号墓1 調査区遺構完掘状況 (北から)



(2) 2号墓1 調査区周溝SD01土層堆積状況 (東から)



(1) 2号墓m調査区周溝SD02土層堆積状況（東から）



(2) 2号墓o調査区墳丘隅角検出状況（南西から）



(1) 2号墓の調査区SX05完掘状況（北から）



(2) 2号墓の調査区SX05土層堆積状況（北西から）



(1) 佐田峠3号墓近景（東から）



(2) 佐田峠3号墓表土掘削状況（北から）



(1) 3号墓 a 調査区標石検出状況（北から）



(2) 3号墓 a 調査区①区出土弥生土器（図版第46（2）・第40図14）（北から）



(1) 3号墓 a 調査区②区出土弥生土器 (図版第46 (2)・第40図14) (南西から)



(2) 3号墓 a 調査区ST02・ST03・SX04検出状況(西から)



(1) 3号墓 a 調査区②区北壁土層堆積状況 (南から)



(2) 3号墓 a 調査区②区北壁ST02土層堆積状況 (南から)



(1) 3号墓 a 調査区①区ST05検出状況（北から）



(2) 3号墓 f 調査区①区標石検出状況（北から）



(1) 3号墓 a 調査区④区南壁土層堆積状況・ST03検出状況（北から）



(2) 3号墓 a 調査区ST05検出状況（東から）



(1) 3号墓b調査区貼石検出状況（南から）



(2) 3号墓c調査区遺構検出状況（南東から）



(1) 3号墓c 調査区突出部検出状況（東から）



(2) 3号墓c 調査区SX06土層堆積状況（南から）



(1) 3号墓 d 調査区貼石検出状況 (北から)



(2) 3号墓 e 調査区ST07土層堆積状況 (南から)



(1) 佐田峠4号墓近景（東から）



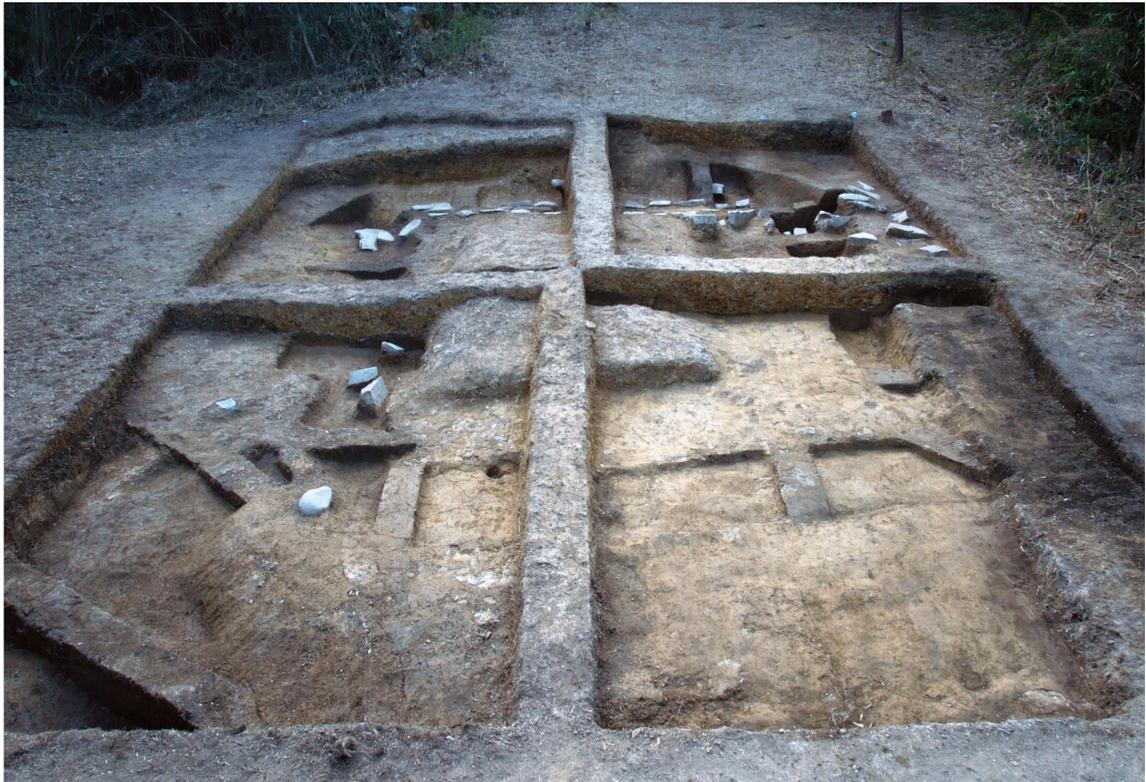
(2) 4号墓g調査区試掘区検出状況（東から）



(1) 4号墓g調査区試掘時埋め戻し土除去状況（西から）



(2) 4号墓g調査区周溝掘削状況（西から）



(1) 4号墓調査風景（東から）



(2) 4号墓g調査区②区北壁土層堆積状況（南から）



(1) 4号墓g調査区①区SD05検出状況（東から）



(2) 4号墓g調査区④区墳丘隅角検出状況（東から）



(1) 4号墓g調査区①区石列・貼石検出状況（北から）



(2) 4号墓g調査区②区石列・貼石検出状況（南から）



(1) 4号墓 i 調査区墳丘突出部検出状況（北西から）



(2) 4号墓 i 調査区墳丘突出部検出状況（南東から）



(1) 4号墓 i 調査区石列・貼石検出状況（西から）



(2) 4号墓 i 調査区石列・貼石検出状況（北から）



(1) 4号墓 i 調査区③区南壁SD07土層堆積状況（北から）



(2) 4号墓 i 調査区④区西壁土層堆積状況（東から）



(1) 4号墓g 調査区①区SD01土器出土状況（東から）



(2) 4号墓g 調査区①区SD01土器出土状況（東から）



(1) 4号墓g調査区④区西壁墓壙掘形検出状況（東から）



(2) 4号墓g調査区④区西壁墓壙掘形検出状況（東から）



(1) 4号墓j 調査区完掘状況（東から）



(2) 4号墓j 調査区SD02土層堆積状況（南東から）



(1) 5号墓h調査区SD03検出状況（西から）



(2) 5号墓h調査区SD03検出状況（北東から）



(1) 5号墓h調査区ST01・02検出状況（西から）



(2) 5号墓h調査区ST01・02検出状況（南から）



(1) 4号墓西側k調査区ST10検出状況（南東から）



(2) 4号墓西側k調査区ST10土層堆積状況（北東から）



(1) 4号墓西側k調査区SX12およびSD05検出状況（東から）



(2) 4号墓西側k調査区ST05掘削調査状況（西から）

(1) 第2次調査、渡邊貞幸
島根大学名誉教授を
囲んで(2008年9月9日)



(2) 第3次調査、下條信行
愛媛大学名誉教授を
囲んで(2009年8月26日)



(3) 第4次調査、第3期調
査終了(2010年8月26日)



図版第41



(1) 第5次調査、浅原利正
広島大学学長(当時)、
山内廣隆文学研究科長
(当時)を囲んで
(2011年9月14日)



(2) 第5次調査、雨のなか
の埋め戻し作業
(2011年9月17日)



(3) 第6次調査終了
(2012年9月16日)



(1) 佐田峠1号墓出土土器



(2) 佐田峠1号墓出土土器



(1) 佐田峠1号墓出土土器



(2) 佐田峠1号墓出土土器



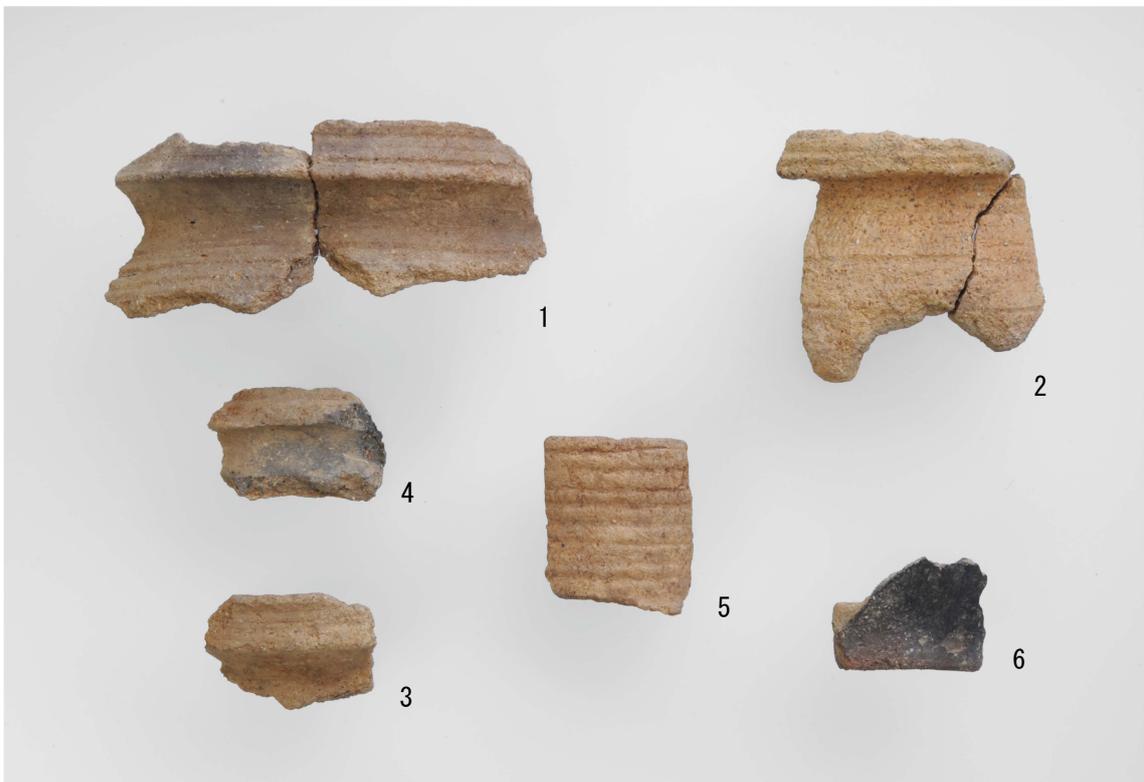
(1) 佐田峠1号墓出土土器



(2) 佐田峠2号墓出土土器



(1) 佐田峠 2 号墓出土土器



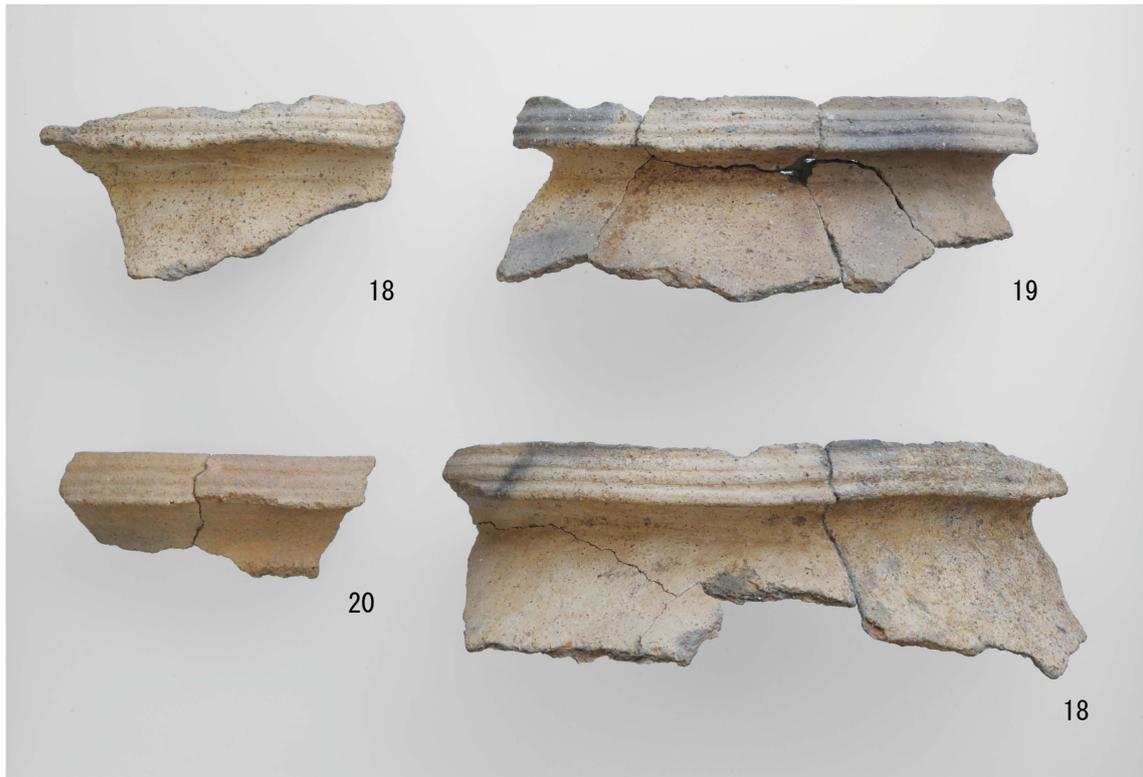
(2) 佐田峠 3 号墓出土土器



(1) 佐田峠3号墓出土土器



(2) 佐田峠3号墓出土土器



(1) 佐田峠 3 号墓出土土器



(2) 佐田峠 3 号墓出土土器



(1) 佐田峠4号墓出土土器



(2) 佐田峠5号墓出土土器



(1) 佐田峠4号墓出土金属器および周辺採集石器・剥片他



(2) 佐田峠1号墓墳丘北西採集銅銭

報 告 書 抄 録

ふりがな	さただに さただおふんぼぐん はつくつちようさほうこくしよ							
書名	佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書							
巻次	調査編 (1)							
シリーズ名	広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第3冊							
シリーズ名	庄原市教育委員会発掘調査報告書第28冊							
編著者名	野島 永							
編集機関	広島大学大学院文学研究科 考古学研究室							
所在地	〒739-8522 広島県東広島市鏡山一丁目2番3号 TEL (082)424-6663 広島大学大学院文学研究科							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
さただおふんぼぐん 佐田峠墳墓群	ひろしまけんしようぼらし 広島県庄原市 みやうちちようさただお 宮内町佐田峠ほか	34210		34° 51' 47"	133° 02' 26"	20080804 ? 20120917	247	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
佐田峠墳墓群	墳墓	弥生	墳墓・埋葬施設		弥生土器・鉄鍬		初期四隅突出型墳丘墓 方形台状墓 方形周溝墓	

2016年3月31日発行

佐田谷・佐田峠墳墓群発掘調査報告書 調査編 (1)

広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書 第3冊
庄原市教育委員会発掘調査報告書 第28冊

編集・発行 広島大学大学院文学研究科考古学研究室
野島 永
〒739-8522 広島県東広島市鏡山一丁目2番3号
TEL・FAX (082)424-6663

印刷 平和印刷株式会社
〒727-0014 広島県庄原市板橋町324-7
TEL (0824)72-1145